

# 瀬尾さんの思い出

一九九五年秋



チェルノブイリ事故調査のために訪れたミンスクのホテルにて  
(1993年12月5日)

## 瀬尾 健さん略歴

- 1940年11月14日 神戸市にて生まれる
- 1953年 3月 大阪府中河内郡盾津町盾津西部小学校卒業
- 1956年 3月 大阪市立高津中学校卒業
- 1956年 4月 大阪府立高津高等学校入学
- 1959年 3月 大阪府立高津高等学校卒業
- 1960年 4月 京都大学工学部原子核工学科入学
- 1964年 3月 京都大学工学部原子核工学科卒業
- 1964年 4月 京都大学大学院工学研究科原子核専攻修士課程入学
- 1966年 3月 京都大学大学院工学研究科原子核専攻修士課程修了  
工学修士
- 1966年 4月 京都大学原子炉実験所計測装置部門助手
- 1970年 3月 赫子さんと結婚
- 1974年11月 暁君誕生
- 1977年 5月 京都大学理学博士
- 1977年 8月 仁史君誕生
- 1983年 1月 ~
- 1984年 3月 ドイツ・ユーリッヒの核物理研究所で客員研究員
- 1984年11月 米国TMI原発事故に関して  
米国フィラデルフィアの研究会で招待講演
- 1986年 5月 女川原発裁判証人
- 1988年 5月 ドイツ・ユーリッヒの  
核物理国際シンポジウムに出席
- 1990年 8月 ~ 9月 旧ソ連チェルノブイリ原発事故調査
- 1992年 2月 「チェルノブイリ旅日記」刊行
- 1993年11月 ~ 12月 旧ソ連チェルノブイリ原発事故再調査
- 1994年 6月 5日 逝去
- 1995年 6月 「原発事故...その時、あなたは！」刊行
- 1995年 7月 1日 瀬尾健さんを偲ぶ集い



真に人間的だった瀬尾さん  
 瀬尾さんについて  
 「瀬尾健さんを偲ぶ集い」の皆様へ  
 瀬尾さんのあまりに早すぎた死を悼む  
 高知大学での瀬尾さん  
 瀬尾さんの思い出  
 敬愛する瀬尾さんへ  
 天国の瀬尾さんへ  
 瀬尾さんへ  
 瀬尾健さん追悼  
 瀬尾さんをしのんで  
 正真正銘の個人主義者  
 かぜ  
 瀬尾さんのこと  
 まっすぐで純真だった瀬尾さん  
 ヤクザなサイエンティスト  
 瀬尾さんと同じ職場にいて  
 瀬尾さんの思い出

伊方反原発訴訟弁護団長 藤田 一良 一〇二  
 伊方原発行政訴訟弁護団 仲田 隆明 一〇六  
 伊方原発取消訴訟弁護団 熊野 勝之 一〇七  
 國學院大學・経済学部 菅井 益郎 一一〇  
 高知大学・理学部・物理学科 佐々木 宏 一一二  
 大阪市立大学・理学部 木野 茂 一一四  
 富山大学・理学部 桜井 醇児 一一七  
 広島修道大学・商学部 馬場 浩太 一二〇  
 鈴峯女子短期大学 加藤 一生 一二二  
 日本獣医畜産大学・数学教室 関田 英太郎 一二五  
 名古屋大学・理学部・化学科 古川 路明 一二七  
 久米 三四郎 一三〇  
 京都大学・工学部 河野 益近 一三五  
 大阪大学・工学部 尾崎 充彦 一三六  
 京都大学・原子炉実験所 小出 裕章 一四一  
 小出 三千恵 一四五  
 京都大学・原子炉実験所 川野 眞治 一四七  
 川野 並子 一五二

瀬尾 赫子 一五七

「瀬尾さん自身の文章」

創刊の辞にかえて  
 つながっているか  
 大学院会結成の意義  
 研究会設置について  
 中国文化大革命について  
 東大闘争と大学の自治  
 伊方原発裁判について 災害評価の欺瞞性  
 スリーマイル島から放出された放射性希ガスについて  
 原発事故と放射能放出  
 チェルノブイリ原発事故による放射能放出とその影響  
 「量子力学入門」読後感想

島之内教会社研 「路」創刊号  
 島之内教会青年会機関誌「たにがわ」第一号  
 原子核大学院会誌 一  
 原子核大学院会誌 三  
 原子炉実験所職員組合サークル誌「現実」八  
 原子炉実験所職員組合サークル誌「現実」二九  
 原子炉実験所職員組合サークル誌「現実」五九  
 反原発新聞第四八号  
 朝日新聞一九九二年一〇月十二日夕刊  
 反原発新聞第一〇一号  
 原子炉実験所職員組合サークル誌「現実」七六

核物理関係論文一覧  
 原子力問題論文等一覧

## 瀬尾健氏の早すぎる死を悼んで

京都大学・原子炉実験所

海老沢 徹

瀬尾さんには昨年末より咳が止まらないという症状がずっと続いていたが、本人は風邪と思っていた。二月末まではほぼ普通に勤務していた。二月末にレントゲン写真を撮り、肺胞から気管支にかけて大きな陰が見つかり、肺ガンの疑いがもたれた。そしてこの三月末精密検査の結果末期の肺ガンという診断を受けた。四月下旬から五月下旬まで約一カ月間自宅療養の後、五月下旬再度入院し、六月五日深夜帰らぬ人となった。あまりに早い逝去であった。彼のご冥福を祈るばかりである。

私は瀬尾さんとは同世代で、彼が京大原子炉実験所に入所以来、物理学研究において、また原子力問題への関わりにおいて共に近い道を歩んできたが、啓発され、教えられることの多い二十八年間であった。彼の存在の大きさを思いながら私から見た瀬尾さんについて語りたい。

彼は物理学研究と同時に原子力問題にも深く関与してきた。しかし、彼の活動の実践上の基盤、思想的な基盤は物理学研究にあった。彼は物理学の研究が好きであった。彼にとつて実験、研究は仕事というより趣味そのものといってよい。彼は実験所では実験室で過ごすことが多かった。彼に連絡を取るときは、研究室でなく実験室に電話すればよかった。

物理学研究では瀬尾さんは入所以来原子核実験、特に原子核分光の分野で活躍した。原子炉で放射化された原子核から放出されるガンマー線の角度相関を測定して、原子核の磁氣的性質あるいは原子核の形状等の原子核構造を研究した。ガンマー線角度相関測定では、その分野のバイオニヤの一人として自ら装置の設計

を行った。磁気モーメントやガンマー線角相関の精密測定から得られた結果について、Ni<sup>57</sup> model あるいは weak coupling model を適用して行った<sup>15)</sup> Ni<sup>57</sup> 核<sup>147, 149, 151)</sup> Pt<sup>195</sup> 核<sup>182)</sup> V<sup>51</sup> 核等に関する核構造の研究は、世界的に高く評価されている。八六年には、全ての原子核に適應する Ni<sup>57</sup> spin potential の新しいパラメーターを発表した。また、この年世界的に定評のある Nuclear Data Sheets (A122) の編者に選ばれている。最近では、彼のこれまでの測定技術の集大成とも言うべきピコセカンド領域の極短寿命核レベルの測定方式を開発した。その装置は<sup>14)</sup> 2核あるいは<sup>214)</sup> 2核等の極短寿命核レベルの研究に早速応用された。九三年には彼はそれらの研究結果を発表し、この分野での今後の活躍が期待されていた。

八二年、瀬尾さんはドイツ・ユーリッヒ研究所に招かれそこに一年半滞在した。彼は原子核の研究とヨーロッパでの生活を家族共々楽しんだ。彼が高校時代からぜひ見たいと思っていた三大建造物、ケルンの大聖堂、キエフの黄金の門、インドのタージマハルのうち、ケルンの大聖堂をこの時見ることになる。キエフの黄金の門は後に見ることになるが、タージマハルを見ることはついに叶わなかった。

瀬尾さんの研究者としての優れた資質とセンスは、実験、研究への彼のパソコン導入に見られる。彼は初期のパソコンが出現するや否や実験、研究に対するその有効性を見抜いた。彼は上原さんの協力のもと、瀬尾マルチと呼ばれたパソコンマルチを開発した。彼は、また、ワープロも同時に開発し、彼の実験、研究にいち早くパソコンを導入した。彼は私に彼のパソコン導入を喜びをもって語ってくれた。私にとってそれはまさに驚嘆すべきものであった。従来、装置の自動化は費用的にも、労力的にも大変なことであった。しかし、パソコンはそれを極めて容易に実現することを可能にした。彼の教えにしたがって、私も早い段階から実験研究にパソコンを導入することができた。それは私自身の実験方法にも革命的な変化をもたらした。今、実験研究にパソコンは不可欠なものであり、ワープロも広く普及している。彼はパソコンの出現と同時にそ

の利用方法を独力で開発したバイオニアであった。このことは彼の業績として表にあらわれることはなかったが、方法論上の変革をもたらす大きな出来事であり、彼の事物の本質を見抜く優れた資質とセンスの良さを示すものとして、私は高く評価する。

瀬尾さんは彼一流の優れた直感と綿密な作業の積み重ねとに基づく研究の進展を実験室の中で楽しみながらいと簡単に実現した。実験室にずっといることができれば、それが彼にとって一番幸せであつたらう。

しかし、社会の状況はそれを彼に許さなかった。日本には、原子力の開発、推進が極めてゆがんだ体制で進められているという状況があつた（このような事情は世界共通であると言ってよい）。物事の正常な発展のためには、推進派と共に批判派を体制の中に内包しなければならぬ。物理学研究においても研究者同志の相互批判は当然のことである。しかし、不幸なことに、原子力の開発、推進は推進派の中に批判派の存在を許さない体制のもとですすめられた。結果的に、推進に都合の良いことだけが知らされ、都合の悪いことは表にでてこないという状況が出現した。いわゆる「過疎地」に押しつけられた原発、その不当性に反対する住民は、推進派である行政、産業界、専門家集団という圧倒的に巨大な推進体制を前にして原発問題の真実を求めて苦慮していた。この状況が彼を実験室から引っぱり出したのである。そこで彼が行ったことは、彼の物理的素養を武器にして隠されたものを表に出すこと、可能な限り事実を明らかにすることそれだけであつたが、それで十分であつた。しかし、このこと自身それほど容易なことではなかったが、彼はそれに挑戦した。

彼は工学的安全性、特に、原子力発電所の災害評価においては日本ではバイオニアの一人である。伊方訴訟のために住民からの要請にこたえて、大型コンピューターを用いて原発災害の評価方法を開発したのは二〇年前のことであつた。災害評価において、用いる方程式は一緒でも彼の方法には推進派の専門家にない特徴

がある。原研で開発されたものは、今でも大型コンピュータを用いたものだけで専門家でないと言算はできない。しかし、瀬尾さんはパソコンの普及を見て、パソコン用のプログラムも開発し、専門家でなくとも計算、評価ができるようにした。従来、専門家だけのものを、多くの人がアクセスできるものに変えた。ここに、瀬尾の方法の特徴が現れている。彼は自分の開発した評価方法を駆使して、住民の前で彼らの疑問に答えると共に原発訴訟においては住民の要請に応えて法廷での証言も行ってきた。彼は、原発災害評価についてすべての人にわかるように一冊の本にまとめていた。今、この本は出版直前にある。

彼の活動は、日本にとどまらない。瀬尾の方法を用いてスリーマイル事故、チェルノブイリ事故の汚染評価を行ってきた。スリーマイル事故ではアメリカの住民からも頼りにされた。八四年にはスリーマイル事故のパブリックファンドからの要請を受け、事故による住民の被曝についてフィラデルフィアの法廷で証言を行っている。

チェルノブイリ事故の真相の解明はまだ始まったばかりである。ここでも、事故隠しは強烈である。その結果、事故から三年以上も経過した後、ベラルーシでは、強度に汚染された地域からの住民避難が開始されると言う異常事態すら発生している。日本の原発推進派の専門家は、事故隠しの国際的な一翼を担っている。彼らは「住民に事故による影響は見られない、存在するのは心理的効果である」と言い放って平然としている。このような事態が瀬尾さんをして実験室から出て行かざるを得なくする。彼は現地と接触しながら、今中、小出という優れた協力者と共に事故解明に取り組んできた。世界的な原発推進機関であるIAEAによる楽観的な報告とは異なり、彼は事故直後からそれが重大な被害をもたらすことを彼の汚染評価に基づいて警告してきた。九〇年、彼は自分の評価方法の確認とより確かなデータを求めて、今中と共にベラルーシを訪れ、彼の地の研究機関との共同研究の可能性を追求した。この時の記録が「チェルノブイリ旅日記」と

して風媒社から出版されている。放射能汚染調査という目的を越えて、社会主義体制崩壊寸前の混乱の中で愚弄される人々、放射能で汚染された土地に住まざるを得ない人々への同情、どこの国にもある官僚性への批判、ロシアの歴史と国民性などがドストエフスキーの「悪霊」のスタブローギンを例に引いてユーモアをもって語られている。それは同時に日本をはじめとする資本主義国への批判ともなっている。なお、念願のキエフの黄金の門探しの顛末も記されている。この本は週刊朝日の書評でも大きく取り上げられた。その中で、評者は「物事に対する著者の真摯な態度のあらわれた本」として絶賛している。彼は私に笑いながら話した「この書評を家族に見せたら皆から大いに笑われた」と。私には笑ってしまった家族の心情が理解できる。九三年には、チェルノブイリ事故による放射能汚染に関するベラルーシとの共同研究も民間財団からの基金を得て本格的に開始された。チェルノブイリ事故の解明は軌道にのったが、その道は遠い。一つの救いは、瀬尾さんが今中、小出という二人の協力者をもっていたことである。彼らには、瀬尾さん亡き後もベラルーシとの共同研究の進展とチェリノブイリ事故の解明をやり遂げる優れた資質と強い意志がある。

瀬尾さんは生き物としての運命のもとあまりに早く逝ってしまった。自分の人生を精いっぱい生き抜いた点で彼に悔いはいはずだが、時間はあまりに短かった。瀬尾さんの御冥福を祈りたい。

(上記追悼文を書くにあたって、川野真治、山田繁両氏のメモを参考にした)

## 科学者としての生涯を全うされた瀬尾さん

京都大学・原子炉実験所 武内 孝之

瀬尾さんとは、大学院時代に一年間同じ研究室に所属し、一年違いで京大原子炉実験所の同じ研究グループに配属されたので、二十九年間身近に接することができました。若い時（高校生の頃？）にキリスト教にもふれ、理解ある牧師に出会い、多くの良き友人達と人生問題について語り合っていた瀬尾さんは、学生時代に既に自分の生き方について、しっかりした考えを確立していたように思われます。その頃、一度瀬尾さんに叱られた思い出があります。それは、この世の中で少数者として生きていく心構えができていなかった私の言い分に対して、そんないい加減な考え方はだめだと言って叱られたのですが、その後の瀬尾さんの生き方を通して、少数者としての生き方を身をもって教えられました。瀬尾さんには、そういう厳しさのある一方、他人の気持ちを思いやり、人の弱さを許すことのできる不思議とも思える優しい所がありました。それは瀬尾さんに出会った多くの人が感じておられることと思います。

瀬尾さんの専門分野は、原子核物理学で原子核構造の実験的および理論的研究が主で、一九八二年にドイツのユーリッヒにある原子核研究所に招かれて、一年半研究を行ったことから分かるように、世界的に高く評価されていました（詳細は文献参照）。そんな頭脳明晰な瀬尾さんは、また先見性にも富んでいたように思います。例えば、反原発活動であり、今一つは、パソコンの利用です。瀬尾さんが原発の重大事故の可能性を言い始めた頃は、そんなことが起こり得るとは思ってもみませんでした。実際にスリーマイル島事

故が起こった時には、彼の言っていたことが本当だったんだなあと納得した次第でした。パソコンについては、初期のパソコンが出現すると、職場だけでなく家庭でも購入し、既存の電動タイプライターを用いたワードプロセッサを開発しましたし、さらにパソコンを用いた波高分析器（通称、瀬尾マルチ）まで開発しました。後にパソコンの普及と共に、いずれも商品化され、一般に普及しているものです。

チェルノブイリ事故が起こった時、瀬尾さんは公表されたデータを用いて放出放射能の解析を行いました。事故現場近くのデータが公表されていなかったもので、一九九〇年に今中さんと二人でベラルーシのミンスクへ出かけて、事故直後のデータが嚴重に保管されているのを確認することができました。一九九三年の秋、民間団体から基金を得ることができ、ベラルーシとの共同研究が開始され、一二月に今中さんと一緒にベラルーシを再訪し、共同研究の交渉に成功して帰国された時は、本当に嬉しそうでした。そして、同じ研究グループに属する私達に、キャビアとロシア産の上等のブランドーを二度もご馳走してくれました。しかし、これが瀬尾さんとの永遠の別れの宴になってしまいました。その年の暮れ頃から、瀬尾さんはよく咳をするようになっていましたが、翌年三月中頃、精密検査のため入院され、四月八日（金）に末期の肺ガンという診断が宣告されました。自分の死を目前にしても科学者としての態度は、いささかも変わらなかったように思えます。抗ガン剤の投与は受けないと決め、東洋医学によるガン治療法の中から、瀬尾さんが最も科学的と判断した漢方薬による治療を受けるために、翌週の火曜日には、のぞみのグリーン車に乗って、奥様と二人で佐賀まで出かけ、翌日診察を受け、一ヶ月分の薬を貰って帰ってきておられました。私はその翌日、病院に家族と共にお見舞いに行ったのですが、瀬尾さんは面会室まで起き出して来てくれました。自分の死に直面しているにもかかわらず、あたかも他人事のように淡々とユーモアさえ交えながら、自分の死について語る瀬尾さんは、私をいたわってくれたのか、余命一年と言われていると語りました（実際は三ヶ月と宣

告されていた)。十五分ばかり色々と話しましたが、旅の疲れもあったのか、「しんどくなったので寝てくるわ」と言って病室に帰られました。一ヶ月前の元気な姿とのあまりの変わりように、もう一ヶ月経ったら、どんなに弱られていることだろうかと心が痛みました。帰りにもう一度病室に立ち寄ると、ベッドの上で起きあがり、無言でじつとこちらを見つめられました。その時ひよっとすると、これが最後になるかもしれないという予感がしました。きつと今生の別れを密かに告げておられたのだと思います。その後すぐ退院され、およそ一ヶ月間自宅で療養されていましたが、ついに食べ物を受けつけなくなり、再入院されました。その際、入院先は秘密にされました。これは、瀬尾さんの私達に対する最後の思いやりだったのだと思います。

瀬尾さんは、心を許しあえる多くの友人に囲まれて、本当に楽しそうに仕事をされていました。そして私にも、楽しい思い出をたくさん残してくれました。瀬尾さん、本当に有り難う。

(参照文献)海老沢 徹、「科学・社会・人間」四九号(一九九四)三二。

(「現実」、七八、一九九四年八月号より一部加筆訂正の上転載)

## 瀬尾さんのこと

京都大学・原子炉実験所 今中 哲二

瀬尾さんがいなくなって一年あまりになる。私としては、瀬尾さんがなくなる前後の茫然とした精神状況からは脱したものの、瀬尾さんを失ったことは、回復しようのない痛手として今後も引きずり続けることになる。瀬尾さんがいなくなって痛感したのは、彼の存在が、私の日常性の一部となっていたことである。瀬尾さんがいるということは、私の生活や思考において暗黙の前提であり、何かあれば彼に相談でき、彼の知識や思考を頼りにできるということが、私の日常性の支えの一つであった。

この一年間は、瀬尾さんがいないという非日常的な事態を、私の日常性として行く過程であった。瀬尾さんの死が、私や私たちにもたらした諸々の痛手を、何かによって埋め合わせるということは不可能であろう。しかし、痛みの風化を単に時間の流れにまかせるのではなく、痛手を引きずり続け、痛手と積極的に向き合いながら、これまで瀬尾さんとやってきた作業を私なりに続けて行こうと思っている。

以下の文章は、原子炉実験所のサークル誌「現実」(七八、九四年八月)に昨年書いたものである。

\*\*\*\*\*

瀬尾さんが最後に原子炉実験所に出てきたのは三月二十二日であった。今年の始め頃、風邪が長引いて咳がとまらない、といていたのが、三月に入って医者に行きレントゲンをとると、肺に影がみつかった。そ

れから、いくつかの病院で検査を受けた結果、医者はガンの可能性が大きい、と言っており、次の日にでも京大病院に入院するかも知れない、といった時点での来所だった。少ししゃべると咳き込み、そして息を整え、話をするともた咳き込む、といった感じであった。本人は、自分はガンではないと思っている、と言っていたが、その判断が間違っている可能性が大きいことは、瀬尾さん自身が一番分かっていたであろう。

しかし、その日が最後の来所になってしまつたとは、その時の私にはまったく予想できないことであつた。瀬尾さんと共同作業を行ってきた私たちのグループは、瀬尾さんのリタイアという事態を受けて、今後如何に対処すべきか相談を始めたが、まさかそれから三ヶ月もしないうちに瀬尾さんの追悼文を書くはめになることは！

瀬尾さんは、私にとって、社会的判断の場においては価値観ベクトルが似通つた仲間であり、サイエンスの場においては見習うべき先輩のような存在であつた。私が原子炉実験所に職を得た一九七六年春、瀬尾さんはちょうど、伊方原発をモデルに原発事故の災害評価計算をやっているところだつた。それから二〇年近く、瀬尾さんとは、原子力安全研究グループの仲間と一緒に、原子力施設の抱える危険性の解明、言うならば、原子力開発がもたらすデメリットを明らかにすることに取り組んで来た。この間、瀬尾さんと私たちは、伊方原発裁判での原告住民支援、TMI事故での放出放射能評価、チェルノブイリ事故での放射能汚染の評価など多くの共同作業を行ってきた。ゴフマン著「人間と放射線」の翻訳でも瀬尾さんの貢献は大きかつた。

原子力開発推進の側からすると、瀬尾さんが取り組んで来たような破局的な原発事故は、起きるはずのないことであり「想定不適當」とされていた。しかし、一九七九年のTMI事故と一九八六年のチェルノブイリ事故は、事故が起きないという推進の側の前提の方こそ不適當であることを事実で示した。ここでは、チェルノブイリ事故と私たちのことについて紹介しておきたい。

チェルノブイリ事故が発生した一九八六年春、どうやら史上最悪の原発事故らしいと判明すると、私たちは、世界中の放射能汚染データを集めにかかった。公表されたものはもちろん、インフォーマルな情報まで手あたりしだいにデータを集め、瀬尾さんを中心にチェルノブイリ事故による放射能汚染の評価にとりかかった。西側ヨーロッパ諸国での汚染の様子は、一九八六年の夏頃までにだいたいのところはつきりしてきたが、東側諸国の汚染、なかでも最も汚染が大きいはずのソ連国内のデータはほとんど出てこなかつた。一九八六年八月ソ連政府がIAEAに事故報告を提出し、事故で放出された放射能量は、事故一〇日後の五月六日換算値にして、希ガスを除いて五〇〇〇万キュリー、そのうちセシウム一三七の量は一〇〇万キュリーとされていた。ところが、私たちの評価では、ソ連国外に沈着したセシウム一三七だけでも約一〇〇万キュリーであつた。そのソ連報告書には、断片的ながらもソ連国内の汚染データも含まれていた。瀬尾さんは、ソ連国外のデータとその報告書のデータをつなぎ合わせながら、大陸規模での放射能沈着パターンを解析し、放射能汚染の全体像を描く仕事に取り組んだ。具体的には、セシウム一三七の沈着密度と原発からの距離との関係を方角別に調べ、さらに、様々な核種グループ別に、セシウム一三七との沈着比を求めるといふ仕事であつた。瀬尾さんらしい緻密な検討と大胆な仮定の結果、事故で放出された放射能量は、長期的な観点から最も問題となるセシウム一三七で四三〇万キュリー、希ガスを除く全核種で一億一〇〇〇万キュリーといふ評価になつた。

一九八六年ソ連政府報告の後、ソ連国内の汚染データは再び出てこなくなつた。私たちは、ろくに測定す

らやられていないのでは、といぶかったほどである。状況に変化が現れ始めたのは、一九八九年の始め頃からである。汚染地域に住む住民の突き上げやソ連国内の政治状況の変化もあり、セシウム一三七に関する詳しい汚染地図などが発表され始めた。より詳細なデータを入手し、それまでの仕事の再評価を進めるため、瀬尾さんがモスクワのクルチャトフ研、私がミンスクのベラルーシ科学アカデミーと交渉を始めた。そうして実現したのが、一九九〇年夏の瀬尾さんと私の現地訪問であった。この時の訪問の様子は、瀬尾さんの著書「チエルノブイリ旅日記」に詳しい。この訪問ではつきりしたのは、ソ連国内の汚染データがないのではなく、単に発表されていない、ということであった。ミンスクの原子力研究所で膨大なデータを前にし、「僕の求めていたものはまさにこれだった」と旅日記で瀬尾さんは述べている。しかし、当時はシークレックの壁がまだ残っていた。

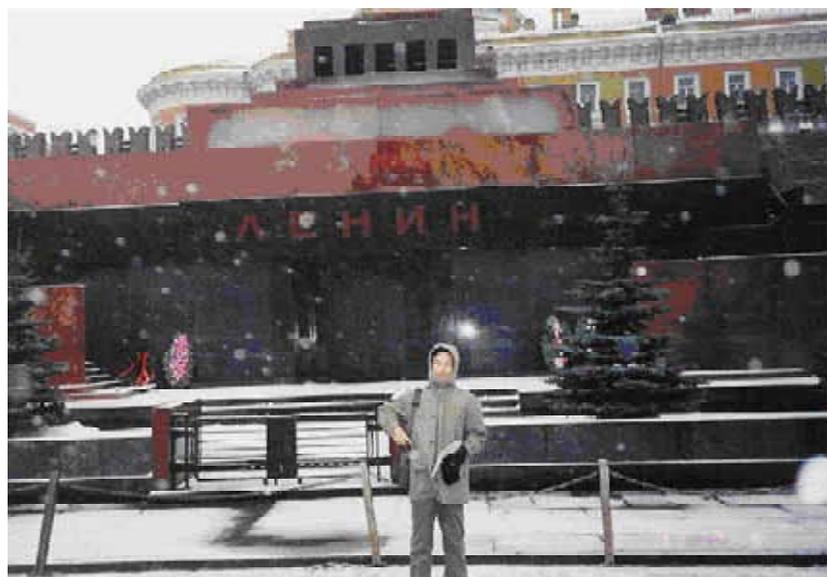
ソ連から発表されているセシウム一三七の汚染地図の信頼性は大きい、というのが一九九〇年の訪問の成果のひとつであった。長期的な被曝影響の話はセシウム一三七で間に合うかもしれない。しかし、瀬尾さんがやってきた沈着量からの放出量の評価、さらには事故直後の短期的な被曝の評価には、短半減期の核種を含めて汚染全体を評価することが不可欠である。一九九一年末にはソ連が崩壊し、どうやらKGB的シークレックはなくなったようだ。そこで、彼らが持っている事故直後のデータに、共同研究という形でアプローチできないだろうか、ということになった。そのためには先立つものが必要である。トヨタ財団に申請した研究助成が採用されることになった。期間は一九九三年十一月から一年間である。

その共同研究の打合わせのため、昨年十一月末から二週間ほど、瀬尾さんと私はミンスクを訪問した。ミンスクに到着した日の気温は、例年より早い寒波の襲来とかで、零下十五度ぐらいであった。エネルギー不足で暖房が削減されたホテルの室内は、はじめの数日、冬場の熊取の戸外なみであった。すでに瀬尾さんのガンはかなり進行していたはずで、かなりこたえたことであろう。ベラルーシ側との話し合いも当初は難航した。経済危機のあおりで、科学アカデミーの研究所といえども、自分で商売をさしたり資金作りをせざるを得ない状況に追い込まれている。話し合いの最初に、日本側が提案しているような研究方法は、ベラルーシ側はとくにやっている、今さら共同研究をやって自分たちにどんなメリットがあるのか、とかまされる。どうやら、どれだけ金を出すのかということらしい。私たちとしては、あくまで共同研究に行ったのであって、データを買いにミンスクに行ったのではない。瀬尾さんと私は、我々のメリットとは、チエルノブイリ事故直後の汚染を再評価しその結果を世界に発表すること以外にない、我々が受けている研究助成はそのためのものであって、ベラルーシ側の言うメリットとやらは何のことか理解できない、と正論で押し切った。これだけで二日かかった。その後、助成金の使い方の話に入り、瀬尾さんが、日本側とベラルーシ側でイーブンな権利を提案すると、向こうも拍子抜けといった感じであった。ベラルーシ側としても忸怩たるものがあったのである。その後の酒宴の席で、向こうのヘッドが、最初の自分の態度は悪かった、ベラルーシの研究者の経済状況の苦しさを理解して赦してくれ、と率直に謝ってきた。

今回の共同研究にベラルーシ側からは、放射線生物学研究所、ベラルーシ国立大学、ラジオエコロジー問題研究所、水気象委員会の研究者が参加している。瀬尾さんの思惑は、それらの研究所が自分のところに取り込んだまま未だに発表されていないデータを、日本側の私たちが媒介役となって引き出し、事故直後の汚染についてまとめることであった。ベラルーシでの共同研究がうまく行けば、次年度にはウクライナとロシアの研究者も含めてトヨタ財団に申請する手筈になっている。しかし、瀬尾さんのチエルノブイリに関する仕事は、今年の一月、データの解析方法についての長文のメモを仕上げ、ミンスクにFAXを入れたところで終わってしまった。

五月二十五日にモスクワから二人の研究者が共同研究のため来日した。瀬尾さんの病気のことはすでに伝えてあり、彼らとしては、是非見舞いに行きたいとのことであったが、すでにそれがかなうような病状ではなかった。瀬尾さんが亡くなったのは、彼らが離日した六月五日の夜であった。成田空港で私は彼らと、瀬尾さんに手紙を書いて宜しく伝えておく約束したが、次の日モスクワに瀬尾さんの訃報を送ることとなった。

瀬尾さんがなくなってもまだ二週間余りである。瀬尾さんを失い、私が抱え込んでしまった空洞のまわりの傷口はまだ癒えてはいないが、瀬尾さんと一緒にやってきたこと瀬尾さんから学んだことを、私なりにこれから生かして行くことが瀬尾さんへの追悼と考えている。



モスクワ、赤の広場、レーニン廟前にて

1993年12月9日

## 瀬尾健君追悼

京都大学・原子炉実験所 水間 満郎

瀬尾君、と呼び、水間さんと呼ばれて来た。本文も、瀬尾君、とさせて頂きたい。

渺茫とした往事の中にまず浮かぶ瀬尾君の姿は、食堂でギターを弾いていたそれだろうか。確か木村毅一先生の送別パーティだった。何人かのグループで奏でるロシア民謡、「川面静かに歌流れ」。次いで、ベトナム反戦学習会、組合ボックス。レポーターの彼の結論は、戦争を止めさせる鍵はアメリカ国民の反戦運動にある、ということだった。当時の私、いや、学習会に集る者の一人のこらざる意識は、「それは夢だ」だったろう。国際連帯でアメリカを追い詰める、それ以外にない、ということではなかったか。しかし、数年を経ずして、彼の発想は現実のものとなった。告別式に参列して、川野さんが彼の生涯を語るのを聞いて、やはりこの二つが瀬尾君の持ち味だったのだと思いついた。

瀬尾君には世話になりつつ放しだった。伊方裁判が始まった頃には一緒に話を聞いていて、「環境影響評価をやって呉れたら」と彼に云われたのだが、私は無力だった。そこで、彼は自分で原子力気象の拡散計算の勉強をしてこの面でも一流のレベルまで行った。私が今科技庁報告に結果を使用しているガンマクラウドの計算コードは彼に作って貰ったものである。この開発の過程で、彼は原研で作られていたガンマクラウドの線量分布の図と合わないことに気付いた。私はこれは、原研の方が計算パラメータの一つにレポートに書かれているのとは違った値を入れたことから生じたものだと思っている。この面での彼の成果は近々出版されると聞いた。瀬尾君は原稿を一応完成させ、こんな風に手直ししたいと言いついていったとか。

ことほど左様に、瀬尾君は頭が良かったと思う。理解が早いという言い方もあるが、結局頭が良い、としか言いようがない。食堂仲間だった私はよく彼に「知能指数二〇〇の人にはかなわない」と言ったものである。もちろん彼は笑って受け流すだけだったが、これは私の本心である。彼の核物理の業績、彼は、同業者組合でも少しは仕事をしておいて、と言っていたのだが、は私の理解を遥かに超えてはいるが、それでも、九三年二月の学術講演会で彼が発表したピコ秒寿命測定の結果の凄さは感じ取ることが出来た。彼もあの仕事には相当な自信を持っていたようで、それは彼の口振りから察せられた。彼は滅多なことでは自分を押出すような口の利き方をすることはなかったが、それが必要な時にまで避けたりするような男ではなかった。私は「あれは凄いのではないか」と云った感想を人に洩したことはあるのだが、彼の生前それを評価する応えが返ってこなかったことは残念でならない。

瀬尾君は何でも知っていた。彼に知ったか振りは通用しなかった。かつて食堂ロビーが食後のくつろぎのサロンであった頃、彼は所謂邪馬台国論争に凝ってよく話題に持出していた。SFも彼の得意だった。私はSFとなるとあれよあれよと何も考えずに読むだけなのだが、彼は物理を基礎に置いて読んでいた。「あの部分は物理を踏まえている、この部分はフィクション」といった具合である。いずれも彼から教わるばかりだった。恐らく彼は、水間はこのことも理解していないのか、という見方を私に対してすることが多かったと思う。彼はいつしか、私に教えるばかり、という話題は避けていたようである。それは彼のやさしさであったと思う。彼が休むようになる少し前、彼と語ったことに「悪魔」命名論議があった。彼は、自分はい頃にキリスト教を知る機会があったから悪魔という名は人名に相応しくないという感覚が身に付いていると語るのだった。唯、彼の語りキリスト教を信仰していた、というように聞えなかったのは私の聞き間違えだったのだろうか。

数年前、頼み込んで瀬尾君に京大職組中執事を引き受けて貰ったことがある。彼は「断つた後の気まずさにはくは耐えられない」といって引き受けてくれた。決して忘れない。

私が瀬尾君にしたことは、彼の著書「チェルノブイリ旅日記」の紹介を、中島篤之助さんが中心になって発行している「原子力ニュース」というサーキュラーに載せて貰ったことと位である。この本の良さを一人でも多くの人に、と考えることだったが、どうやら役には立たなかったようである。彼を偲ぶよすがに転載を許して頂きたい。以下はその全文であり、手は入っていない。

一九八六年四月二六日に発生したチェルノブイリ原発事故による放射能汚染の実態調査と研究者間の相互交流のため、著者瀬尾健さんは同僚今哲二さんと成田を飛び立つ。一



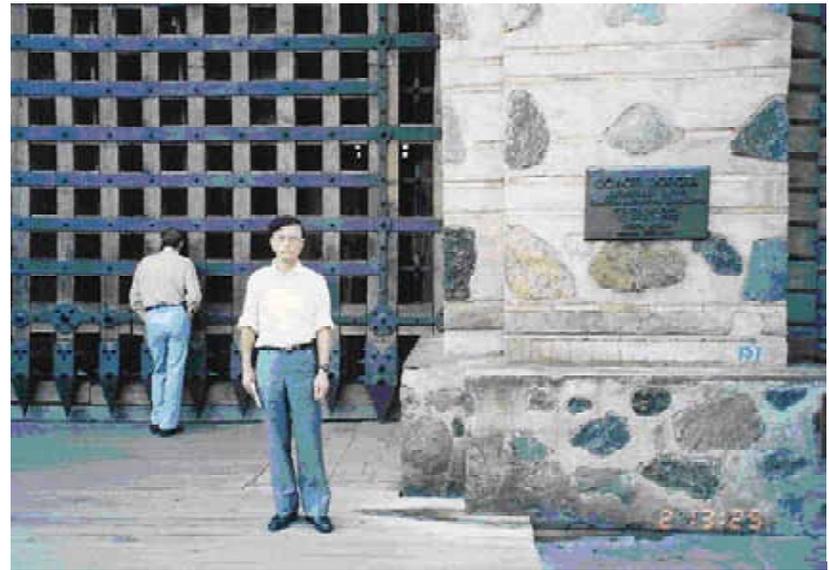
探し当てたキエフの大門（1990年9月2日）

九九〇年八月二日

(水)雨。彼、瀬尾さんは、チエルノブイリ事故調査の他、誰にも話していない目的を持っている。それは、「古く高校時代に遡るその夢は、三つの建物を見たいというものであった。一つはケルンの大聖堂、もう一つはインドのタージマハル、そして三つめが今回実現しそうなキエフの大門である。」

このことだけでも、瀬尾さんが並々ならぬ感性の持主であることを読者は読み取るだろう。また瀬尾さんはこの何年も前に、招かれてユーリツヒに留学した折にケルンの大聖堂を見る機会を持った、優れた業績を持つ研究者である。モスクワに到着して訪れた研究所で、持参した論文の別刷りを彼と同じ分野の研究者に贈ることを忘れてはいない。

以後、瀬尾さんは今中さんと二人で、九月六日までの一六日間をモスクワ、ミンスク、



キエフの大門にて(1990年9月2日)

モギリヨフ、キエフ、チエルノブイリ、またモスクワと旅し、英語が役に立ちにくい地域の労働者、自治体関係者なども今中さんのロシア語で交流しながら、事故の調査を進めていく。このチエルノブイリ旅日記の読者は、瀬尾・今中の二人が、よく準備された器材を活用して放射能汚染の実態について高い水準の調査を行なったことを理解するだろう。文中、その成果は随所に示されている。読者は事故発生後四年(当時)を経過してなお持続している放射能汚染の恐るべき実態を詳しく知ることができる。

しかし、この著書は堅苦しいという先入観で受取られやすいこの種の著書としては意外な一面を持っている。行く先々で逢う未知の人々との暖かい交流を描く筆の運びの柔らかさには、瀬尾さんの豊かな感性と内に秘めた教養がにじみ出ている。中でも、白ロシア原子力研究所のソーニヤと呼ばれる、これも瀬尾さんが「ソーニヤと呼んでいいか」と聞くところから始まるのだが、女性研究者との様々な場面での会話、最後はモスクワは赤の広場を巡りながらの会話のふところの深さはどうであろう。第一、フルネームを聞かされてすぐに「ソーニヤと呼んでいいか」とはそう言えるものではないだろう。その一方で読者は、二人が旅の途中で出くわす様々な出来事に、例えば、昼食(メニューがきちんと記されている)をウオツカを添えて鱈腹食べさせられた後で午後のスケジュールに臨む、といった場面に出くわすと我が身になぞらえてはらはししながら文書の先を追うことになる。ここの感じは、作家北杜夫の出世作となった『どくとるマンボウ航海記』をほうふつとさせる。その他、哀しみの刻まれた場所(ハティニ)、の描写などは是非とも触れたい内容がいくらかもあるが、与えられた紙数が既に尽きた。

本ニュースの読者の方々に是非一読をお願いしたい。今から一年ほど前に出版されたものであるが、内容は決して古びてはいない。一度読むと、あの場面には惹かれるものがある、と幾度でも読み返したくなるよ

うな内容のある著作である。今では普通の書店の棚では見られないだろう。出版社は

〒四六〇 名古屋市中区上前津二の九の一四久野ビル 風媒社

である。読者お買いつけの書店に言い付けて頂ければ有難い。

最後に、紹介者は著者と同じ京大原子炉実験所に勤務する者であることを付言させて頂きたい。

彼は自分の病いについて相当程度聞いていたそうであるが、恐らく最後まで生を諦めてはいなかったと思う、そう思いたい。告別式の司会者はしきりに「招かれる」という言葉を使っていたが、私には瀬尾君は「招かれざる\*」と書きたかったのではないかという気がしてならない。こう考えることは瀬尾君を傷つけることになるだろうか。こう考えでもしないと私の気持は納らない。先に吉田博行さんを失ったときには、惜しい人を亡くしたという感を深くしたのだったが、今、瀬尾君を身边から失ってみるとただひたすら「こたえた」というしかない。

瀬尾君の音楽に対する素養の深さはよく知っているが、多分彼のレパトリーにはなかるう、少しでも気が紛れたらと、純名里沙の“ヴィリアの歌”などの入ったテープを彼の病床に届けて貰ったことがある。果たして彼は興味を持って聞いただけだろうか、それとも、「なんやこれ」と苦笑いしただけだったのだろうか。「売」

(「現実」、七八、一九九四年八月号より転載)

「狭い間から入るなまき。羨びに通じる門は広く……」  
原子核物理学研究者の瀬尾健さ  
と上野真十が先月五日、肺がんで  
亡くなった。  
五十三歳。大  
阪府内の自宅  
で営まれた葬  
儀には約百五  
十人が参列し  
た。「アライによる福音書」の  
言葉が会場で聴かれた。キリス  
ト教徒ではなかったが、びつたり  
似合う人生だった。  
京都大卒原子炉実験所で二十八  
年間、助手の肩で研究をし、原  
子炉推進に警鐘を鳴らし続け  
た。

愛媛県の伊方原発訴訟と  
約二十年前に出合ったのが  
始まりだった。国と産業界  
界、専門家の巨大組織に  
挑む住民から、「頭腦」と  
慕われた。「原子力開発は、安全  
ばかりが強調され、批判を許さな  
いゆがんだ体制が進められてい  
る」と思っていた。伊方原発の事  
故の影響をコンピュータで計算  
し、法廷で証言。昨年十一月に  
は、チェルノブイリ原発事故によ  
る汚染について、現地の専門家と  
共同研究を始めた。

今年一月末ごろ突然せきが止ま  
らなくなった。四月の精密検査



### 淡々と原発への警鐘続け…

で、余命三五月の末期がんと  
診断された。「特に真実を求  
める瀬尾さんの生き方に給  
つて、がんは告知された。  
「自分のやりたいことをや  
り、言いたいことを言っ  
たし、信念を曲げることもな  
かった。人はいはずれ死ぬんだ  
から……」。告知のその日、  
自宅周囲に寝転んで、たんだ  
んと妻に話した。  
病院での化学治療ではなく、自  
家療養を選んだ。副癌中も、執筆  
を続けた。体が食事を受け付けな  
くなっても、食えようと努力をし  
た。「自然に生き、そして  
自然に死んだ」と、妻は振  
り返る。  
世の道も、求めればお  
つた。しかし、おえて進む  
ことはなかった。同じ研究  
クルーの助手は「研究が  
趣味の人だった」と話した。「原  
子力には何万人という人がかわ  
つているが、自由に発言できるの  
は僕らしかないでしょう」。職  
場の雰囲気かも、瀬尾さんの気  
概が伝わる。  
吊問に訪れた人の中には原発推  
進派の人もいた。「批判があるか  
らこそ、究極の安全が保てるので  
ずっと妻に伝えた。」

(裏)

社会部 06 (231) 4649

# 世界の人びとへの贈り物

風媒社 稲垣 喜代志

## 古ぼけた一室での談笑

名古屋を早朝に出発、新大阪、天王寺を経てJR阪和線の熊取にある京都大学原子炉実験所に着いたのは、たしか午前十時半ころだったように記憶している。一九九〇年の初夏のことであった。

電話ではいろいろお話ししたり、論文等を拝読してはいたが、現実には初対面の瀬尾さんはいたって気さくで、懐かしげに研究所の自分の部屋に招じ入れて下さった。

薄暗く、古ぼけた一室でコーヒーを入れて下さり、長時間にわたって「原発事故のシミュレーション」の企画の趣旨や内容の構成をどうするか等話し合ったり談笑したりした。

そのあと、実験所の食堂で昼食をご馳走になり、また話は長々と続いた。

瀬尾さんは、八月に訪ソしてチエルノブイリ原発事故の被曝の調査とソ連の研究者との交流をすることになつていたので、その準備にいま追われている。したがって、私の依頼の要件についてはぜひやりたいが、原稿執筆着手は帰国後しばらく経ってからにしてほしいとのことであった。

もちろん、私は了承した。

## 非凡な文才

瀬尾さんが帰国されて少ししてから、「こんなものを旅行中に書いたんですよ」と、旅の途次に綴った日記の一部を見せられた。一読してみても、瀬尾さんの文才に私は驚いた。

とくに、第二次大戦中にヒトラーのドイツ軍によって村全体が油をかけられ、生きたまま村人全員が焼き殺されて全滅、廃墟と化したというハティニ（カチン）の記念公園を訪ねた折の文書のうち、この村の悲劇の歴史を解説した英文のパンフレットの翻訳の個所が光っていた。

「これはおそらく原文より上手い。名訳ですね。瀬尾さんはきっと文学者になつても相当いい線いっておられたんじゃないですか」と瀬尾さんに言つた覚えがある。これは、お世辞拔きの本心から言つた言葉であつた。

瀬尾さんは本になつたこの日記（『チエルノブイリ旅日記・ある科学者が見た崩壊間際のソ連』）の「あとがき」で、この本を出版することになつたのは「日記の一部を整理して書きととのえたものを見せたところ、思いがけずほめられたのがそもそもの始まりであつた」と書いておられるが、それは右のようないきさつがあつたからである。

## 本格的な人間論

しかし、私は本を出版する立場の人間として、この時いろいろ悩んでいた。たとえどのように重要な調査の記録であつたり、すばらしい文体で書かれたものであつても、四年以上も前に起きたチエルノブイリ原発

事故について書かれた本はわんさと出ているし、「人の噂も七十五日」というように、もう人々の念頭から忘れ去られようとしている。出版して売れるという自信は全くなかった。出すとすれば絶対に赤字覚悟でやらねばならない。売れる、売れないは本の中身とは全く関係ないのである。

それならどうしたらよいか。それから瀬尾さんとの間で意見やアイデアのキャッチボールが始まった。

単なる調査記録では困る、それかといって旅行記仕立ての日記でも困る。さてさてどうしたものか。

しかし、とにかく・やろう・ということになって、少しずつ原稿が整理されて送られて来、また当方の意見を申しのべて書き足したり、書き直したりしてもらっているうちに、九一年にソ連で八月革命が起こってしまった。目の前に起きた一大事件の遠い向こうに押しやられてしまったチエルノブイリを扱うことは、ますます私としてはやりにくくなってしまった。

それとは別に、瀬尾さんの原稿を読んでいくうちに、「これは単なる被曝実態の調査報告とか旅行記ではない」という確信が強まっていった。科学はいかにあるべきかという本格的な命題を旅行記にことよせてたくみに密ませた類まれな科学・技術論であり、人間論であるということ、日本の原発行政への厳しい警告の書であるという思いであった。

#### 魅惑的な女性

が、出版というものが採算を度外視できぬものであるかぎり、どうしたら少しでも読まれる本にするか工夫をこらさなければならぬ。そこで、できるだけ写真を入れたりして、読者の食欲をそそるようなものになろうということになった。

文中に白ロシア原子力研究所を訪れた時の話が出てくる。そこにソフィア・ロマノヴナ・カリニナ（ソニーニヤ）という魅惑的な女性を通訳として登場する。「その女性の写真をぜひ入れたい」と私が言うと、彼は最初は何かやかと口を濁して「いい写真がない」と言う。たとえば、日記の中に彼女はこんな風に書かれている。

「・・・女性が一人目についた。年齢は三〇代半ばか。豊かな金髪、紺のスーツに映えて肌が山吹色に輝いて見える。昔読んだアンナ・カレーニナのイメージがこんなだったなと勝手に連想をふくらませていた」

「笑顔がとびきり良かった。どきまぎしながら握手したが、抜け目なく、ソニーニヤと読んでもいいかと聞くのを忘れなかった。彼女の英語もまた独特の訛があったが、なんといってもそのアルトの甘い響きが良かった」

#### 見事な文学作品

こんな女性の写真がないはずがないと私が執拗に追及すると、彼はついに観念して、苦笑しながら白状した。

「じつは、これは架空の人物なんです。実在する一人の人物を二人に分け、一人を女性に仕立てたんです。そうでもしないと、当時のソ連では彼らが上部機関から睨まれ、迫害を受ける可能性があると考えたからです」

それでやっと理解できた。瀬尾さんはソニーニヤの名を借りて旧ソ連の科学者たちの体制批判の声を代弁させたのであった。そして、資本主義国の科学者たちへのソニーニヤの羨望の眼差しに対して瀬尾さんは文中でこう答えている。

「批判的な目を持つ広範な大衆の存在が不可欠なんです。これがないと、公害や企業の横暴をチエックす

ることができません」

いや、どうしてどうして。文才があるどころか、この日記は実録であると同時に一つのすぐれた・文学作品・でもあったのだ。

#### 病床での原稿の推敲

この本が出来たのが九二年の七月。その原稿の整理とともに最初からの念願だった「原発事故のシミュレーション」の仕事も続けられた。

最初、序章などは、権力と企業の横暴は許せないという激越な調子で書かれていたが、これまでの「原発もの」とは全く異なる、瀬尾さんにしかできない専門分野の研究成果をできるだけ砕いて生の形で客観的に表現していただくようお願いした。瀬尾さんは「これで一般の人々に理解してもらえるだろうか」と小刻みに何度も原稿を送って下さった。少したつと「また手を入れたから」と推敲を重ねた原稿が送られてきた。

そうこうしているうち、昨年三月下旬、突然、ガンで入院されていることを知らされた。赫子夫人からは「ベッドの上で原稿に手を加えている」と瀬尾さんのこの本に賭ける決意のほどを聞かされ、目頭が熱くな

った。  
病院に連絡し在院の日を確めた上、京大付属病院に出向いたのが四月十二日だったが、苦しみをやわらげるために東洋医学の治療に出かけられたとかで、あいにくベッドは空だった。

それからお会いすることもできぬまま、瀬尾さんは二カ月足らずで急いで逝ってしまわれた。

以来一年、今年六月、同じ京大原子炉実験所の小出裕章さんらの御力添えにより、瀬尾さんのライフワ

クともいうべき『原発事故…その時、あなたは!』を無事刊行することができた。

いちばん喜んで下さっているのは瀬尾さんご自身であると思う。

この本の中に瀬尾さんはずっとずっと生きつづけておられます。そして多くの人々の心を揺さぶりつづけることでしよう。

瀬尾さんから世界中の皆さんへの素晴らしい贈り物をどうもありがとうございます。



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

# 狭き門、そして永遠の命

… 瀬尾 健君 召天一周年に

膳所教会牧師 木村 從郎

## 狭門に紫陽花濡れる一年忌

牧師として瀬尾健君の死去とその一年に関わった私の句。去る六月十三日、茨木の御宅に召天一周年祈祷会に出掛けた時のわが膳所教会の狭い正門の情景だった。健君逝去は一九九四年六月五日午後一時五九分。翌六日午後六時御宅にて前夜式（通夜）。翌七日午後一時より告別式、於御宅、出棺、火葬前式、遺骨自宅安置。七月二十三日午後三時、御宅にて五〇日追悼会。年越して三月三十一日午後二時、納骨式を新設成った京都西山霊園瀬尾家墓所で。

「狭門」は告別式で読んだ聖句「狭い門から入りなさい」（マタイ七章十三）を想起して。健君と今生の離れとなったのは五月二十二日、高槻の病院に見舞った日。既に音声が私には聞き分けずらく赫子さんが通訳された。だが健君は終始私の手を握って離さなかった。身をよじりながら紙片を赫子さんから受け取ると、そこに全力で何かを記し私に渡した。「召される」とあった。彼は熱心に話し質問する。「神は一切をご存じか」。私は「その通り」と答えた。「なぜ神は途中で人生を切るのか」。私は旧約のモーセの終わりを示し、神の用いた他の器達も全て途中で終わつたと話した。「なぜだ」と健君は追及する。「栄光を人間たる彼が占めないためと信ずる」と私。痛みが健君を襲つた。彼は「召す」方を信じていた。

一九九二年一〇月二十一日、わが膳所教会は秋期特別伝道集會に瀬尾健先生を講師に迎えた。テーマは

「いま何を知るべきか」 原子力発電の実状 。緻密な資料をオーバーヘッドで説明していかれた。原発の危険性だけは皆わかった。あとの質疑は「それで私達は電力消費をどうするべきか」に集中。「みなさんの課題です。お正月にイチゴを食べなくてもよいと解ることから出発です」。旧約預言者の面影があった。歴史事実の真相を人々に示すこと、その為には権力も恐れず、民衆に受け入れられないことも怖れず、しかも気負うところがない。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、そこから入る者が多い。しかし命に通じる門は狭く、それを見いだす者は少ない」。

狭き門とは難しい学問が出来たことではない。それは誰でもできたなら行こうとした広い道だ。学んだ真実を出世もかえりみず明示していく厳しさを撰びとることだ。それだけで充分だが、瀬尾健君は使命のゆえにスリーマイルに、チェルノブイリに足を運び、苦しむ人々に突き動かされて働いて、「病をその身に負った」（イザヤ五三章）。洗礼こそ受ける機会を得なかったが、彼は自分の置かれた原子力研究で愛を使命とし、愛に殉教した。わからないことをわからないとしながら、人智の越えるところを神にゆだねた。いいかげんな受洗者でないキリスト者であった。

一九六一年三月、私は大阪日本キリスト教団島之内教会伝道師を辞し関東に赴任したが、島之内の三年間でつき合つた高校生達の中に瀬尾健君もいた。優秀な連中だった。いつごろからか「社研」をつくり大山郁夫、末川博の「社会科学基礎講座」を読み合つた。健君も当番はきちんとこなしたが、あまり深入りしなかった。しばらく顔を見せないでいて、ひょっこり一人で私の部屋に来て囲碁をやりましようと言う。こっちが暮好きなのを知つてのこと。「それは死んでいますよ」と彼。こちらは何とか活路を探そうと考えていると、「先生、永遠の命って、ホントにおわかりですか」ときた。石の活きに夢中で私は「わからん」と頭をかかえて言った。健君は追い討ちをかけて「部分は死んでも全体で勝てばいいんです」と説教だ。確かに彼

が暮に関しては先生であつたし、その通りだからしかたない。懐かしい昔日を想つ。瀬尾健君は暮を楽しんだが、私は死んでもまた活きかえることがある暮を彼から教えられて興味をもつた。彼は教会に来て、社研よりも私と暮をする方が本道に近いと青春の日から洞察していたのだった。私は今、答えよう「永遠の命つて、瀬尾君、いま君が生きてるじゃないか」と。現に今、私は彼の僚友が、一年忌に間に合わせて刊行してくれた瀬尾健著「原発事故」その時、あなたは！」を手にしている。これからの日本に彼は生きて語っている。赫子さんと二人の子らに、そして御母堂様に、まことの平安がありますように。

## 瀬尾健さん

つくば市

田中 秀明

瀬尾さんとは高校時バイブルクラスと一緒に活動しました。クリスチャンの人もいましたが、僕らは自由な立場から勉強し議論していました。育ちのよい彼はいつも冷静でユーモアを絶やさずよく考えて発言する人で、大学入学後もしばらく続いた教会のバイブルクラスで信頼を得ていました。彼は京大に進学しマンドリンクラブに入り、彼の演奏を大阪フェスチバルホールへ聞きに行ったことがあります。またバイブルクラスの間と仁川へハイキングや海岸にキャンプに行きました。その後、年賀状のやりとりしかありませんでしたが、いつもどのようなように生きておられるのか、一度お話をしてみたいと思いついていました。そんなおり、瀬尾さんが原発反対運動でもっとも信頼を得ている科学者の一人であると知りました。彼のことですから、自分の仕事上の課題に、まじめに科学的に良心的に取り組み、かつよく考えた結果であるつとすぐに想像できました。

社会主義体制が世界中で崩壊し、自分自身の生き方についても深く考えることがあり、瀬尾さんや高校時代にお世話になった牧師に会いに行こうとしていた矢先に瀬尾さんの訃報を知りました。奥様から最後の出版となった著書を頂き、読ませていただきました。彼は本当に僕らのできなかったこと、科学者として自身の課題をまっとうに追求し、まじめに生きただ人であることを知りました。また巨大科学技術が、人々の幸福から離れて一人歩きをしている現代の恐ろしさを教えてくれました。ちょうど時を同じくして「科学者とは何か？」（村上陽一郎著）が出版されました。彼が生きていたら一緒に議論したかった課題が提起され

ています。本当に惜しい人をあまりにも早くなくしました。

## 「瀬尾君は今も私の心の中で生き続けています」

大分県別府市

木村 欣一郎

瀬尾君が天に召されて、一年が過ぎました。しかし、関西を離れてからここ十数年位は時々村上利行君のお宅で会うという位だったからか、瀬尾君がすでにこの世にいないとはどうしても考えられないのです。昨年三月末に、急に彼から電話がかかってきました。「どうやら肺ガンなんや。末期らしい。週刊朝日の特集号の中に、ガンに効く漢方薬のことが書かれているので調べてくれ。」とのことでした。本人の声は、はつきりしていて明るい明確な声でした。私は内心、ドキッとしたのですが、できるだけ冷静な態度で接しようと心がけました。

幸い、私は日本東洋医学会に入っており、その薬を使用されている九州の某県の先生も会員であり、ちょうど日曜日でしたが、自宅に電話がつながったので質問してみましたら、個人差が強いが、末期で転移していても、進行がストップするか、あるいは良くなる例は五〇%ということでした。「本当に間違いなく、そんなに効くのですか?」「皆さん信じてもらえないんですよ。」「それなら化学療法より有効ではないですか。」「たいていは化学療法やつても思わしくなく、どこでも見捨てられたような人が来られるんですよ。但し個人差があるので使用してみないと分からないんですが…」その夜すぐに、そのまま彼に情報を入れました。「とにかく診察をうけてからきめる。行ってみる。」との返事でした。赫子さんと相談して、二人で新幹線「のぞみ」に乗って行くことになりました。

検査しているデータをできるだけ多く持って行きました。そして診察の結果、彼自身が決断して、「この漢方薬に賭けてみる」ということで、病院を退院し、自宅療養にきりかえました。これから一ヶ月半、彼と赫子さんの闘いははじまりました。

赫子さんのお話では大病院の主治医からどちらにしても、短期間であると言われていたとのこと。従って、本人自身の好きなように協力しようという強い覚悟がうかがわれました。優しい人だなあと感じました。

二週間に一度の診察ということとにかく彼は、かなりの長時間の旅行を気力だけですがんばったのです。

二回目は、赫子さんが入院したため、村上君が付き添って行きました。

五月十五日、ちょうど神戸で日本東洋医学会が開催され、また瀬尾君の服用している漢方薬の臨床報告を、九州の主治医の先生が発表されることが分かっていたので、この時、主治医の先生にお会いして、よく御願いしておこうということを決意して、瀬尾君に久しぶりに会いました。五月十四日、村上利行君宅に泊まり、一緒に午前十時過ぎ頃訪問しました。これが最後のお別れになるとは思ってはいませんでした。彼は薬を服用しようとするが、うまくノドを通らない、ノドが詰まった感じがすると訴えていました。検査データを拝見した限りは、これは重症だとは思いました。私はガンの専門医ではありませんので明確には診断できませんでした。とにかく、「主治医の先生に会ってよく聞いてみる。」と言って、別れ、そのまま、神戸での学会報告会に参加しました。スライドでの報告では他の患者さんの中にはずいぶんと良くなっている人もおられました。その後すぐにその主治医の先生とお話しました。瀬尾君のことについては「これから薬物を本格的に増やして行って、本人が服用可能ならば、状況が好転する可能性があるが、今のところ何ともいえない。」との返答でした。「本人が服用できにくくなっているのは、食道が圧迫されているの

では？」と質問しました。「今度の診察の時に診てみる。」とのことでした。誠実でまじめな人のようなので、「よろしく願います。」と言って別れました。

結局はこれ以後、ほとんど食事も受け付けられなくなり、漢方薬も服用できないし、声が出せなくなりました。あつという間の出来事で、あれよあれよという間に、病状は急変し、結局近くの病院に入院、あつは不帰の客となりました。漢方薬の服用も間にあわないほどの進行の速さだったのです。誠に残念で、友としての私は、何とも言い様のない悲しさでした。結局ガンの進行をほとんどブロック出来なかったのです。

赫子さんは、一ヶ月余でも自宅にいたことが出来たことはせめてもの救いですと言われました。「自宅ががんばる」というのが、彼の希望だったらしいのです。

彼がこの世を去る前、確か六月四日の夜に夢の中で彼は私の前に現れました。「点滴打って苦しんだけど、もう元気になって、退院できた。心配しないでいいよ。ありがと。」という、彼の笑顔と元気のある声なのです。これはいわゆる正夢だったのです。

何か妙だなあと思っていると、六月六日の午前中に赫子さんより電話をいただきました。彼は、あまり何もしていない私にも気を使って挨拶にきてくれたのだといかにも彼らしい優しさです。

思い出せば、高校時代のバイブルクラブ、島之内教会、大学時代、若き日とともに過ごした数々の思い出がよみがえってきます

木村從郎牧師（当時島之内教会の伝道師）の司式で葬儀がおこなわれ、わたしと村上利行君夫妻、三木晃君が出席しました。

彼は自分の学問に忠実にそして科学者としての良心に従って原発の危険性について、研究室に閉じこもる

ことなく、世界中の人々に訴えてきました。キリスト教会を離れてはいましたが、イエス・キリストに従ったのだと思います。九二年、「チエルノブイリ旅日記」はさりげないユーモラスな文の中にも、深刻な内容を含む著書でした。本屋で見つけて、すぐ読みました。あとから彼から贈呈本が送られてきました。

こちらの友人に渡すため、十数冊注文して配りました。私の住んでいる大分県別府市の対岸には、伊方原発があります。もし今年のような阪神淡路大震災のような地震が起きれば、湯の街別府はゴーストタウンになります。以前伊方原発反対の署名活動に参加したことがありましたが、結局は安全性については心配ないということで、押し切られて建てられてしまいました。

本当は原発などやめなければならぬのです。唯一の被爆国であり、チエルノブイリ原発事故の恐ろしい被害をみるならば、直ちにやめるべきです。この問題は一世代だけの問題ではありません。真剣に取り組まなければならない問題なのです。

瀬尾君は科学者として、あくまで冷静に、理性的に訴えています。彼の生涯は、聖書に書かれているように「主よ、主よというものが天国に入るのではなく、ただ天にいますわが父のみ旨を行うものだけが入る。」というものだったのではないかと思えます。

あまりにも若くまだこれからという時に、天に召されてはいるが、私の心の中では復活しているのです。時々身近にいて、「お前、なにしとるんや。しつかりせんか。」と励ましてくれていたような時もあります。私個人は、死後の世界は存在すると信じていますし、あの世というのは、ちょうど鏡の世界のように身近にあり、この世と連続していると信じています。そんなことを信じていない人も、瀬尾君は多くの人の心の中に強く生きているものと思っています。

これからの私の人生の後半において彼のように純粋には生きることができないかもしれないが、友として、

今も、いつも側に現存して、勇気づけてくれていると確信しています。

そして何よりも、愛する赫子さん、ご子息達、家族の方々を見守っていただきたいと祈っています。

身近な友だけに書きたいことが山ほどありますが、どうもうまく表現できないもどかしさをお許し下さい。

瀬尾君これからもよろしく頼みますよ。

## 瀬尾さんの思いで

帝人繊維研究所第五研究室長

松井 亨景

瀬尾さんと出会ったのは一九六一年、彼も私も大学二年のときだったと思います。当時、吉田寮に住んでいた寮生数名が京大マンドリンオーケストラを作ろうと活動を始めました。瀬尾さんはそのときの第一期参加者の一人で、当初からギターが上手く、信頼の厚い主力メンバーでした。パートのトップとして機関車役を担い、後輩の指導にも尽力されました。発足初年度は、白浜や長野県開田村などで合宿練習をし、皆ファミリーのような雰囲気の中でお互いに語り合うことができました。彼の専門は原子核物理で、私は理学部の物理でしたから、個人的にもいろいろ良く話をしました。そして、彼の聡明さと見識の高さにはいつも驚かされました。彼は、人の気に入るような言葉を選んだり、見栄を張ったり、アルコールでハメを外したりすることがなかったのも、ややクールな感じがありましたが、中身は誠実さと責任感に溢れた人柄でした。慣れると、気を使わない分、安心して話ぐできました。

ギターの面でも、私は彼からかなりの感化を受けました。彼はトレモロ奏法の名手で、タルレガのアルハンブラを愛奏していました。アルベニスやグラナドスのスペイン舞曲も彼の演奏を聞いて初めて知りました。また、彼はセンスが良く、マンドリンオーケストラのために団旗をデザインしました。三〇年以上経った今も、毎年十一月の定期演奏会のステージにはこの旗が正面に掲げられています。

残念ながら、もう彼の演奏を聞くことも、話を聞くこともできなくなってしまいました。この一〇年、まったく出会うことがなく年賀状の交換だけなので、健在とばかり思っていました。古い友を失うことは、誠にな

の痛むものです。これからは、毎年、定期演奏会に出席して、旗を見ながら瀬尾さんのことを思い出したいと考えています。

先日の集いの時は、彼の写真の前でギターを弾かせて頂きました。同僚の石丸さんから提案を受け了承したのですが、直後しばらく後悔しました。かなりの人が集ると直感し、年寄の冷水になつたらと心配したからです。しかし、今考え直すと、瀬尾さんの御霊に聞いて頂いて良かったと思つていきます。上出来ではありませんでしたが、途中で止ることもなく最後までつなかりましたので、瀬尾さんもまずは安心されたと思います。

(〒五七六 交野市私部三丁目八の二〇)



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

## 瀬尾 健君を悼む

北海道大学・工学部・原子工学科 松本 高明

一九九四年九月にウクライナ国のキエフ市に立ち寄る機会があった。原子力研究者の一人として、広島、長崎の原爆記念の場所と同じように、一度は訪問しなければならぬとチエルノブイリ原子力発電所を訪問した。あの事故から八年もたっており、日本からはほとんど訪問者はないようであった。発電所見学も多分に観光化してしまっていて、見学の費用も何がしか発電所の収入に勘定されているとのことであった。事故により格納された原子炉を無害化するための方策を議論しようと思ってもいたが、担当者も関心を示さないとのことなので見学だけにして帰ってきた。三〇kmの検問所まで所内の車で送ってもらい、待たせてあった車に乗り換えた。キエフ市内では二、三泊滞在した。

実はその年の六月に瀬尾君の訃報に接し、奥様より頂いていた瀬尾君の著書・チエルノブイリ旅日記・を携帯しての旅行であった。瀬尾君がキエフ市に入ったときは事故四年後なので、三〇kmの検問所付近で土砂の試料を採取して引き返したようであった。キエフ市内のところで瀬尾君の面影を偲ぶ旅行になった。

瀬尾君と小生は、同じ大学の原子核専攻科の学生であり、卒業後も原子力の同じ研究所に職を得、小生が転勤するまでの七年間は同じ釜の飯を食った。彼は学生時代の早くより各方面に多彩ぶりを発揮した。工学系の学生にもかかわらず、社会科学、政治、文学、芸術など幅広いものであった。単に関心を持って勉強するだけでなく、同時に実践するところが彼の魅力であった。

瀬尾君との一番の思い出は、学生時代の海水浴だ。彼の発案で有志が一〇人ほど若狭湾のひなびた漁村に出かけた。純朴な年寄り夫婦が開いている民宿に滞在したが、いま思えば民宿のはしりで、これも彼がどこかで見つけてきた。夜、キャンプファイヤーとなり、彼のお決りのギターで佳境に入り、気が付けば地元の青年達も加わっていた。

また瀬尾君は早くより原子力の安全性についても心を痛め、実践活動を積極的に展開してきたことは周知のとおりである。彼の心の中には、科学者が社会的責任を果たさなければならぬという信念があり、いつも彼の行動をかき立てていたものと思う。学生時代に受けた湯川秀樹先生の影響であろうか。瀬尾君の著書の中に悲痛なまでの彼の責任感が読んでとれる。雑用出世主義の学者の多い最近の大学にあって、自らの信念をつらぬいた瀬尾君の生き方は、少なくとも小生には真似のできない立派な生き方で、そういう立派な友を持ったことを誇りに感じている。瀬尾君と小生は原子力に対する考え方は異なるが、彼の著書（チエルノブイリ旅日記）の一五八ページから引用して座右の言葉としたい。

「……………とうとうやってしまったのだ。あれほど危険だと訴えていたのに……………いったん事故が起これば大惨事になると、口が酸っぱくなるほど……………。僕はこのことを訴え続けてきたこれまでの自分の十数年が、急に虚ろなものになって行くのを感じた。藤田さん（伊方訴訟の住民側弁護団長）は、われわれの力が至らなかつたと新聞でいっていたな……………それはそうかも知れない……………だけど、ここはソ連なのだ、ソ連の原発にまで手がまわるわけがない……………いや、それは言い訳に過ぎぬ……………現に日本の原発は、大事故と背中合わせで、今でも悠々と運転しているではないか……………この事故の責任を「科学者」はどう取るのかと誰かが言っていたな……………少なくとも僕には責任はないぞ……………いや、原

発は今の科学と技術が生み出したものだ。それで飯を食っている自分は、やはり完全に免責されるわけにはいかない……。一般の人たちは、まず「科学者」に責任を全部おつかぶせることができる……。そういう問題の立て方をしても誰も怪しまない……。われわれはどうすればいいんだ……。僕は少なくともやるべきことはやってきた……。十分でなかったかも知れないが……。ここにこうして立っているのも、その軌跡の一つなのだ……。しかし……。」

## 瀬尾さんと私・追悼に寄せて

京都大学・原子炉実験所

小林 圭一

瀬尾さんとは大学時代、同じ学科の同級生である。正確に言えば、卒業したときの同級生である。二人の学年関係が変則的になったのはもちろん瀬尾さんのせいではない。瀬尾さんの大学生活は極めて順調であり、原因は私の方にある。だから、大学で瀬尾さんと机を並べたことはなかった。講座も違った。二人の講座には工学部と理学部ほどの違いがあったので、アカデミックな次元のつながりも無かった。したがって、勉強や研究面における大学時代の瀬尾さんを私はほとんど知らない。質問魔だったという噂を聞いたことがあるくらいだ。あの頃、どのクラスにも一人か二人の質問魔が必ずいて、よく教官を困らせていた。瀬尾さんもそうした一人だったかも知れない。疑問をいい加減に放置できない彼の特質からすると、この噂は事実らしく思われる。私達はいわゆる六〇年安保世代である。すくなくとも教養時代（大学一、二年生）には、誰もが一度ならずデモや集会に参加しており、瀬尾さんもその一人だったと思う。その中からかなりの人が活動家として積極的に動き回っていた。私もその一人であり、瀬尾さんの同級生（私はこのときはまだ同級生でなかった）にも何人か、学生運動に深入りしていた人たちがいた。そうした活動家の中に瀬尾さんの姿はなかった。教養部時代は熱心な活動家というわけではなかったのだろう。他方、マンドリンクラブで大勢の女の子に囲まれ、結構大学生生活をエンジョイしていると言う噂をよく聞いた。当時、ストイックに学生運動に打ち込んでいた私にとって、瀬尾さんは別世界の人だった。学部に進むと、安保闘争も終わったこともあり教養時代の活動家の多くは運動から手を引いていった。ところが、淋しくなった学部の集会などで瀬尾

さんの顔をときどき見るようになった。こうした断片的場面を除き、今、大学時代の瀬尾さんを想いだそうとして出てくるのは私の実感というより、ほとんど他の同級生等から聞いた瀬尾評にすぎないことに気がつき驚いている。

私と瀬尾さんとのつきあいは、実質的に、彼が京都大学原子炉実験所実験所にはいつてから始まったと思う。組合の支部委員、書記長と情宣部長のコンビとしてであった。瀬尾さんは入所後まもなく組合支部の役員、その中でも仕事量の多い情宣部長を引き受けた。当時の組合（京大職組原子炉支部）の活動は、出勤してくる所員に守衛棟の前で毎朝のようにピラを配る仕事が必要なウエイトをしめていた。ピラは前夜のうちに文章を書き、ガリをきり、一枚一枚謄写版で刷って造っていた。瀬尾さんと私は、ピラに書く文章をめぐってよく遅遅くまで議論をした。二人とも独身だったので、時間のことはあまり気にならなかった。当時の日本には、日韓条約問題、佐藤首相訪米問題、米原子力空母エンタープライズ来港問題など国際政治とのかわりで大きな問題が次々起こっていた。私たちはこうした政治問題についていつも議論していた。私が見解を述べると、それに対して瀬尾さんがしつこく食い下がるというパターンが続いた。それでも、瀬尾さんと私との間に共感するところがとても多かった。次第に多くなっていったと言うべきかも知れない。学生時代、私は一時、彼を対立する勢力のシンパではないかと疑っていたことがあったが、その誤解の原因が、自立的な瀬尾さんらしく、自身の立場を性急には決めず両派の見解を対等に調べ自分自身の頭で優劣を判断する手順を踏んでいたことを知った。そうした姿勢はここでも貫かれ、そこから発せられる鋭い疑問ともども私にとって学ぶところが多かった。ピラの書き方ではよく同じ議論を蒸し返した。私は、所内の問題だけでなく政治問題も所員に訴えたいという気持ちにはやっていた。瀬尾さんは政治問題を直裁に打ち出すことに抵抗があり、どのような形で扱うか腐心していた。

京大原子炉実験所にTさんという研究者が入所してきた。彼の提唱で、考え方の通じ合う面々による勉強会「現代思想研究会」を始めた。メンバーはTさん、瀬尾さん、海老沢さん、私、ほかにもう二名いたと思うが想い出せない。六人組の前身ともいうべき集まりであった。最初に取り上げたのは梅本克己の「人間論」だったが、それとも藤本進治の「認識論」だったか、記憶は定かでない。その後、武谷三男や広重徹を取り上げ、主に技術論を議論した。瀬尾さんは大いに理論派ぶりを発揮した。彼が提起する思いがけない疑問は、他の人たちをたびたび驚かせた。それは、私たちが何気なく常識と思いつこんでいた盲点を鋭くつくものばかりだった。たとえば、と思い当時のメモを探したが見つからず、私の記憶もすっかり衰えてしまい思い出せないのが至極残念である。彼はいつも、いい加減な結論は出さず自分で論理的に納得できるまで議論し考えた。この期間に、政治、社会や経済、思想問題に関する瀬尾さんの考え方は急速に深まっていったと思う。入所当時、組合のピラをめぐって議論しあつた頃からすると大変な進歩だった。やがて瀬尾さんは、Tさん転勤後の私たちグループを代表する論客となり、来るべき激動期に健筆をふるうことになる。ふつうの人々が大学をでて職につきどんどん保守化・体制化・個別化する年頃、瀬尾さんはむしろ社会や政治に対する関心を広げ、その中で自分の生きる意味の問いかけをかえって深化させていったように思われる。おもうに、瀬尾さんにとって、大学時代の六〇年安保はさほど大きな体験ではなかったのではないだろうか、私の場合と違って。私達の時代は既成左翼の存在がまだ大きかった。その一方で、既成左翼と時代との矛盾にも気がついていった。だから、大なり小なりそのくびきから自分を如何に解いていくかが課題だった。二人ともそれを大学時代にやり始めたのだと思う。しかし、瀬尾さんと私ではそのやり方も時期も違ったようだ。運動の中に飛び込んだ私は否応なしに迫られたし直感的だった。瀬尾さんは、彼らしく両方の論理をキチンと聞き、十分に時間をかけて冷静に判断しながら解いていったに違いないと私は思う。私にとっては決定的

な体験であった六〇年安保闘争も、瀬尾さんにとっては、生涯にわたって続く自己形成活動の積み重ねの単なる一つにすぎなかったように思われる。そこに瀬尾さんの絶えざる向上力の秘密があるような気がする。

話をもとに戻して、中国の文化大革命、フランスの五月革命、そして日本の大学闘争、七〇年安保闘争、現代文明批判、瀬尾さんは組合関係の文集「現実」などを舞台に、私たちグループの中心的存在として論陣を張った。壁新聞が研究棟階段踊り場の壁を飾ったこともあった。その文章はいつも明快で説得力があった。それは、彼の論理的な思考の結果として自然に発せられた言葉だったからだろう。彼と同年に入所した多くの実験所研究者がつきつき昇格していくなか、彼とともにただ二人だけ助手のままにほっておかれたF氏は、瀬尾さんに対しとりわけ思いが強かったようである。そのF氏が瀬尾さんの本（「原発事故…その時、あなたは！」、風媒社）と私の本（「高速増殖炉もんじゅ・巨大核技術の夢と現実」、七つ森書館）とを購読してくれた、・小林さんの本は読むのに時間がかかったけど、瀬尾さんの本は一気に読んでしまった・と言っていた。これは、瀬尾さんの優れた文章力の一端を示した事実といえるだろう。私たちのグループは、大学闘争に批判的立場をとる実験所当局や教授層、組合主流と対立するようになっていった。大学闘争において私たちは、グループとして所内での論争活動以外目だった活動をしたわけではない（個々人は別として）。だが、全共闘側学生が提起した問題を原子力関係研究者としていかに受け取るかという議論の帰結として、やがて反原発活動に具体的に関わっていくことになる。これまで所内に限定されていた活動から外へ向かって動き出したのである。グループがそうした発展をとげた基礎には、瀬尾さんが活躍した「現代思想研究会」における現代技術論の議論が重要な役割をはたしたことは疑いない。ほどなく私達グループは、川野さん、大学闘争を経験した小出さん、今中さんを迎え、通称「六人組」といわれるようになり、反原発をはつきり唱ったグループとして生まれ変わった。反原発活動における瀬尾さんの活躍については他の人の文で存分に語

られると思うのでここでは触れないことにする。

瀬尾さんの思想形成期（と思われる）のうち、一部の時期の一部の範囲に限って私と比較しながら思い出してみた。瀬尾さんの活躍範囲はあくまで理論的領域であったが、彼はいつも、自分の出した結論に誠実だった。いや、誠実であろうとした。それは、私がよく陥るような気負いからではなく自然な気持ちからだ。だから彼自身の現実と、彼はいつも葛藤していた。瀬尾さんが専門（核物理）の研究を本当に好きだったことはまちがいはないが、「六人組」の酒の場で瀬尾さんは、しばしば、純科学的研究心と犯罪的な現代科学技術に対する批判との間で揺れ動く気持ちを覗かせた。言葉の端々ににじみでる苦しさは、かつて私自身も味わった（もつと卑俗な次元であったけれど）ものだけに、聞いていて胸が締め付けられるような思いだった。時と共に彼のうちでは後者の感情が次第に優勢になっていったと私には思える。その結実の一つが遺書となった「原発事故…その時、あなたは！」ではないだろうか。瀬尾さんの人間像を語るにははるかに広い視野が要る。それはとても私の力の及ぶ範囲でない。あえて一言表現するとすれば、瀬尾さんはいつもの自然体だった。瀬尾さんとのつきあいは、彼に関する新たな発見の絶え間ない連続だった。ドイツ留学中の彼からの手紙は本当におもしろく、ヨーロッパの風物や人間についての彼の斬新で鋭い観察を私はいつもちこがれ楽しんだ。そうした人を感動させる感受性や表現も、自然体から発しているような気が私にはするのだ。「チエルノブイリ旅日記」（風媒社）だけではまだ表現しきれないほど多くのものを見せないまま、彼は逝ってしまった。残念だ。



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

## 瀬尾さんの思い出

京都大学・原子炉実験所 武内 孝之

瀬尾さんとは、一年違いでありましたが、大学院で同じ研究室に所属し、同じ職場に就職し、しかも同じ研究グループに配属されましたので、二十九年間身近に接しながら生活してきました。瀬尾さんは非常に思いやりの深い人でしたから、私にも色々と気を使って下さいました。私の修士論文の発表の前に、大学の前にあった喫茶店でお茶をごちそうしてくれました。きっと私の気持ちを落ちつかせようとしてくれたものと思います。瀬尾さんが原子炉に就職された年の九月には立山へ登山に誘ってくれました。二人で登った立山から遠望された富士山は、非常に小さく見えました。瀬尾さんは、ギター部を主催していましたので、ギターの全然出来ない私をも、ギター部の合宿に家族ともども連れて行ってくれました。また私たちの職場では、毎年どこかにハイキングに行く習わしになっていましたが、瀬尾さんが結婚されてから一度奥様をお連れになりました。その時同行していた私の娘と一緒に蟹すきをご馳走してくれました。また次男の方を五才ぐらい時一度お連れになった事もありますが、その時に子供を甘やかすのでなく、毅然とした態度でお子さんに接しておられたのが印象的でした。

瀬尾さんが、昨年の一月末頃から、この頃咳がよくでて困っているんだと、私の所に毎朝のように話に來られるようになりました。二十九年間の瀬尾さんとの生活の中でもこのように毎日話し合ったのは、このときが初めてでした。そのお話の中に小児喘息で苦しまれたご子息の話もよくできました。瀬尾さんは意思の強い人でしたから、少々の風邪ぐらいでは仕事を休んだりされませんでした。毎朝の話の内容は、次

第に病気が悪化しつつあること暗示しておりました。ちょうどその頃、瀬尾さんがドイツ留学中にお世話になった先生が来日されるとかで、連絡等に忙しそうにしておられました。瀬尾さんが検査入院されたのは、その先生が離日されてからになったのではないかと思います。四月初め、平安神宮のしだれ桜が咲き誇っている頃、瀬尾さんの様態がただならぬ事を知らされ、家族ともども見舞いに行きました。瀬尾さんは体がしんどいにもかかわらず、起き出して来て下さって、面会室でしばらく話をしました。その時「自分は死んでもいいと思った。しかし、家族にとっては余りにも若すぎる死ではないか。」とおっしゃって、「ご家族のことを最も気にされているようでした。結局、それが瀬尾さんとの最後の会話になりましたが、ご家族のために懸命に闘病されたのではないかと思います。」

瀬尾さんが亡くなられて一年経ちました。今年には終戦五〇周年に当たりますので、広島、長崎に始まり、マーシャル群島、アメリカ合衆国、旧ソ連などにおける核兵器製造ならびに核実験、さらにはチェルノブイリ原発事故などによる放射線被曝の影響などの特集が、テレビで報道されておりますが、瀬尾さんはこういう事態が起こらないようにと、心から願っておられたのだなあと実感される今日この頃です。

## 謎は解けた!?

京都大学・原子炉実験所

長谷 博友

私が原子炉実験所に助手として着任したのは一九七〇年でした。計測装置部門は核グループと物性グループとに別れていて、瀬尾さんはすでに核グループの助手でした。私は物性グループに所属しました。あの頃は皆若くて、年に一度は部門ハイキングをやっていました。いま、雑然とダンボールにほうり込まれたままの写真の山をひっくり返してみると、ハイキングの時のものも何枚か出てきます。瀬尾さんも写っています。彼は何度か奥さんを同伴して来ましたから、彼のそばで首を傾けて写っている奥さんも若いんです。皆ニコニコしています。瀬尾さんはよく皆を笑わせていました。ハイキングなど楽しかるべき折には特に。それもかなりブラックユーモアぽい、アイロニーの隠し味が利いた一言、二言を云うだけで、さてあとはどれだけおかしく笑えるかは聴く側の知性と感受性にかかっているよとばかりに、目は笑っていてもレスポンスを待っているんですね。関西人は二人寄ると漫才が始まるとよく云われますが、それで云えば瀬尾さんは抜群のツッコミ役でした。しかし、ボケ役にされた側の力量不足がままあって、彼のユーモアが光らないこともあったのは、彼の餌食になってよく恥じをかけた私が知っているのです。

いつの頃からか、私は彼の挙動がちょっと普通と違っていているのに気付きました。部門会議や、実験棟の廊下などで彼に会うたびに。その一つは、真冬でも素足だったこと。まさか通勤電車ではないだろうと思いましたが、それを見ただけで寒くなる素足になんてわざわざ着替える？のだろう。もっとも、私が気付くのが遅かっただけで、ずっと前からそれは彼の奇癖の一つだったかもしれないが。

もう一つは、右耳にしょっちゅうイヤホンをするようになっていたこと。耳でも遠くなったのかと思ひ、こちらに歩いてくる彼に、皮肉っぽくたずねてみました。

「とし？ 補聴器？」

彼はニタツとして、

「ちやうねん、ラジオ」

そのまますれちがいましたが、ウオークマンでもないのに、なにが面白いのだろう。

一カ月ほど前の瀬尾さんを偲ぶ集いには出席できませんでした。同時に出版された遺稿本「原発事故」を小出裕章さんからいただいた。一気に読み終えました。興奮がなかなか冷めないうちに、八ツとしました。そうか！と思ひました。原発事故が不幸にしてどこかで起こったら、いち早く知って、彼のできる限りの対策をすでに決めてあったマニュアルにそって迅速に実行しようと決意していた！ 退屈で耳障りなトーク番組に辛抱して、臨時ニュースを聴き逃すまいとしていたのではあるまいかと。

## 瀬尾先生に学んで

大阪大学・基礎工学部 宮武 陽子

「原発事故…その時、あなたは！」を読ませていただきました。ページ毎にこめられた、先生の・渾身の思い・に圧倒されております。

前著「チエルノブイリ旅日記」を、瀬尾先生ご本人からいただいたのは、一九九三年二月、原子炉実験所 学術講演会で、「BF<sub>3</sub>シンチレータを用いたピコ秒寿命測定の新手法」と題された、先生の講演の後のことでした。当時ちょうど、長谷先生のところに、「ピコ秒時間分解蛍光寿命測定装置」が入って間もなくの頃で、解析の手伝いをさせていただいていた私にとって、講演内容は大変に興味深く、お聞きしたいことがあれこれあり、ご無沙汰続きの無礼も省みず、声をかけさせていただいたのです。先生は、『別刷りが出来たら送るけど、これでよかつたら持つて行く？』と、持ち合わせておられた校正中の論文原稿コピーを下さり、新手法・のためのプログラム作成時の苦労話を、実に楽しそうにお話し下さいました。そのあとで、お仲間の研究室へ寄られ、あの、いつもの飾らない言い方で『これ、あげるわ』と、書棚から取り出された「チエルノブイリ旅日記」を下さったのです。その時私はというと、渡された本をひよいと裏返し、定価を指して『高いですね』などと言ってしまった！思えば今も「赤面、冷や汗」の、生意気、無礼の私の言葉に、先生は、気分を害されるでなく、右手で耳の後ろをかくような、あの、困ったような照れたようなしぐさで『そや、ちよつと高いんや』と言われたのです。

いつも、そのような気取りのない言い方をなさいました。その率直な、飾らぬ物言いの前には、こちらの

どのような慇懃無礼も、気取りも、横柄さも、はったりも、虚飾をはがされ、毒気を抜かれて、空しい実体をさらしてしまつたのだ。

私が大学院生として計測装置部門・故林竹男先生のもとに編入したのは、一九七四年、もう二十一年も前のことになりました。泡箱写真解析がそれまでのテーマで、原子核物理学実験の何ひとつ知らない私に、実験のイロハを経験させようと、林先生は一計を案じられ、私を核グループの全先生方のもとにまず数カ月づつ付かせ、それぞれの実験手法を学ばせたのでした。最初に担当して下さったのが瀬尾先生だった、と思います。

瀬尾先生が最初に出された課題は、原子炉での中性子照射による誘導放射能の計算だった、と思います。なにせ二十一年前のこと。多少(?)、前後関係があやしいかも知れませんが、記憶としてけっこう鮮明に、その時の情景が浮かび上がって来ることから、私にとってかなりな衝撃だったことには違いありません。『...%enriched  $^{235}\text{U}$ 、 $^{238}\text{U}$ 、ニーム2(圧気輸送管 2)で、 $\gamma$ 分照射、これで計算できるはず、やな...』

調べればわかることはおっしゃらない、全く過不足のない課題の出され方でした。私は教科書やら何やら引っぱり出して、忘れてしまつていた、いや持ち合わせていなかったあれこれの知識をかき集め何度も確かめたあと、計算結果をおさるおさる、しかし、ひとり大騒ぎして調べたことをさとられぬよう、精一杯とりますまして持つて行ったものです。

結果について何を言われたかの記憶は殆ど無いのですが、それを受け取った先生は、笑つておられたように思います。

『こういふ所へ、私は来てしまつたんだ』、そんな思ひでした。

それはしかし、後に続くさらに綿密なる『実験前の estimation』の、ほんの序章にすぎませんでした。

『...%程度の精度で結果を得るために、各測定点につき、少なくとも $\sim$ カウンターのデータが必要。』

、仮定したような Decay scheme であるならば、問題のカスケード線の coincidence では、推定、毎秒 $\sim$ カウント得られるはず。一日、 $\sim$ 時間、測定するとして、 $\sim$ 日の計測ですませるために、試料の強さは

、 $\sim$ 、延々と続きました。あげられる一つ一つの数字の向こうに、膨大な知識の蓄積と緻密な検討がうかがわれました。林先生からの教えとも重なって思ひ出される、瀬尾先生のこの『綿密な estimation』の姿勢は、著書「原発事故...」の中に、さらに徹底した形で貫かれているものの原型だったと私には思えます。

常に示された細心の実験姿勢、鋭い議論展開、そのどれもが私には十分に強烈な最初の一撃でした。

「ゆくゆくは、測定データを入力するだけで、避難区域の距離をただちに出力できるようなプログラムを、 $\sim$ 、著書の中のこの一文が、ずっと、心にかかっています。

おそらくは、お仲間のどなたかによって、あるいは多くの読者のうちのだれかによって、お仕事は引き継がれ、ごく近い将来に先生の望まれたとおりのシステムが完成されるに違いないと思います。

・多くのものを我々に残された瀬尾先生に心からの敬意と感謝をこめて、  
一九九五年八月

# 物理研究における瀬尾さんの思い出

京都大学・原子炉実験所

海老沢 徹

瀬尾さんは、原子核物理が専門だが、量子力学の本質、その物理学的な論理についてひとかたならぬ興味を抱いていた。量子力学は相対性理論と共に二〇世紀に成立し、現代物理学の基礎理論を構成するものである。相対性理論は主として宇宙現象に適用され、その理解に役だってはいるが、われわれの生活する地上の世界とは無縁な存在と言って差し支えない。一方、量子力学は、原子核物理、素粒子物理はもとより、半導体や新素材など現代の技術革新をも先導する物理学の基礎理論として不可欠のものであり、われわれの生活とも密接に関係している。量子力学は、このように、様々な物理現象に適用され、その有効性は実証されているにもかかわらず、その論理、すなわち、その理論と物理現象の関係は自明ではなく、その理論自体様々な謎に包まれている（量子力学を利用して研究者の多くはこのことを必ずしも意識していない）。このような量子力学の存在は、瀬尾さんの好奇心にとつて格好の標的であった。量子力学では物理量は波動関数で記述される。彼はその波動関数について「波動関数の挙動一つをとつても驚異に満ちている」と述べ、また、「量子力学の不思議を語れば話はつきない」と彼の量子力学への大きな関心と興味を語っている（以下に述べる「書評」より引用）。

彼は、最近、原子炉実験所のサークル誌である「現実」に並木美喜雄著の「量子力学入門」の書評を書いている。この本は、彼も指摘するように、量子力学の謎に関する優れた解説書である。彼は「書評を 気軽に引き受けたものも、一読してから荷が重すぎるのに気がついた。というわけで今回は読後感想文程度のもので勘弁して頂くことにする。」と謙遜して書き始めている。しかし、その中で量子力学の謎として具体的に書かれている部分は、本の紹介ではなく、彼の見解である（本では、アスベの実験の存在にふれているだけで具体的な内容はふれられていない）。その主要部を引用し、量子力学の謎の一端とそれに関する彼の優れた思考と見解を紹介したい。

「なんといつても量子力学の基本にある考え方は、これまでの常識と真つ向から対立するものである。いくら理解したつもりでも、知らず知らずの内に従来の常識に当てはめて考えてしまうことが多い。常識に反する際だった例は、EPRのパラドクスに関連したアスベ達の実験であろう。偏光が同方向の二つの光子を発生して反対方向に走らせ、十分離れたところでそれぞれの偏光の向きを測るといふ実験である。もし、偏光の向きが決まっている場合、その方向に偏光フィルターを置けば光子は両方とも通過する。九〇度傾けて置けば両方とも通過しない。だが、四五度傾けた場合に奇妙なことが起こる。一方の光子は二分の一の確率で通過したりしなかったりする。これは全く確率的に起こる。他方の光子もその筈なのだが、奇妙なことに一方が通過したら他方も必ず通過し、一方が通過しなければ他方も通過しないのである。まるで、二つの格子がお互いに連絡し合つて行動しているようではないか。だが二つの偏光の測定は互いに十分離れた配置で行つても変わらないというのだから、光より早い情報伝達でも考えない限りこれは不可能である。実は現象をこれだけに限れば、アインシュタインの言う隠れたパラメータで説明がつくことらしい。アスベ達の実験は、これ以上の不思議をえぐり出して見せたというのだが、非局所的長距離相関の不思議を見るのは右の例で十分であろう。」

「非局所的長距離相関」とは一言で言えば「遠隔作用」である。このような概念は、従来の（十九世紀までの）物理学が否定してきたことであり、直感的にもその非日常性は明かである。量子力学はそれを内包し

ていると考えねばならないというのである。そのような現象は、厳密に設定された条件下でのみ再現性、理論的整合性を有している物理的実在であり、通常の条件下で観測されるものではない。「遠隔作用」と言っても、観念論やスプーン曲げとは無縁のものである。

私は多層膜ミラーによる冷中性子の干渉現象の研究に長年従事してきた。その主要なターゲットの一つは上述の量子力学の基礎的現象の解明である。通常、量子力学が適用される物理現象は一般に複雑な系であり、正確に解くことは困難であると同時に高度な数学を必要とする。私たちのアプローチは、多層膜ミラーを用いて、単純な量子力学的体系を合目的に設計、製作することにより、量子力学における基礎的現象の解明に寄与することである。瀬尾さんは私たちの研究の進展に関心を抱いていたし、私もその進展状況を瀬尾さんに話していた。私は研究が進展し、量子力学の謎の解明に適用可能な段階に到達したら、瀬尾さんとの共同研究を希望していた。瀬尾さんは緻密に論理を組み立てると言う点で私にない優れた能力を持っていた。瀬尾さんとの共同研究の成立は、私たちの研究の進展にとつて大きな力になる筈であった。

残念なことに、私たちの研究の進展は思うように進まず、量子力学の基礎的問題に適用できる段階にはなかなか達しなかった。しかし、長い準備作業を経て、やっと軌道に乗り始め、共同研究のテーマを一緒に検討できる段階に入る矢先に、瀬尾さんは逝ってしまった。瀬尾さんとの共同研究により創り上げた量子力学に対する見解を、私たちの実験の中で実現することは、私の研究計画における夢であったが、今はそれはかなわぬこととなってしまった。今後の研究計画の進展を信じてはいるものの、それは未知の世界であり、確かなことは言えない。私自身残された時間も長くない。その間に、彼の興味に応えられるような実験を可能にし、量子力学の謎の一端なりとも解明したいと念願している。

## 瀬尾君と私

京都大学・工学部 荻野 晃也

いま、京大病院に入院してこれを書いている。窓からは瀬尾君が入院していた病棟も見える。昨年（一九九四年）四月、あの病棟の一室で、彼は病魔に打ち勝つ決意をいきいきと私に話してくれた。そして「下の子供が大学へ入るまでは何が何でも頑張るつもりだ」と独り言でもあるかのように静かにつぶやいた。不安と願望とが複雑に交差していたのだろうが、肺ガン、それも末期症状であることを知っていた彼の明るい話しぶりに、私も希望を持ったのだった。

それから二ヶ月もしないというのに、彼は帰らぬ人となってしまったのである。月日の立つのも早いのだが、それ以上の早さでガンは増殖していたのだ。苦痛に満ちた近代医学での延命よりも、正気のままの中国漢方治療を選択した彼の迷いを見せぬ決断は、私に取っても驚きであった。だが、やはり奇蹟は起こらなかった。

お見舞いに行くたびに、彼の身体の中でガン細胞は増加しているようであった。苦い吐き出しそうな漢方薬を飲み込むことすら苦痛になってきていた。もし彼の身体が透明であれば、どんなになっているのだろうかと不安になったのだが、それでも彼は快活さを失わないで話しをしてくれたのである。その横顔をじっと見ていて思ったのだが、三〇年前に彼に会った時と全く同じなのであった。

一九六四年四月、京大理学部物理学科修士課程を修了して工学部原子核工学教室に就職した私は、そこで同じ研究室に入院（進学）してきた大学院修士一回生の瀬尾君を初めて知ったのである。二年後輩ではある

が、とにかく何でもこなすハツスル・ボーイという感じであった。ともに原子核実験を目指していた二人は、毎日の様に回路室で一緒に並んでハンダ付けをしたものだ。「なぜ」「どうして」が、彼の口癖だった。自分が納得するまでは実に執拗なのである。また「荻野さん、どうしてこうなると思いますか」とシンクロスコープの波形を見せてくれながら聞かれることも良くあった。私にアレコレ説明させた後で、「そうじゃないんだ」と黒板に式を書いて明快に説明してくれる。「わかっているのなら、聞かなくても良いではないか」と少し不満な気持ちにさせられたりもしたが、彼の嬉しそうな説明振りを見てみると、「わからなかったことがわかった」という喜びを誰かに聞いて欲しいからなのだと納得したものである。

かれの修士論文のテーマは、中性子飛行時間測定であった。核物理実験家の間でTOF法(タイム・オブ・フライトの略)と呼んでいるものだ。宇治の放射実験室にある加速器で発生した十四MeVの高速中性子を炭素に照射し、散乱してくる中性子の時間を精密に測定することによりエネルギーを求める方法である。中性子を検出するためには液体シンチレータという検出器を作ることが必要であった。有機溶媒にPOPとPOPPOPという二種類の薬品を混ぜると、青みがかかったキラキラ光るシンチレータが出来あがる。それをガラスの容器に詰め光電子増幅管という大きな真空管に付けて中性子を検出するのだ。だが、その溶液中から水分や酸素を追い出さなければ良い検出器にはならない。毎日のように彼はその検出器作りに熱中していた。窒素ボンベからのガスをシンチレータに流し込み、液体窒素でトラップさせながら精製するのだ。私も手伝ったのだが、「もう充分では」といつても、「もう少し」「もうチョット」といつては、延々と続ける。とにかく実験に対する彼の執念深さにはいつも感心したものだ。TOFで彼が密かに狙ったのは、一ナノ秒の時間を破ることだった。一ナノ秒といえば、光が三〇cmの間を走る時間である。いまでもなかなか難しいことなのだから、三〇年前であれば世界最短の測定例となつたはずだ。結局は三ナノ秒程度だつたと思うが、

それでも立派な結果だつた。

修士課程を終えて、彼は原子炉実験所に就職した。そこで、我々核物理屋が「核分光学」と呼んでいる原子核構造の研究に専念することになる。ドイツへ留学していた時の研究もその延長であつた。彼が特に注目したのは、質量数一〇〇前後の原子核構造であつた。原子核構造の模型には、大きく分けて殻模型と集団模型とがある。前者は軽い原子核の、後者は重い原子核の構造を良く説明するのだが、丁度一〇〇前後の重さの原子核はどっちともつかぬ曖昧な傾向を示していたからである。彼は原子核構造の実験を行っただけでなく、ニルソン・ポテンシャル(原子核内のエネルギーを求める理論式)に修正を加え、セオ・ポテンシャルと呼ぶ新しいポテンシャルを考案して、質量数一〇〇前後の原子核構造を見事に説明していた。ニコクレア・データ・シート(NDS)という核物理研究者のバイブルといつて良いデータ集に彼がまとめた執筆したのも、彼の研究に対する外国での評価が高かつたからである(今までNDSに執筆した日本人は数人程度だと思つ)。

丁度その頃、私も質量数一〇〇前後の原子核構造に関心を持ち、色々な実験を行つていた。瀬尾君自慢のセオ・ポテンシャルを使つても解析してみたがどうもうまく行かないのだ。私の方はエネルギーの高い核反応実験によって得られた原子核構造の解析であつたからかも知れなかったが、そのことでも彼とは良く議論したものである。

彼は計測回路などにすぐれた技術を持つていたし、コンピュータにも大変詳しくあつた。パソコンを使つてのデータ処理法などを日本でもっとも早く取り入れた研究者の一人だと私は思つている。パソコンを使った原発事故評価プログラムの作成もそんな彼だから出来たのである。そして、彼の偉いところだと思つのは、そのようなプログラムを素人でも使えるものにしよつたことではなかつたか。私も使わせてもらつた一

人だが、彼はそのプログラムを、欲しい人すべてに快く提供していたばかりか、使いやすいように何度も変更したりしてくれていた。苦勞して製作したプログラムを他の人に渡しながらない研究者が多いのだが、彼はそうではなかった。「忙しい」とボヤクこともあったが、それ以上に、原発事故影響の巨大さを少しでも多くの人に知って欲しいと願っていたからだろうと思う。

瀬尾君の最後の研究テーマとなったのが、やはりTOF法と同じ様な短い時間の測定であった。それもナノ秒よりも更に短いピコ秒の測定だった。一ピコ秒といえば、光がわずか0・3mmの間を走る時間だ。彼はコンピュータの処理技術を巧みに応用して、実に五ピコ秒の時間の測定に成功したのである。それが彼の最後の研究論文であった。その生データを見せられて、「お見事！お見事！」と言ったのは、ついこの前の事なのだ。そして、彼の研究生活が短い時間の測定で始まり、短い時間の測定で終わった事に、私は何かしら不思議な気持ちにさせられる。

昨年五月末、瀬尾君の自宅へお見舞いに行った後、私はピースボートという団体の船に乗って地中海を航海していた。この航海中に瀬尾君が亡くなるかも知れないという予感を感じ、家内に「必ず連絡をしてくれ」と依頼して出かけていたのである。

船がイタリア・シシリー島のカタニア港に入港する直前であった。船内放送で無線室への呼出があったのだ。やはり瀬尾君の訃報であった。その港からは、「火の山」で知られる噴火の多いエトナ山が美しい姿を見せていた。その山を見ながら、瀬尾君のことを色々と思ひ起こしたのだった。なぜかしら、エトナ山が突然大噴火するような予感さえして、薄暗い早朝からデッキに一人で座っていたのだが、朝日に照らされるエトナ山は噴煙を上げるのみだった。

長い、丁度三〇年間の、つき合いだっただけに、それも私よりも若い友人の死であっただけに、私にとっても大ショックであった。年に五回以上は一緒に飲む機会があったと思うのだが、いつも私は瀬尾君の近くに座ったし、彼も私の前に座ることが多かった。小さな声で言うのだが、二人は煙友でもあったからなのだ。だから、宴会の席ではいつも端の方に座って色々と話し合ったものである。

彼は「チエルノブイリ旅日記」を出版した後、今度は原発事故の本に取りかかっていた。私は電磁波問題に取りかかり、雑誌に連載を始める用意をしていた。私がのめり込んでいる電磁波問題に関して彼は懐疑的であった。六〇サイクルの電磁波といえば太陽の光のエネルギーの実に一〇兆分の一程度である。そんな低いエネルギーのものが「人体に悪影響を及ぼすはずがないではないか？」という多くの物理学者の考える事を彼も述べるのであった。私も最初はそう思っていたのだから、その気持ちはよくわかる。私もこれから書くことと思っている内容を色々と話すが、彼は笑って首をかしげるだけだった。

一九九四年二月のことだが、彼は咳をしていてみんなから心配されていたのだが、「風邪をこじらせて」というだけだった。思えばタバコを吸わないようにしていたのだろうか、その時の彼は私から離れた反対側に座ってビールを飲んでた。それが彼と一緒に飲んだ最後になってしまったのである。

地中海を航海中、私は瀬尾君の生前の事を一人で思い出していた。葬式には、私に代わって家内が出席してくれたのだが、地中海を航行しているこの船には、瀬尾君を知っている人はまったくいないのだ。一人でビールを飲みながら考える事は瀬尾君のことばかりである。原子炉の友人達はどうなにかにショックを受けているだろうか？どんな思い出話が出ているだろうか？「原発事故」の本はどうなったのだろうか？

船は西へ西へと向かい、ジブラルタル海峡を通り過ぎてから進路を北に変えていた。リスボンへ向かったのである。そして、有名なトラフェルガー岬の沖を通過していた。ネルソン提督ひきいる英国海軍がスペインの無敵艦隊を撃破し、ナポレオンの野望を砕くとともに大英帝国の基礎を確立することになる、一八〇五

年のトラフエルガー大海戦の現場であった。

海を見ながら、私はネルソン提督が戦闘開始直前に出した「Dutyを果たせ！」という有名な指令のことを思い出していた。そして「瀬尾君は人間としてのDutyを立派に果たしたのだ」と自分に言い聞かせるように思うのだった。

ネルソンはこの海戦で傷つき、ビクトリア号上で大勝利の報告を聞いた後「余はDutyを果たせり」といつて戦死したのだそうだ。ネルソンの指令の全文は「イギリスは各員が義務(Duty)を果たすことを期待する」という短いものであるが、私には「Engl and expect」の「Engl and」が、「The Human」、「Humanity」、「Humanism」のように思えたのである。キリスト教に深い関心のあった瀬尾君のことだから、ひよとすると彼の心の中では「The God」だったかも知れなかった。そつでなければ、最後の最後まで「原発事故」の本を完成することに命をすり減らすはずがないか？と思うだけでまた悲しくなるのである。

確かに「Duty」という言葉には、権力者側の強制の響きが漂っている。「義務を果たした上での自由なのだ」と何度も言われた記憶が私にもある。体制や国家を支えるための義務として、ヒトラーも使ったし、戦前の日本でも良く使用された言葉だ。ネルソンの言葉は、戦前の日本海軍でも有名だったそうだ。しかし、私は思うのだが、瀬尾君には人間としての普遍的な意味で、そして「科学者としての責任」として感じるような「Duty」意識がどこかにあったような気持ちになるのだ。私自身も、この「Dutyとは何か」に悩み続けているからかも知れないのだが、彼もそんな人間であったように思えてならないのだ。

いわゆる「熊取六人組」の中で、当初は研究派の典型であった彼が、伊方原発訴訟の災害評価の計算をし、米国スリーマイル島原発事故のヨウ素問題を手がけ、更にチェルノブイリ原発事故の災害評価を行う中で、世界中の研究者が「人間としてのDutyを果たしていない」ことへの怒りみたいなものが生じてきていたよう

に私には思えるのである。「研究とは何か」「研究者とは何か」という恥ずかしいほど古い問題を、そのうちゆつくりと話し合おうと思っていたのに、彼は若くして遠くへ行ってしまったのである。そして、後に残された私たちは、彼の想いを手探りで求めながら、生き続けねばならないのである。

リスボンで私は瀬尾君へのお土産を探し回った。そして、小さな店で手のひらにのる大きさの小鳥の口ウソクを見つけた。まるで生きてるようにきれいに采色された小鳥であった。リスボンから帰国した私はすぐにお宅へ伺い、瀬尾君のお骨の前でその口ウソクに火を灯したのだった。小鳥の身体が少しずつ融け始めていた。奥さんの「可愛そう」という言葉に、我に返った私はあわてて火を指先でモミ消した。

それから一年後の一九九五年六月末、ある日、朝日新聞の広告欄を見て驚いたのだった。瀬尾君の遺稿となった「原発事故」と私の書いた「ガンと電磁波」という出版社の異なる二冊の本の広告が同じ広告欄に並んで掲載されていたのである。

(この文章は七月一日の「偲ぶ会」での私の話をもとにして書いたものです)



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

## 瀬尾さんは何故か「テケテケテツ」だった

・・セオケンさんの思いで・・

京都大学・原子炉実験所

赤星 光彦

眉目秀麗の美青年といった風情のセオケンさんがギター部の代表であった。毎年夏になると十数人のメンバーを引き連れて海の民宿へ合宿に行った。参加者の大半がうら若き女性で、所の紳士方を羨ましがらせたのも、セオケンさんの魅力に負うところが大きかった。目の澄んできれいな人であった。代表としてセオケンさんは合奏練習、個人練習、自由時間等々が細かく記された日程表を前もって配って呉れた。そして、決めた以上はきちんと守らせる事に、自らも厳しい几帳面な人でもあった。セオケンさんは大抵のスポーツに余り得意ではなかったが、水泳に関しては驚くほど達人だった。特に遠泳が得意で、自由時間を惜しむかの様に浜に出るのが常であった。一緒に一〇〇メートルほど沖に突き出た岩へ泳いだことがあった。中ほどまで進んだ時、いきなりセオケンさんの方角から「テケテケテツ、テケテケテツ」と奇声が飛んできた。クラゲにでも刺されたのかと近づいて見ると、そうではない。自ら発した声に合わせて泳ぎのリズムを取っていたのだ。よく聴くとメロディも入っている。今しがた個人練習の時間にセオケンさんが取り組んでいたフラメンコ風の難曲である。あとは私も「テケテケテツ」と尻馬に乗り、ようやく岩場まで辿りついたところで二人とも笑いが止まらず、岩にすがったままでいつまでも笑い続けたことであった。後になって、この局を耳にする度に、「テケテケテツ」と歌ったセオケンさんの感性の鋭さと思う。凡人の場合、せいぜい「タラララッ」と歌い、従って、「タラララララッ」と弾くところであろう。しかしながら、それではこの曲は音

楽にはならないのである。最後の「テツ」の部分にアクセントをつけ、しかも一小節毎に強弱を繰り返すセオケン流に弾くことによつて、はじめてフラメンコ風のこの曲の激しさと哀感とが見事に表現されることが理解される。凡人は「テケテケテツ」と聴いた上で、考え、そしてはじめて理解する。しかし、哀しいかな、表裏一体であつた。合奏の際によく「キタナイ音を出すな」と叱られたものである。凡人には感じられない振動数の何%にも満たない音のずれがセオケンさんにとつては耐え難い雑音に聞こえるのである。しかもセオケンさんの音感は身体に覚えた絶対音階によるものであつた。これは天賦の才能と云つてよい。セオケンさんの天賦の才は決して音楽のみには止まらず、学問や社会活動においても充分に発揮された。凡人が天才を理解できないのは哀しい。しかし、凡人に理解されない天才はもつと哀しかったにちがいない。しかしそれでもセオケンさんは、悲しい顔もせずによく凡人に付き合つて下さつた。原子核壊変時のパリテイの破れが、制動放射光に対してどの程度まで残されているのが生物学の立場から重要な問題となり、セオケンさんにお教えを乞うたことがあつた。他の核物理屋さんにもお願いしたのであるが、生物学の問題などに貴重な時間を割くのは損だと云わんばかりの態度で相手にもされなかつたからである。セオケンさんだけはこれを真剣に受け止めて下さり、原子核壊変によつて放出された電子の偏極度が制動放射光にどこまで反映するかをエネルギーの関数として計算してくださつた。パソコンのはしりともなつたシャープの愛機とご自分で開発されたソフトを駆使して、トレーサー実験室の片隅で一生懸命やつて下さつたその後の姿が焼き付いて離れない。

天才と凡才とのこの悲劇はセオケンさんの属する大学社会にあつても繰り返されたのではないかと思う。特に近年の大学にあつては、研究者の社会的活動を意識的に封殺するかのようになり、近代主義・論文至上主義の風潮が吹き荒れている。研究者としても、レールの上を早く走る能力だけが評価され、個性や創造性を発揮するよりも、本邦初演の親玉の旗の下、メダラの学校よろしく追従して回るほうが出世も早い。自由の学风とアカデミズムの伝統を誇ると称するわが京都大学の一部局にあつてもそれは例外ではない。科研費を貰つた高が人事を決める上で大事な要因となると云つ鼻持ちならない拝金主義が横行している。金の匂いに敏感な研究者がチヨウチヨウのように飛び回り、すぐに論文になる安直なテーマがもてはやされ、かくて三流・三流の論文ばかりが生産されていく。このような風潮はセオケンさんの学問に対する真面目さ・純粹さは全く相容れないものである。セオケンさんを超えるに所はあまりにも冷たかつた。しかし、セオケンさんとしても墮落した大学には遇されたくなかつたに違いない。自分の置かれた境遇の中で、無理をせず、気負わず、ためらわず、短かつた命を一生懸命生きた人であつた。もう一度与えられたとしても、同じ人生を繰り返されたであろう悔いのない生き方であつた。天才は早く逝き、凡才はただ生恥を晒すためにだけ長生きをするのであつた。

# 「人はいずれ……」

京都大学・原子炉実験所

水間 満郎

瀬尾君、と呼び、水間さんと呼ばれて来た。七月一日は「瀬尾さん」で通したが、ここでは、瀬尾君、と書くことをお許し頂きたい。

吉田食堂での会が果てて、その夜の泊まりの真如山荘へ向かう道すがら、どなたであったか、「瀬尾さんにはエイリアンのようなところがあつたが、今日の皆の話にはそれが出ていなかったな」と独り言のように言っておられた。「お言葉を返すようですが、私はそのところを述べたつもりですが」と心の中で呟いていた。常人には近付き難い存在、というだけでエイリアン、ではないだろうか。

山荘での寄り合いの席で、久米先生が「瀬尾さんが、『水間さんは僕の話聞いてくれる』、と語るのを聞いたことがある」とおっしゃって下さった。私は長くこのことを忘れないだろう。その夜集まった人々にどう思つか聞いてみたいことが一つだけあつた。それは瀬尾君の本の最後に妻赫子さんが書いておられる、「僕は言いたいことを言い、やりたいことをやってきた。信念を曲げることもなかった。人はいずれ死ぬのだから……」である。率直に言つて、私の知る瀬尾君とこの言葉とは何処かそぐわないところがある。言つてしまえば、エイリアンらしからぬ、である。しかし、瀬尾君がそう語つたことを疑つのではない。確かに瀬尾君はそう語つたのだろう。それは、未だ春秋に富む歳でありながら世を去らねばならぬこととなつた瀬尾君の口惜しさの表現だと考えたい。聞けばなるほど、と思つ。自分でも、瀬尾君と同じ事態に直面したときにはこう言いたいし、またこう言えるように日々を努めたいと思つ。しかし、言う方はまだ良い、同

じく春秋に富む身でありながらこの言葉を聞かされる立場になつた人のことを少しは考えた上でのことかと尋ねて見たい気がする。瀬尾君もやはり若かつたのか、と思つ。

いつときの気晴らしになれば、と普段聞いたことがないだろう歌い手によるウインナオペレッタの歌曲集を病床の瀬尾君に届けたことがある。しかしその中に、昼は仕事に励むけれども夜はキャバレー遊びにうつつを抜かして、「あんまり働いたら命が危ないぜ」と言う男の歌が入つていた。原子炉実験所から二時間をかけて夜遅く家に帰つてからも仕事をしていた瀬尾君が、この歌を聞いてどう思つたか、想像するだけで未だに胸が痛む。おまけにそのオペレッタの題名が『メリーウイドウ』とあつては何とも言いようがない。その当時私は、瀬尾君とあのような別れ方をするとは毛頭思つていなかった、少しは長引くかも知れないがその内に実験所でまた会える日が来るとだけ思つていた、と言つておきたい。音楽にも造詣の深い瀬尾君が、「水間は冗談がきついな」と苦笑いして済ませてくれたことと願っている。

風媒社の稲垣さんが、瀬尾君の並々ならぬ文学的センスに言及されたのを共感して聞いていた。瀬尾君の「チエルノブイリ旅日記」には私もそれを感じていた。そのことは、原子炉実験所で有志が出している「現実」の瀬尾君追悼号に記したところである。私の感じは間違いではなかった、と意を強くすることが出来たのは幸せであつた。



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

## 瀬尾健さんを偲ぶ集いに寄せて

原子力資料情報室

高木 仁三郎

海外出張中にて、この場に出席できないことを心から残念に思いますが、瀬尾さんを偲ぶ気持ちは人後に落ちないつもりです。そして、瀬尾さんがなくなられたときに「原子力資料情報室通信」二四一号に寄せた拙文を、瀬尾さんの遺稿集に捧げさせていただきたいと思えます。

地上の諸厄災と闘い、休む暇のなかった瀬尾さんが、いま、天国で安らかな日々を送っていられることを願っています。私もそのうち「やあこんにちは」と再会することになるであります。私も、長い間の垢にまみれてきましたので、垢を洗い落として、安らぎを求めたい気分が次第に強まっています。

しかし、「通信」の拙文にも書きましたように、瀬尾さんの訃報は、私に「後継者育成」ということを強く決意させました。この仕事に目的をつけるまでは、私はまだこの世でがんばらなくてはなりません。この一年の世相を見るにつけ、いっそうその必要を痛感しています。この場を借りて、改めて、私の決意の誓いをさせていただくとともに、厚かましいことですが、瀬尾さんに、そちらから、私の働きを見守り、叱咤激励してくださることをお願いする次第です。

一九九五年七月

## 瀬尾健さん（京都大学原子炉実験所）を悼む

高木 仁三郎

瀬尾さんの訃報をソウルで聞いた。その時はまわりに人がいたので平静を装ったが、その夕方金浦空港でひとりになって飛行機を待っていると、悲しみと怒りがこみ上げてきて抑えようもなかった。直接の死因は肺がんということなのだろうが、そのもとはやはり長年の過労にあったのではないだろうか。とくにチェルノブイリ事故後は、この未曾有の事故とその影響の全体像を知ろうと、精力的に仕事をし、また動きまわっていた。やはり原発が瀬尾さんの命を縮めたと思わずにはいられない。

スリーマイル島原発の事故があったとき、瀬尾さんは、アメリカのNRC(原子力規制委員会)などが発表している公式の放射能放出量の値がいかにまやかさに満ちたものか、とくにヨウ素の放出量が実際には3桁も4桁も多いはずだということについて、フィルターの数値などを実証的に使ってきわめて説得力のあるやり方で明らかにした。そのやり方は実に見事で、私はすっかり感動してしまった。瀬尾さんのこの仕事は、その後世界的に評価されることになったが、今後とも、スリーマイル島原発の事故について語られるとき、必ず付言されるべき性質のものであろう。

これはほんの1例で、私は個人的にはいつも瀬尾さんと接しているという間柄ではなかったが、毎日のようにいろいろな形で瀬尾さんの仕事の恩恵にあずかっていた。今回ソウルに来たのは、委託されて靈光原発の事故のシミュレーションを行なってその災害評価をしたことの報告のためだったが、これも瀬尾さんのつくったパソコンソフト《Accident》に全面的に依存しての仕事だった。今からでは遅きに失するが、瀬尾さん存命中の動きに対し、心から、ありがとう、ごくろうさまと言ひ、ご冥福を祈りたい。

最近、私にとってかけがえのない人々の訃報が続く。そのひとつひとつが重く私の心にのしかかってくる。惜しい人が失われていく一方で、どこかでその人たちの遺志を継ぐ若い人々が育ちつつあるのだろうか。いや、きっとそうだと信じたい。そうでなければたまったものではない。

瀬尾さんの死に接し、私は後継者の育成ということに、今度こそ本腰をいれようと心に誓った。

\*瀬尾健さんは6月5日、肺がんのため急逝されました。享年53歳でした。

瀬尾さんと親しくお話をさせていただく機会には、ついに恵まれませんでした。そのことが、とても残念です。

『はんげんぱつ新聞』に三度ほど原稿をいただいておりますが、とても折り目正しい原稿で、何度かお目にかかったときの、やさしく真面目な印象そのままと思われました。でも、風媒社から刊行された『チェルノブイリ旅日記』を読むと、また違った人間的魅力が感じられます。

もう遅いのですが、もっと瀬尾さんのことを知りたいとの思いから、告別式や偲ぶ集いに出席させていただきました。瀬尾さんのことを何も知らないのに、さまざまな方から語られた瀬尾さんの姿は、ひとつひとつ素直にうなずけるものでした。

最後まで自分のなすべきことを果たそうとつづけた瀬尾さんの強烈な意志に、深い感動を受けました。及ばないまでも、あとに残す悔いを少なくしたいものと考えています。

『はんげんぱつ新聞』編集部 西尾 漢

# 全国自治研集会での瀬尾さん

自治労大阪府職総務支部

末田 一秀

瀬尾さんの思い出で一番印象に残っているのは、八九年の自治労の全国自治研集会を一緒に緒させて頂いたときのことだ。

京大原子炉実験所とは2号炉反対闘争の一端を担ったことで浅からぬ縁だが、「六人組」とか言われる原発側の研究者の方々のうち、瀬尾さんとはそれまで大阪や京都であまり会う機会がなく、遠い函館の地で開かれた自治研集会で初めてゆっくりと話をさせて頂いた。

二年に一度開かれる全国自治研集会で、この年初めて反原発・防災分科会が単独でテーマ設定された。北海道初めての泊原発に反対する運動の中で防災問題への取り組みが行われたのを受けてのことだった。瀬尾さんは分科会の助言者として、チェルノブイリ事故で炉内放射能の10%が放出され、5%がソ連に降下したとか、事故情報は伝えられないし、たとえ伝えられたとしても過小評価になるとかなどを丁寧に語られていた。

今では防災体制の不備を指摘することで脱原発に結び付けようとする取り組みは、当たり前で重要な取り組みの一つとなっている。しかし、チェルノブイリ事故を受けて私たちが改めて大阪府の原子力防災を問題にして函館の二年前、横浜での全国自治研にレポートしたときは、防災問題の取り組みは既存の原発を認めることにつながるという観念論が未だ横行していた。消防職員も多く参加した中で、防災問題は自治労にとって被曝という労働条件問題でもあることを確認し、その後の全国での取り組みにつなげたことで函館の自

治研集会は大きな意味を持つ。まさにエポックメイキングな集会で瀬尾さんが果たされた役割は、大きかった。まるで昨日のことのように思い出される。

七月一日の「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、ご案内をいただきながら欠席せざるをえませんでした。参院選告示直前で、県内の市町村選対の代表者会議を招集していたためです。お許し下さい。

私が瀬尾さんと顔を合わせたのは、間違いがなければ、わずかに二回。最初は能登（志賀）原発差止め訴訟の事務局として、裁判の証人に六人グループから出てもらうため弁護士や富来町ふるさとを守る会の皆さんと一緒に熊取の原子炉実験所を訪れたときです。

以前『反原発新聞』九四年七月号『裁判闘争の意味を考える』に書いたように、六人グループは裁判闘争に批判的な考えを持っておられます。久米先生同様、現地の現実に止めるための運動が後退する中で、長期の裁判闘争に深く関わってきた上での体験だけに皆さんの反応は、予想したとおり厳しいものでした。

面識のある小出さんや小林さんは気の毒そうな表情で、他の方は冷やかな表情。たしか出張していた方が一人いて、それが瀬尾さんでなければ、瀬尾さんも冷やかな方の一人だったと思います。（失礼！でも能登の田舎から大学の研究所へはじめて足を運んだ身では、内心とても心細かったです）

しかし、こちらとしても引き下がるわけにはいかず、現地の川辺・沖崎さんに同行してもらって、ともかく人情に訴える作戦でした。作戦が功を奏したのか、六人グループが広範かつ綿密なチェルノブイリ現地調査を重ねた成果に、新たな意欲を燃やしておられたためか、今中さんが証人に立ってくれました。国、電力も手が出せないデータに裏付けられた見事な証言で、北電側は反対尋問すらできませんでした。

その後、函館の自治研大会の分科会で始めて、瀬尾さんと直接顔を合わせる機会を得ました。たしか自治研では、原発の防災計画や防災訓練の問題に焦点を絞って分科会がもたれたのは、初めてだったと思います。私は報告者として、瀬尾さんは助言者としてチェルノブイリ現地調査の成果をふまえて、放射能被害の広さと深刻さを訴えておられました。熊取へ行つたときが心細かっただけに、意外に気さくな人やなあ、背の高い人やなあ、と感じたことを覚えています。

一期一会と言いますが今から思えば、これが事実上、瀬尾さんとの最初で最後の出会いでした。このように、私の瀬尾さんへの記憶の殆どは六人グループの皆さんを通したものです。それだけに、六人の方々のつながりの深さと瀬尾さんを失った皆さんのご心痛と悲しみを思わずにはいられません。

神や仏の信仰は人間の根元的な悪として拒否し、ふるさとの海と山、そして・天・のみを信じる小生ですが、改めて瀬尾さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 瀬尾さんの生前を偲んで

女川原発反対同盟会長

女川原発差し止め訴訟原告団団長

阿部 宗悦

この度、瀬尾さんの一周忌と瀬尾さんの遺稿「原発事故…その時、あなたは！」出版記念と併せて「瀬尾さんを偲ぶ集い」のご案内を頂戴し、本来ならば必ず伺うところでしたが、七月二日女川原発現地集会を予定しておりました関係から伺うことができませんでした。誠に残念です。

顧みるに、私と瀬尾さんとの出会いは、反原発女川闘争（一九六七年）の過程で一緒に、後に京都大学原子炉実験所に在職された小出裕章さんの関係から瀬尾さんの文献での間接的な出会いでした。

こうした中、東北電力、国、県、町、一体の札束攻勢による漁業権収奪、女川原発1号炉建設着工と許しがたい事態を迎え、ここではじめて裁判での闘いにも決起するに至った。この裁判は原発の当事者である東北電力（株）を被告とするはじめての民事訴訟の提訴（一九八一年十一月二十六日）であり、この裁判における専門的な分野での証言について私たち原告の依頼に対し瀬尾さんには清く引き受けて頂き、裁判に当たっては、原発がかかえている問題を克明に、人々の心を打つすばらしい証言で私たちの反原発の正当性を展開して頂きました。このときから直接的出会いがはじまり、瀬尾さんには今後も一層のご指導を期待しておりますところ、突如瀬尾さんの悲報に接し、なぜあのような立派な方が、驚きと世の無常を悔やむばかりでした。

もうあれから一年も経過したのかと思いつつも、いまも京都大学原子炉実験所で研究に没頭されているように思えてなりません。

仙台地裁で原発の問題点を証言された瀬尾さん

私宅で食事に添えた沢庵漬、梅干漬（当地旧来からの一年〜二年漬けの物）が気に入られ美味しいと食べ、送り届けると喜んでくれ、他人げのしない気さくな瀬尾さんの人柄が、今更ながら偲ばれます。

女川原発差し止め訴訟は、瀬尾さんが他界した五ヶ月後、原発差し止め請求を棄却するという不当判決となりましたが、私達は、現地闘争を軸に引き続き控訴して闘うことを決め、裁判闘争を開始しています。一審では、瀬尾さんをはじめ証人の方々のご尽力に報えることが出来なかつた訳ですが、瀬尾さんの遺稿「原発事故…その時、あなたは」を闘いの糧として一層頑張る心算です。

最後に瀬尾さんの遺稿記念会を偲ぶ集いの労に当たられた世話人の方々に心より敬意申し上げますとともに、瀬尾さんを偲ぶ私の一端を記し、挨拶にかえたいと存じます。

一九九五年六月二十六日

## 瀬尾健さんの気概を受け継ぐ

女川原発差し止め訴訟原告団事務局長

阿部 康則

東北大学原子核工学科出身で、京大原子炉実験所の小出裕章さんの電話は突然で、なにか胸の動悸を必死で押さえているという話しぶりだった。

「瀬尾さんが亡くなりました。」

唾然とする当方を無視するように、「この三月に、咳ばかり続くので風邪かと思っていたのですが、精密検査の結果、末期の肺ガンでした。三ヶ月の闘病でした。」と一方的で、ここで息を継いだ。

八五年春、瀬尾さんに裁判の証人を依頼する手紙を書いた。「全国で初めて原発建設当事者の電力会社を相手取った裁判で、原告は少数だがこのまま引き下がってはおれないから」といった内容だった。瀬尾さんは、伊方原発裁判で原告側証人になっており、二つ返事を期待したが、慎重そのものだった。

手元にある八五年二月四日付けの瀬尾さんの手紙でも、「小生の研究テーマは、原子炉事故により放射性物質が環境に漏れ出したとき、気象条件によって、どの程度の被害が出るかということに限られており、それ以外は耳学問の域を出ず、とても証言する能力は持ち合わせておりません。ときっぱりしていた。村上、角山両担当弁護士らと大阪の自宅に伺って打ち合わせをした際も、私は瀬尾さんがいつ証言を断るか気が気ではなかった。

伊方原発行政訴訟は、全国の反原発運動の期待を背負って先陣を切って闘われた。主に関西の弁護士・原子力研究者・市民らが、現地住民と共に原発の危険性を全面展開した裁判であった。この裁判での阪大（当時）の久米さんと京大原子炉実験所の瀬尾さんらの献身的な裁判闘争への協力は、歴史にしっかりと名を刻んでいる。

しかし、瀬尾さんが、伊方一審判決直後のアメリカ・TMI原発事故のように指摘・警告していたことが悲惨な現実とともに惹起されても、なお司法はお上の国策に屈しているというもう一方の事実、苦悶していたことも事実であろう。裁判闘争という闘争形態にも懐疑的だったように受けとれた。

第一五回公判での瀬尾さんの証言は、チェルノブイリ原発事故によって吹き上げられた放射能とともに、法廷を駆けめぐった。原告側証人、瀬尾健さんの主尋問は一九八六年五月二七日である。チェルノブイリ事故からちょうど一ヶ月後のこの日、依然事故炉の炎は消えず、ヨーロッパ全域が放射能汚染拡大のパニックの中で行われた。実に淡々とした証言が続いた。そして、最後にこう締めくくられた。

「原発が抱えている危険性の根源は膨大な放射能である。その放射能は、人間が積極的に冷却を維持しなければ、勝手に動き出して、勝手に噴き出してきて、人間の社会の中に入ってきて、人間の社会の中に撒き散らして害を及ぼすと、そういう非常に危険極まりない能動的毒物である。

・・・私の考えによりますと、本当に安全なものというのは、人間が放ったらかしにして何もしないで、めっちゃめっちゃ潰しても、何もしないとというのが安全なものだというふうに思います。特に今度のように、何千人も殺すかも知れないような事故を起こすような可能性のあるものを、単に机上の計算しただけで安全が保証されていると言って運転を続けることは絶対に許されない。」

瀬尾健さんの気概を受け継ぎたいと思う。

## 瀬尾健さんの死を悼む

女川原発訴訟支援連絡会議代表 渡会 正蔵

年賀状に「今年もお互いに頑張りましょう」と書いてきていた瀬尾健さん（京都大学の原子炉実験所助手）が六月五日、肺ガンで亡くなりました。享年五十三歳という。まことに哀悼の念に堪えない。八年前の五月に女川原発差し止め裁判の法廷で、「原子炉事故の災害」について証言していただいたのですが、それが偶然というのか、瀬尾さんが予言しておった通りというのか、その一ヶ月前の四月二十六日に旧ソ連邦のチェルノブイリ原発で事故が起こってしまいました。そのため、原子炉の危険性を予測するはずの証言が、起こってしまった事実を明らかにする内容にもなったのです。

瀬尾さんは証言のまとめの中で、原発が抱えている危険性の根源は膨大な量の放射能であること、その放射能は崩壊熱を出しているので人間が冷却を続けなければならない、それを怠れば勝手に噴き出して人間社会にはかりしれない害を及ぼすという点で、これは他の毒物とは異なり・能動的毒物・であることを強調しました。そして最後に、「大事故というのは、人間が考えられる範囲で安全装置を張り巡らしても、その網目を潜って大事故に発展していくというふうを考えるのが常識であり、責任のある方はその辺をよく考えていただきたい」と結んでいます。

今、目をとじると、あのとときの彼の情熱とやさしい笑顔とが臉に浮かび、聖書にある「一粒の麦若し地に落ちて死なざればただ一つにてあらん。若し死なば多くの実を結ぶべし」の言葉が実現するように思われるのです。

## 悔やみきれない別れ

女川原発訴訟支援連絡会議 篠原 弘典

瀬尾さんとの出会いは、女川原発差し止め訴訟を通じてでした。高木仁三郎さんに続いて、原告側二人目の証人として仙台地裁の法廷に立つてもらうことになり、大阪・茨木の自宅に、証言の打ち合わせのために弁護士さんらと一緒に訪ねたのが、お目にかかる最初の機会でした。一九八六年の始め、仙台では未だ雪の降る時期で、瀬尾さんの証言は五月二十七日に仙台地裁で行われることになっていました。

証言の内容は「原発事故の災害評価」ということになっていて、米国スリーマイル島原発事故で放出された放射線量に関する瀬尾さんの研究は極めて貴重で、質の高いものでしたから、この研究を中心に証言してもらおう打合わせになりました。初めてお会いした瀬尾さんからは物静かで、冷静な人だなという印象を受けました。その時、スリーマイルの放出放射線量の証言では迫力に乏しいかと語っておられたのを記憶しています。打合わせから帰って、証言予定の一カ月前、四月二十六日に、チェルノブイリ原発事故が起こり、瀬尾さんの証言は、にわかに緊迫感のある、より一層重要なものになりました。

ただ事故から一カ月では、情報もデータも充分に集まって来てはおらず、まして事故が核暴走事故であったことは、未だに明らかにされていなかったもので、証言は完全に炉心が溶融する事故が起こったという内容で行われており、放出放射線量や被害予測についても、その後瀬尾さんらが精力的に取り組まれた調査・研究の端的な段階であったので、いづれも過少評価にはなっていました。しかし今その証言記録を読み返してみると、この時の証言は、原発事故の本質をよくまとまった形で指摘しており、私たちにとっても学ばさ

れることの多いものでした。瀬尾さんが残っていた著書『原発事故…その時、あなたは!』の草稿的な証言内容だったなと思います。

女川原発差し止め訴訟の地裁判決は昨年一月三十一日に出ましたが、原告側証人の証言内容がほとんど無視されるという内容でした。この判決文を読んだ瀬尾さんから、「予想通りとは言え、敗訴はやっぱりくやしいものです。」という手紙が届きました。二月の末でしたから、すでに闘病生活に入っていた頃だろうと思います。

この証言を準備するチェルノブイリの年のおよそ半年あまりを、瀬尾さんと同行させていただいて、物静かな中に強い意志を秘めている瀬尾さんの人柄に接することができました。この出会いを通して、その後も折にふれて親しく付合ってもらいました。一昨年の春、仙台で物理学会があった時に、どうしても宿が取れなくて困っているとの電話があり、一晩自宅に泊まってもらった事がありました。当時高校生だった娘が、小学生の時に使っていた子供用のバイオリンを見つけて、瀬尾さんは手に取って嬉しそうに爪弾いたり、一緒に置いてあったイスラジという弦楽器を興味深そうに音出しして楽しんでいました。瀬尾さんの『チェルノブイリ旅日記』には長い間行つてみたいと思つていたキエフの門を訪ね歩くだりがあります。何かの拍子に話がその事に及ぶと、娘がムソルグスキーの「展覧会の絵」のCDを持っていると言出し、その最終曲の「キエフの門」を聞きながら、瀬尾さんと娘が、その音楽について語り合うという楽しい夜を過ごしたのですが、感受性豊かで、繊細な瀬尾さんの一面にふれた思いがしました。

その時『原発事故…その時、あなたは!』の前半の原稿のコピーを瀬尾さんから手渡されて、一般の人にわかりやすい本を作りたいから、感想や意見を聞かせてほしいとの依頼を受けました。また昨年二月の末に、地裁判決へのコメントとともに、原稿の続きが送られてきたときにも、「大幅に組みかえや修正を行う

ので、コメント・要求・指摘・・・を頂きたい」との手紙が送られていました。瀬尾さんの本に注文をつけるなんてこの思いもあり、こんなに早く別れが訪れるとは思つてもみなかつたので、瀬尾さんの期待に答える努力を怠ってしまったことを、後々大いに悔やみました。

このようなやりとりを通して、この本の完成に力を注ぐ瀬尾さんの熱意をひしひしと感じました。送られてきた後半の原稿に目を通した時に、瀬尾さんはわかりやすさということをいく分あきらめて、これまで地道に積み上げてきた研究の成果をすべてこの本に凝縮させて世に問う方向に、方針を変えたようだと感じましたが、廻りの人々の努力もあって、大巾に組みかえられて完成した瀬尾さんの遺著は、すっきりとした形にまとまっており、私たちにとっても貴重な財産となりました。

女川原発裁判を支援する会の代表の渡会さんが、会報に書いた瀬尾さんの追悼文の中で、「一粒の麦若し地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。若し死なば多くの実を結ぶべし」という聖書の言葉を引用していますが、瀬尾さんの残していた仕事が多くの場所で実を結ぶことを心から願わずにはいられません。

## アイリーンさん からのメッセージ

昨夜、アイリーンさんとレストランで食事をしているときに、瀬尾さんを偲ぶ集いに行けないならメッセージでも送ったらと言ったら、それはいいと喜んでくれて、メッセージの口述筆記とメッセージャーを頼まりましたので、お届けします。

一九九五・七・一・ 木野 茂

今日は半年も前から日程が決まってる大学での講義があり、出席できず、非常に残念です。でも、瀬尾さんを偲ぶメッセージとして、次のものを寄せさせていただきます。

瀬尾さんのされたお仕事で、ひとつ、私にとって大きな意味があった paper があります。スリーマイルの死の灰放出分析で、彼が1980年にやったものです。ちょうどその頃、水俣の写真集を訳してくれた中尾ハジメと知り合い、彼から電話がかかり、瀬尾さんという京大原子炉の先生が書いた paper を一緒に訳したいと連絡がありました。それは、私が原発のことで初めてやった仕事でした。瀬尾さんのその短い paper は非常に論理が簡潔に、おもしろく、よくまとめられていて、その原理を理解して訳したことが楽しい思い出として残っています。もう中尾ハジメとは別れてしまいましたが、いわば初めてのデートだったと言えるでしょう。その時を機にして、私はスリーマイル島の事故と具体的にかかわるようになりました。後、その paper は“ Inside NRC ”という業界誌で評価され、私たちは“ Seo Takeshi ”と彼の名前を日本の順番で訳したので、その後、“ Takeshi ”はこう述べてる、“ Takeshi ”はあゝ述べてると、“ Dr. Takeshi ”はちょっとした話題になりました。

瀬尾さん、ありがとう。

アイリーン・美緒子・スミス



アイリーンさんからのメッセージを紹介する木野茂さん。

## 瀬尾先生を偲んで

ストップ・ザ・もんじゅ

池島 芙紀子

年々歳々 花相似たり 歳々年々 人同じからず と漢詩にもうたわれているように、今年も、熊取の原子炉実験所に夾竹桃の花は咲いている事でしょう。六年前、ストップ・ザ・もんじゅ事務局結成に際して、アイリーンさんと共に、熊取を訪れた時、私ははじめて瀬尾先生にお目にかかりました。その後、何度か実験所へは伺ったのですが、直接お話しした事もなく、寡黙な方だなという印象を受けたのを憶えています。その後、原子力防災に取り組んで、荻野先生に講演をお願いした時に、若狭の原発事故のシミュレーションを、実に綿密にレポートして下さいました。荻野先生にお聞きすると、それは、瀬尾先生の御努力によるものという事でした。その表を、わかりやすく人間の姿にかえて、枚方市議会への請願や、署名に、あるいは防災パンフにと、どれほど活用させて頂いたことか……。昨年、突然の訃報を受けて、本当に驚いてしまいました。あれから早くも一年。今、瀬尾先生の遺作、「原発事故…その時、あなたは！」の本を読んでいると、先生が、私達に何を伝えたかったのか、改めて胸にひしひしと迫ってくる思いがします。

志半ばにして行かれた先生の無念さを思えば、今、私達に出来ることを、全力で尽くして、がんばらなければ・・・と心を引き締めているところです。

瀬尾先生、すばらしい本をありがとうございました。微力ながら先生の御遺志を少しでも活かせるよう努力し続けたいと思います。

## 瀬尾先生に逝かれて

坂田 広美

その死は突然訪れた。

祖父母を老齢で失って以来、知り合いの人に殆ど先立たれたことのなかった私は、訃報に接して戸惑った。一瞬、頭の中が空白になり、そのあと、閑かにその死をとらえようと思った。ある人が亡くなるということ、その人がたつた今から、この世に存在しなくなるということ……。

逝かれた日と告別式の当日、私は外出を取りやめ、部屋でフォーレのレクイエムと『月光』を聴き乍ら、静かに過ごした。

私が研究会を通して、瀬尾先生と接しえたのは、二年間、回数にして六回でしかない。いつも飄々として風のような方であった。

心の中まで見透すかのような、まっすくな、澄んだ瞳をもっておられた。

初めてお目にかかったとき、「この方には、ごまかしや曖昧さは、ゆるされない」と、気持ちを引き締まっていたことを思い出す。

『チエルノブイリ旅日記』は、とかく重くなりがちなのこのテーマを、美しい写真と透明感のある文で、湿ら

せず、決して声高に叫ばず、軽妙に語っておられることに感動した。名文である。

『旅日記』には、瀬尾先生らしい、繊細さ、柔軟さが、あますところなく表現され、読み物としても大変面白い。

亡くなられて一年余が経ったいま、瀬尾先生と交わした会話の断片が、散歩の途中や、先生のお好きだった「展覧会の絵」や、リヒテルの演奏を聴いているときなどに、ふっと浮かぶ。

生き急ぐかのような人生、短すぎる・・・と思ったとき、「人間は、その役割を果たし終わるとお迎えがくる」・・祖母がよく口にしていたこの言葉が、甦った。

瀬尾先生の死は、十分に彼が生きた結果、もたらされたものなのだろう。

一途な研究人生、そして、そのあとに『原発事故』の著作が遺された。

この精緻な論証は、瀬尾先生ならではのものである。

潔く、清々しい生を全うされた先生の、ご冥福をお祈りする。

## 真に人間的だった瀬尾さん

伊方反原発訴訟弁護団長

藤田 一良

昨年の五月のある日、宇治の萩野晃也さんからの電話で、「瀬尾さんが肺ガンで危ない」ことを知りました。ありふれた言い方ですが、「青天の霹靂」がこのときのショックに一番びったりした言葉でした。

私を知っているかぎり、「熊取六人組」の中でも真面目派の代表で、私たちのように羽目を外して暴飲暴食などの不摂生をされる筈はありませんし、きつと根をつめた研究の無理が祟ったのかも知れないと考えました。

早速熊取の仲間や萩野さんたちと一緒に自宅で伏っておられた瀬尾さんをお見舞いすることになりました。最後のお別れになるかも知れないという思いが胸をしめつけ、励ましや慰めの言葉も湿りがちでした。しかし、青白く瘠せられた瀬尾さんは、それでもかえって私たちの思いを氣遣って、漢方治療の話などをされ、些かも生きる希望を失っていないかのような応対をされました。私たちは瀬尾さんのお疲れの様子を見て、暫くの後に退出させていただくことにしました。

帰りの阪急茨木駅の店で、熊取の仲間や萩野さんたちは、瀬尾さんの原稿の整理や出版のことなどを話し合っていました。私は埒外に居て、日々刻々と大勢の人々がそれぞれの思いを残しながら去っていくこの世の流れの辿りつく先は何処なのかなどと、とりとめのないことをぼんやりと考えていました。

お葬式は六月の暑い日の午後でしたが、瀬尾さんの死を悲しむ多くの人が参列しておられました。席上で私は瀬尾さんが夜にただ一度だけ、私の家に電話をかけてこられたときのことを思い出していました。スリ

「マイル島原発事故の直後のことでした。私が新聞のインタビュアーに、「私達が主張したことが正しかったことが実証されたという気になれない。私達を含めて反原発運動の無力さがこんな事故を防ぎえなかったことに対する残念の気持ちが先に立つ」と答えた記事に対する瀬尾さんの共感をわざわざ伝えてくれたのでした。

瀬尾さんと私の付き合いは、もちろん「伊方原発」の裁判を通じてのことです。この「四国電力伊方原子力発電所原子炉設置許可処分取消請求行政訴訟」は、日本のみならず世界でもはじめての原発の危険性を全面的に問題にし、その違法性を明らかにしようとした裁判でした。弁護士団が瀬尾さんをお願いしていたのは、「原発事故」の際の放射能災害シミュレーションでした。

国や電力会社はフェイル・セイフ、フル・プルーフになっているので、どのような攪乱的要因が発生しようとも安全サイドに収まり大事故は起こらないと言い張ってきていました。しかし、一九七九年三月に伊方炉と同型の加圧水型原子炉をもつ「スリーマイル島原発」に事故が起こり、環境に大量の放射能が放散されました。いよいよ瀬尾さんの裁判での証人としての出番となりました。

しかし残念ながら瀬尾さんの証言は実現しませんでした。証言が間近に迫った一九八三年三月四日の法廷で、高松高裁の裁判官がまったく異例にも何の前ぶれもなく突然「結審」を宣言し、啞然とする原告住民や傍聴人を尻目に法廷から退出してしまっただからです。今でもあの裁判で瀬尾さんの証言が実現していたら、裁判の流れは大きく変わっていたらうと残念でたまりません。

今日の「偲ぶ集い」に出席させていただき、いろいろな側面から瀬尾さんの人柄についてのお話を聞かせていただくにつけて、私の中にあつた「マジメ一本槍」の瀬尾さんのイメージは大いに修正されました。とくに大学時代の「マンドリン同好会」の話や、その仲間が演奏された、ロドリゴやタレガ、アルベニスなどの演奏を聴くにつけて、とりわけ甘美なこのようなスペインの曲に、御自分の情感を溶かしておられた若い瀬尾さんのロマンチストぶりを知ることができたことも感銘深いものでした。

伊方原発の裁判は一九九二年一〇月に上告棄却の判決があり、目的を果たせなまま終わってしまいましたが、この裁判に参加した弁護士は、瀬尾さんとともに闘ってきた精神を忘れずそれぞれの道を進んでいます。

私の好きな政治理論家のハンナ・アーレントに「フマニタス（真に人間的なもの）は孤立の中では決して得られない。自らの生ならびに人格を公的領域への冒険にゆだねることによってのみ達成できる」という言葉があります。ミクロ的な原子核の専門的研究の世界から、伊方原発をはじめとして反原発運動という公的領域での実践に踏み出され、途上に倒れながらも、今ここに「原発事故：その時、あなたは！」という万人の読むべき本を残された瀬尾さんに、あらためて尊敬の気持ちを表明しておきたいと思えます。



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

## 瀬尾さんについて

伊方原発行政訴訟弁護団 仲田 隆明

一九九五年一月十七日阪神大震災という大地震が兵庫県南部に発生した。震源地は伊方原発に極めて近かったが、幸いに被害は淡路島から北に逃げた。私は伊方原発訴訟中、日本では、現実に原発事故が発生して市民がこれによって死亡しなければ原発は停まらないと危険きわまりない発言をしてきた。しかし実際に起こった今回の阪神大震災は、伊方原発その他の原発とのからみで私の背筋をぞっとさせた。瀬尾さんは、生前に大震災を経験をしていたらどういふ行動をしたであろうか。知りたい気もする。

それにしても惜しい人を余りにも早く失った。まだまだ一緒に議論をし、そしてワイングラスを傾けたかったのに……。

# 「瀬尾健さんを偲ぶ集い」の皆様へ

伊方原発取消訴訟弁護団

熊野 勝之

今日は是非参加させていただくつもりでしたが残念ながら出席できません。自宅で瀬尾さんの「チエルノブイリ旅日記」を読み返して瀬尾さんを偲びたいと思います。先日阪神大震災の被災地・神戸の久門万佐子さんという方から「アヒンサー 地震と原発」を頂きました。そのなかで久門万佐子さんは「今一番緊急を要して大切なことは、原発の全面凍結に向けて一步を踏み出すことと、まだ十万もいる避難の人達に、憲法にうたわれる最低の人間らしい生活を提供することだと思ふ。」と書いておられます。瀬尾さんが「旅日記」で書いておられることも結局そのことだと思えます。口絵の四号炉の写真は今回の被災地のものかと思ふがうばかりです。エピソード「日本でもチエルノブイリの惨事が」で書いておられる「絶対に起こらない」と言い続けてきたことが現実に起こったという一事だけですべてを粉砕するに十分」ということは、阪神大震災にもあてはまります。にもかかわらず、政府、地方自治体、土木・建築・地震の専門家の多くがすべてを予想外の地震動のせいにしてようとしています。地震については遠くは寺田寅彦の「天災と国防」から近くは生越忠先生の住吉川景観訴訟における警告（鑑定）、直近では國弘正夫国会議員の二週間前の警告（「軍縮」九五年四月号、「三たび「天災と国防」を憶う」）まで、あらゆる警告を経済優先のために無視してきた結果ですから元神戸大学の早川和男先生が「行政災害」と言われる通りですが、わたしはこれに鑑定・証言を敢えて無視する裁判官の「司法災害」が加わると思います。さらに瀬尾さんの言われる、「我々の今直面している問題は、今の『科学』が、『技術』の奴隷であり、その『技術』の論理そのものが腐敗して

いるという点からきている」という意味で「専門家災害」でもあると思います。

私は及ばずながら被災地の人権問題に取り組んでいます。先日、西須磨ランド・テント村を見せていただきました。震災から五ヶ月、雨と暑さの時期に、いまだに地べたに寝かされ、食べてしばらくすると胸が焼けてくる給食を食べさせられている人たちがおられるということに激しい怒りを感じました。

近弁連人権擁護委員会は遅滞きながら「大規模災害と人権」（七月二十一日一時～五時・舞子ヴィラ）というシンポジウムを開きます。私はその準備として、一月十七日以来の人権状況の正確なデータを集めています。（どんな小さなことと思われることでも結構ですでお知らせ頂ければ幸いです。）今日はどうしても原稿書きにあてざるを得なくなりました。今日の会が、ご遺族の皆様の励め励ましとなり、瀬尾さんの志（「いと小さき者のために」）を今日に生かす楽しい会になることをお祈り申し上げます。

一九九五年七月一日

付記

シンポジウムは、充実したものとなりました。西須磨ランド住民から近弁連人権擁護委員会へ、仮設住宅にも当たらず行く先もないのにテントや自分で建てた小屋から神戸市が追い出すのは住居に対する権利を保障した国際人権規約十一条違反であり、救済処置を取って欲しいとする申立がなされ、急遽八月十九日大阪・神戸・京都・滋賀から総勢九名の弁護士が、炎天下調査に出向きました。目下、国連の社会権委員会の有力NGOである HAD TAT International と連絡を取って、国際的な調査団に被災者の住居問題が人権侵害であることを明らかにして貰おうと努力しています。今まで国際的な協力を求めるのは、・外庄・の利用で邪

道という気持ちがつきまとったのですが、人権は外からの・国際的な干渉なしには守れないし、国際的な協力・干渉によって守ってゆこうというのが国際人権の考え方なのだ、と今回の経験を通してわかってきました。その意味で瀬尾さんは「人権は国境を越える」ことを実行で示した先駆者だとあらためて思うようになりました。

瀬尾さんの一月後に急死された長崎の岡正治牧師は、朝鮮人被爆者のため、反核・平和のために働かれ、長崎忠魂碑違憲訴訟を一人で戦ってこられました。先日その追悼文集「孤塁を守る戦い」を送って頂き、岡さんのモットーが「愛は出かけていくこと」であったことを知りました。瀬尾さんが危険を冒してチエルノブイリへ出かけていった、その根底にあったのは、被曝した人々への大きな愛であった、そして、そこで出会った人々の状況がさらにその後の瀬尾さん突き動かしてきたのだと思うようになりました。大したことでもないのに、一月以来の疲れ、夏の暑さで、被災者の救援活動をもう止めたいという気持ちに何度もありますが、過去・現在・未来の被爆者の人権のために全力を出し尽くした瀬尾さんの存在が励ましと勇気を与えてくれます。

(八月二〇日・神戸市による避難所閉鎖、食糧供給打ち切りの日)

## 瀬尾さんのあまりに早すぎた死を悼む

國學院大學・経済学部 菅井 益郎

瀬尾さんが亡くなったことを悲しみ、残念に思っているのは私たちだけではない。アメリカのTMI原発事故で被害を受けた人たち、チエルノブイリ原発事故の被害を被ったベラルーシの人たちも彼のあまりに早すぎた死を悼んでいることであろう。

一九八七年に私はフィラデルフィアのペンシルベニア大に在外研究に出かけたが、運転免許を取ってすぐに訪ねたのはTMI原発のあるハリスバーグ近郊のミドルタウンであった。そこには日本にも来たことのあるマアリー・オズボーンさんが住み、地域の婦人たちとTMI原発の閉鎖を要求しつつ、事故後の住民の健康被害を足で歩いて調査していた。マアリーさんとは日本でも会っていたが、話していくうちに「あなたはドクター瀬尾を知っているか、彼は一九八四年にTMIパブリック・ヘルス・ファンドの招きに応じてわざわざここまで来てくれ、被害者のために証言をしてくれたのだ」といって瀬尾さんの名を挙げ、たいへん感謝していると語った。そのとき久米さんと今中さんも一緒だったことを思いだしながら、「もちろんよく知っている、私の仲間だ」と答えると、マアリーさんは早速ヒアリングの時に瀬尾さんたちが用意した『科学』の論文を英訳したものを見せてくれたのだった。『科学』の論文は読んだ覚えがあったが、私にとっては英訳されたものは初めてなのでじっと見ていると、マアリーさんは貸してやるからコピーを取りなさいという。そのときのコピーを今手元において、瀬尾さんをしみじみと思いだしている。

瀬尾さんのヒアリングでの証言は、地元の人たちにたいへん感銘を与えたという。根が単純な私は、それ

を聞いて素直に自分のことのように嬉しくなったのである。瀬尾さんに対するTMI周辺住民たちの高い評価は、彼の証言内容が優れていただけでなく、おそらく地元住民たちが、瀬尾さんの丁寧な接し方の中に、私たちの知るような彼の飾らない、誠実な人柄を見い出したからであろう。私はそれまで瀬尾さんとはときどきは会っていたのだけれど、それほど親しく付き合っていたというわけではない。しかしこのとき以来私の方は瀬尾さんにとっても親しみをもって。マアリーさんが行く先々で私を瀬尾の仲間だと紹介したので、私もぜひ彼の徳の恩恵を受けたのである。

私たちは四年ほど前、故松岡信夫さんと「環境データ」というのを始め、『環境と社会』という極小メディアを持つているが、瀬尾さんにはぜひ書いてもらいたいと思って、原稿を依頼しようとした矢先に彼は突然入院され、病状が急速に悪化、そのまま帰らぬ人となった。内に秘めた深い問題意識、冷静な思考と洞察力をもつ瀬尾さんなら原子力問題だけでなく、混沌とした現代社会を解明するための「論を立てる」ことができるに違いない、と編集者である私は大きな期待を抱いていた。しかしそれはついに実現しなかった。

瀬尾さんはかつてアメリカのTMI原発周辺の住民からたいへん頼りにされたように、これからますます深刻な問題が発生してくるであろうチェルノブイリ原発事故被災地の住民たちからも、住民側に立つ研究者として頼りにされることがすでに約束されていたように思われる。気負った風なことをけっして表面に出さず、淡々と話し、行動する瀬尾さんは、私とは反対の極にいるような人であるが、考えてみると、どういふわけか私も瀬尾さんの後からTMIやチェルノブイリの原発事故の被災地に入り、現地の人たちと一緒に考えるような活動を行なっている。瀬尾さんが生き続けていてくれたら、原発事故の被災地への関わり方から今日の文明論まで、いろいろと聞きたいことや議論したいことがまだいっぱいあった。天はあまりに非情だ。

## 高知大学での瀬尾さん

高知大学・理学部・物理学科 佐々木 宏

瀬尾先生の身近にいなかったせいでしょうか、今もコピペを打てば彼から返事が来そうな気がします。私が、瀬尾先生とかかわったのは、京大原子炉のどなたかに高知大学理学部物理学科の集中講義をお願いした時、最終的に彼が受けてくれたからです。一九四〇年十一月生まれの彼はわたくしの一カ月先輩で、少し取っつきにくい感じのする方（もちろん私見ですが）でした。でも、高知におまねきし、大橋通りの・池沢・と言う料理屋で一九九三年の二月の寒い折りに、一緒に飲んでから彼がそんな人でないことがわかったのです、気難しくうるさいことを言う私に取っては、兄貴の様なすばらしい人でした。思い出しましたが、御病氣のためか首が痛むとおっしゃりながらも授業をされていました。私が無理をさせたのではないかと、悔いいたしますが、・放射線計測学・関係の講義を持たた物理学科にとっては、非常に有益で、価値のあるものでした。放射能関係で今までにお呼びした先生方は、水戸巖、岡野真治、山越和雄の先生方と瀬尾先生でした。中でも、瀬尾先生の講義は例の著書「チェルノブイリ旅日記」の出版後でしたから学生諸君には特に印象的だったようでした。私がいただいた署名入りの本を回し読みさせたくらいですから。

最後に、彼の私への気づかいと彼の反原発の意志とを旨く表現してくれたものとして、集中講義の時のレポート問題の4番を彼の解答と共にここに報告し、その考えに賛成することで、私の哀悼の意を示したいと思います。

1992年度「電磁物理学特論」 問題解答

{4} 原子力発電の是非について述べよ。(25点)

解答例

講義では、

- 1 どんなに安全防護設備を張り巡らしても、破局的な原発事故の可能性を0にできないこと、
  - 2 膨大な放射能の蓄積が環境に脅威を与え、遠い未来にわたって人類に負の遺産を残すこと、
  - 3 原発は他の火力などに比べて決して安くはないこと、
  - 4 エネルギー源としてのウランはごく限られたものであること、
  - 5 埋蔵エネルギー資源全体が有限であることから、エネルギーの過剰消費を抑える以外にないこと、
- などについて、その根拠を明らかにして述べた。

採点のガイドラインは、まず何か書いてあれば15点、さらに全体としての論旨の明確性と一貫性の程度に応じて、0から10点を配分する。そのうえで、上記五つの論点に言及しているか、言及している場合講義の内容に反対する主張をしているものについては、その根拠が明確に述べられているかなど、不備な点があればそれに応じて減点した。また他の興味ある問題を取り上げている場合は適当に加点した。

## 瀬尾さんの思い出

大阪市立大学・理学部 木野 茂

瀬尾さんと言えば、一九八八年の十一月九日のことが思い出深い。十一月九日は本学工学部の大学院生だった井関進氏の命日で、彼を偲んで記念の催しをこの頃に持っていた。

応用化学が専攻であった井関氏は水俣病問題に関心を持ち、告発する会のメンバーでもあったが、学位論文の提出にあたって科学者の責任を付記した。これが発端で教授会で不合格となり、井関氏の長期座り込みなどの抗議行動を経て、一年以上後にやっと論文は合格となったが、井関氏はその五ヶ月後に下宿で服毒自殺した。

彼と知り合った人々は彼の思い出を胸に、その後、それぞれの道を歩んだが、彼の一〇周忌の集いを久しぶりに学内で持ったのを契機に、私は若い学生たちと自主講座を始めることにした。一九八八年は十六周忌にあたっていたが、追悼の催しにちなんで、科学者の責任に関わる話をどなたかにお願しようということになった。

工学部では井関氏の事件以後、「科学技術論」という講義を開いていたが、たまたまこの年の十一月九日には瀬尾さんが原子力の話をする日になっていた。これはちょうどいいというだけで、早速瀬尾さんに電話したら、科学者の責任なんていう大きな話はとてもできませんが、私が大事だと思っている原発の話で良かったらということで引き受けていただいた。

階段教室での講義が終わった五時頃、私達は瀬尾さんを拉致して講演会場に案内した。工学部玄関のすぐ



井関進氏追悼集会に於いてマイクを握る瀬尾さん  
(1988年11月9日)

近くで、道路を隔てて大学正門と向かい合う井関氏の座り込み跡の広場である。彼はここにテントを立てて一三五日間座り込んだ。瀬尾さんはちよつとびっくりしたようであったが、辺りが暗くなった中、ライトを浴びながら、とつとつと原発のウソ・イツワリを誰にでもわかるように話してくれた。私には十六年前、井関氏が同じ場所でも水俣病のことをみんなに話していた光景とダブって見えた。

瀬尾さんは最後に、原発は昔の大東亜戦争と同じだと強調された。大東亜共栄圏といつてもないウソを信じたがために、たくさんの方が戦争でなくなり、広島・長崎という原爆まで浴びることになった。われわれが大東亜共栄圏のウソにもつと早く気付いて、何らかの行動を起こしていたら、何とかできたかも知れない。今は、もう手遅れかも知れないが、原子力に関しても同じ様な状況になっていると言えんじゃないか。だから、われわれ自身がこの問題を自分の問題ととらえて、行動していくことが必要じゃないかと締めくくられた。

原子力の研究者が正面から原発の持つウソ・イツワリをみんなに知らせるといふことは、自分の首を絞めることにもつながりかねない勇気のあることであるが、瀬尾さんはさも当然のことのように話された。遺作となった「原発事故…その時、あなたは!」はそんな瀬尾さんをほうふつとさせる。

瀬尾さんとはその後、貝塚山荘での忘年会で何度か親しくさせていただいたが、ロシア(ベラルーシ?)からのお土産のウオッカなどを注いでいただきながら、兄貴のような親しみ(私に兄貴はいないが)を感じたものである。合掌。

## 敬愛する瀬尾さんへ

富山大学・理学部 桜井 醇児

敬愛する瀬尾さん。瀬尾さんから発せられる放射線に関連するいろいろのメッセージは明らかに重要であり、啓発に富むものでした。しかし、私はいつも自分がその時がかさずらっている問題に手いっぱい、瀬尾さんのメッセージを具体的に私のものとして受け止めていたとは言えなかつたようです。後になって、瀬尾さんの論点を筋道を立てて思い出そうとしても、うまくいかないのです。仕方なしに、そのあたりの問題は瀬尾さんがきつちりと論じておられると言うに止めざるを得ないことがありました。

そんな時に、瀬尾さんが著書「チエルノブイリ旅日記」を送ってくださいました。これは瀬尾さんと今中さんが一九九〇年夏に放射線分析器を持参してソ連に出かけ、チエルノブイリ周辺の残留放射線を自分で測定したときのいろいろの経験、瀬尾さんが彼の日記を基にまとめられた記録です。

チエルノブイリ事故による放射線被曝が人々に与えた影響は軽微であるとして、データを隠蔽し、被害者を葬り去ろうとしていたソ連当局の意図に反した目的を持ってソ連に入国しようとする困難さは、グラスノスチの動きはあつたにせよ、大変なものであつたでしょう。その旅行の困難さ、いろいろのハツプニング、二人が接触したソ連の人々が当時のソ連の体制をどのようなものとして捕らえ、何を考えていたかなどについて、瀬尾さんは良く判るよう的確に、この本で説明しています。いろいろなことが起こり、すっかり疲れてしまいそうな旅行を通して、毎日の出来事や会話の内容をこのように克明に、日記に記録できるとは、驚異的です。瀬尾さんは几帳面でもあるのですが、それにもまして、強靱なものをもっておられるから

であることを感じてしまいます。ソ連の人たちと交わした会話で、瀬尾さんはソ連の人々の生き方に触れ、ソ連共産主義体制を議論し、またソ連、西欧、日本で科学がどのような役割を果たしているかについて、ソ連の人々と議論しています。そこで述べられている瀬尾さんの意見は理科的というよりも強く文科的な発想に基づいており、瀬尾さんの考え方がよく現れているものであり、瀬尾さんが科学者としていろいろな発言を行っている元の所の、人としての瀬尾さんの声を聞くような気がいたしました。このような内容は、科学的な論文内容に比べて、後になつてもそう簡単には忘れられません。私はこの著書を読んで、瀬尾さんのひととなりに一層の魅力を感じました。

また、この日記には旅の瀟洒なエッセイ風のところもあり、瀬尾さんはとても文化人でもあると思います。瀬尾さん今中さんのお二人が、最初の短い手探りの旅を通じてチエルノブイリ事故のために葬り去られようとしている人々の真実に触れ、とても心に残るものを感じながら、旅行の日程にしたがつて立ち去らざるを得ない旅行者のどうしようもない心のうずきのようなものもこの日記にあるように私は感じました。

旅行を通して知り合った人や事件に心に残るものを感じていても、これがそのまま埋もれてしまえば、それは旅行の感傷でしかありません。お二人はその後、ソ連崩壊後のロシアにも再度出かけます。ベラルーシ、ウクライナの科学者との太いコンタクトが確立し、京大原子炉の方々の大きなご尽力の元に、チエルノブイリに関心を寄せる個人が結集して、一九九四年の秋にはチエルノブイリ事故による事故災害についてのベラルーシ・日本セミナーを開催することになります。私はこのセミナーにはまったく参加しておりませんが、しかし、このセミナーの成功は本当に素晴らしいことであつたと思っております。

そのセミナーには参加することができなかった瀬尾さんはさぞ残念であつたろうと思はざるを得ません。敬愛する瀬尾さんを失つたことは残念で言葉がありません。

私に残された年月はどのくらいか知る由もありませんが、日々精一杯自分なりにやっつけていこうと、無然としながら、方向違いな心構えを新たにしておる次第です。

## 天国の瀬尾さんへ

広島修道大学・商学部 馬場 浩太

天国に行かれた瀬尾さん、「瀬尾健さんを偲ぶ集い」に私も参加させてもらいました。七月一日の午後、楽友会館のホールは外の夏空の光が明るすぎず、しかし暗くはない、ほっとするような落ち着いた雰囲気の中で、多くの方々のお話から瀬尾さんがいかにすばらしい人であったかを知ることができた、本当に貴重なひとときでした。瀬尾さんのことは、私も一応「知ってるつもり」でいましたから、昨年夏に、瀬尾さんがなくなられたことを反原発新聞で見て知った時には本当にショックを覚えました。でも考えてみると、私は瀬尾さんに「さよなら」と云えるほど強い接点をついぞ持つことがないままです。これは私にとっては何とも淋しく残念なことです。間接的には、瀬尾さんのことは今中さんや桜井さんからよく聞いて共感を抱いていましたし、学会やシンポジウムで瀬尾さんのお話を聞いたことも何度かあって、瀬尾さんの話は決して表面的に派手な他者攻撃的スタイルではないけれど、まやかしの論理は許さず、学問的に忠実で、自己にはきびしい、偉い人だなという感じを持っていました。

瀬尾さんの話に私が接した機会の中でも印象に残っているのは、チェルノブイリ事故の年の九月に緊急に開かれた一橋大学キャンパスでのアントロピー学会主催のシンポジウムの時と、やはりその年の十一月か十二月頃、熊取のグループの比較的小さな研究会に参加させてもらった時のことです。いずれも、チェルノブイリ事故で放出された放射能核種ごとの量の評価と住民の被曝線量・影響評価の報告で、公式に発表されているデータの数字から具体的な真実をどう読み取っていくかの取り組みに強い感銘を受けたことを憶えてい

ます。しかし私の方からは挨拶程度の言葉を交わしたに留まり、それから瀬尾さんとの間に接点を深める機会もなくて年が流れて行ったのは、自分として本当に心残りです。

この度の「偲ぶ会」では、瀬尾さんは何人も人の言葉を通じて、瀬尾さんの科学者・市民としての真摯な姿だけでなく、タルレガ・グラナドスの音楽を愛し、ハティニの村の悲劇を格調高く美しい日本語にうらし、また、住居は奥さんの職場と通勤の負担が平等になる所を選ぶという、豊かな広い心の人であった瀬尾さんの姿を知らせてくれました。そして、私はこれらの全てが瀬尾さんの中で一つの物であったということにすがすがしい感動を覚えます。こうしてひとりの人のすばらしい生き方が沢山の人のこれからの生き方に力を持ち得るのですね。「原発事故…その時、あなたは！」は、こんな瀬尾さんが科学者・市民としての誠実さと深い人間愛をもって全部の精力を注ぎ込んで、まだ生かされている私たち、これからの時代を生きる若い人たちに残してくれた贈物だということが痛いほどよく分かります。

この「偲ぶ会」の場を通して、また、これをきっかけにして瀬尾さんが書かれた物をいつそう心を入れて読ませてもらうということによって、私は瀬尾さんから多くの大切なことを教えてもらいました。この瀬尾さんの心を私も何百分の一かでも受け継いで、これからの生き方を大切にしたいと思います。

瀬尾さん、本当にありがとう。

## 瀬尾さんへ

鈴峯女子短期大学 加藤 一生

いまこうしてこのような形でお便りしようとは全く想像していませんでした。しばらくご無沙汰していて、ほんとうに申し訳ありません。チェルノブイリの問題などで元気に活躍しておられると思っておりましたが、まさかもうお会いできないとはただただ残念です。

核構造の研究をしておられたということも、じつは偲ぶ集いで知ったばかりです。私が核構造を研究していたのはほんの数年間ですが、その話もできたらと思いましたがあとのまつりです。なんだか飲んだり食べたりした記憶はありませんが、それだけ時が経ったということでしょうか。

原発事故…その時、あなたは！、を読ませていただきました。広島のアストラムラインの事故の話があったので、期末試験問題の中に（無断で）入れさせてもらいました。とくに原子炉容器の話として出題したわけではありませんが、学生たちには一五〇気圧というのは想像しにくいようです。さらに橋桁三八〜三九個分の重さが一平方メートルにかかった状況というのは想像を絶するようです。本に書かれていますその他の諸々の問題を読んでいきますとあらためて原子炉では過酷な状態が綱渡りに維持されていることが分かります。これまで大事故が二件しか起きていないのが不思議な気がします。それだけ膨大な人的エネルギーがそそがれてきたのでしょうか。電気代が高いのもうなづけます。

何をもって普通と考えるのかは難しいのですが、雰囲気を考えて私の授業を受けている学生たちは普通の知識レベルをもってしているんじゃないかと思えます。その中にもかなりの学力差がありますが、その平均的な

ところは特に賢いわけでもないし、かといって話が通じないほどでもありません。長い間、物理実験で面積計を使っているのですがその中でいつも次のような質問をしています：「一ミリ方眼紙に描いた閉曲線の内部の面積をそのセクシヨンの数から求めます。その方眼紙の線間隔が一ミリではなく、実は一・一ミリだったら求めた面積にどんな補正をすれば良いですか？」 学生たちの答えはいつも「誤って増えているのだから減らせば良い」というものです。くどいようですが、彼らの想像力や知識レベルは緊急時に政治的な判断をしなければならぬような人達とそれほど違わないと思います。これは学力の問題というよりも日本の精神風土の問題ではないかと思えます。現実をありのままに把握するのではなく、信じるころに向かつて猛進しやすい気質なのでしょうか。その気質のままに科学的想像力の欠如した人たちがシステムを誤った方向に修正していくのでしょうか。

本に書かれていましたチェルノブイリ事故の記述を読んでいて、昔 IAEA の報告書の解説を広島大学原爆放射能医学研究所のセミナーでしたことを思い出しました。報告書とはいつもこんなものだろうというあきらめと、怒りを感じながら、しかし二度と起きないようにするにはどうしたら良いんだろうと考えていたはずでしたが。いろいろなことを考えて、研究だけをしているのではだめだと思つたはずでしたが。「僕たちの地球を救おう」という意味の「ぼく球」クラブを作ろうといろんな人達を尋ね歩いた時もあったのですが。転職してみると教育現場のごさは想像を越えていたんですね。砂の城を波打ちぎわに作っているようなものです。知らない人は笑つかも知れませんが、一リットルと一立方センチメートルの区別がつかない人が普通になりつつあるんですよ。このままだとどうなるんでしょう。

これだけ地震がおきても、そして他のエネルギー源が豊富にあると分かった状況でもとくに大量のエネルギーがそそがれた原子力発電所は減らないような気がします。十分なメンテナンスもないまま信じるころに従って誤った方向に修正されていくのでしょうか。第三の重大事故がこの土地で起きるのではないかと不安に思う今日この頃です。他力本願では情けないとおっしゃるかもしれませんが、こういう時だから、もっと活躍していただきたいかつたと思つてしまいます。「私は？」私はどうしたらよいのでしょうか。とりあえず、「わが身を守るのが一番大事」という身勝手イズムがもっと広まるように努力を続けるつもりです。そのために氣象学を少し詳しく勉強するつもりです。それと簡易型測定器の開発の問題ですね。どちらも長年の課題なのにほとんど何もしていません。そんな悠長なことではとおしかりをうけるかもしれませんがまずは一歩ずつ。バラ色の未来を信じて、とはいかないかも知れませんが、理想がなければ希望もないのでとにかく理想って何かと考えながら残された人生で微力を尽くしていこうと思えます。それでは、これから私たちを暖かく見守っていて下さいますようお願い申し上げます。

敬具

一九九五年七月二十三日

## 瀬尾 健さん追悼

日本獣医畜産大学・数学教室 関田 英太郎

瀬尾 健さんとは熊取の京大原子炉実験所で行われる原子力安全ゼミに出席するようになってから知り合った。

当時は大阪府立大学の数学教室に勤務していて、数学ばかりやっていたので、原子力工学の方は全く素人だったが、安全ゼミでは専門的なことも素人に分かるようにしてくれて、白熱した議論がかわされ、大層刺激されるが多かった。

時には泊り込みで出席し、ゼミのあとの宴会に加えてもらったりしていた。

瀬尾 健さん（私はこの名前をつい、セオケンさんと思ってしまう、スミマセン）も幾度か講演され、それをさらに発展させ、此度、遺稿「原発事故：その時あなたは！」として上梓された。

真摯な瀬尾 健さんが好きだった。

東京へ移って数年後に、反原発新聞で彼の訃報を読んだ時は茫然となった。

彼がチエルノブイリから帰ってこられた直後、腰痛を訴えて居られたので、同病相憐れむで、整体術のオステオパシーを薦めたことがあった。オステオパシーというのはカイロプラクティックのように強い力を加えるのではなく、術者が患者の筋肉を静かに動かし、偏った筋肉の緊張を変化させ、それによって関節のずれを直そうとする整体術で、私が手術が原因で腰痛になった折、カイロプラクティックとオステオパシーの両方で治療を受け、各々の効果を比較して、オステオパシーが一番良かったのである。熟練した術者は治療

しながら、内臓の疾患を発見したりする。日本の整形外科ではまだ取り入れていないようだが、充分合理的な治療法であると思っている。

しかしながら、瀬尾さんは「当分、我慢する。」という返事を寄こされ、その後少し症状は治まった様だったが、この頃彼は病魔に冒され始めていたのだろうか。

瀬尾さんとの些細な会話を思い出す。

お互いに子供がアトピーに悩まされていることを知り、部屋の壁のカビが原因だろうかなどと話し合った。この件はずっと気になっていて、DNAレベルでの抗原抗体反応の機構を調べたりしていたのだが、その後、基本的にダニとその死骸が抗原となること等が分かってきたことを知り、瀬尾さんに会ったら、それを知らせようと思っていた。

京都での追悼会の折、彼の御子息に会うことができたので、アトピーの原因と対策を伝えたことだった。

さらば、瀬尾 健さん。

我々はかけがえない友人を失ってしまった。

一九九五年七月三〇日

## 瀬尾さんをしのんで

名古屋大学・理学部・化学科 古川 路明

一九六六年に渡米し、シカゴ大学のエンリコ・フェルミ研究所のシュガーマン教授の博士研究員として「高エネルギー核分裂の放射化学的研究」に従事していた私は、一九六八年八月に帰国し、名古屋大学理学部に赴任した。在米中の体験は、後から振り返ると貴重であった。三個の原子爆弾をつくった「マンハッタン計画」の中で化学部門のグループリーダーの一人であったシュガーマン教授との対話は、核兵器製造に寄与した科学者の苦悩を種々の形で伝える結果となることしばしばであった。キング牧師、ロバート・ケネディ上院議員の暗殺、ベトナム戦争の泥沼化などに代表されるこの時期のアメリカ合州国の世の動向は、明るいニュースであるはずの「アポロ計画」の進展とその影響についてもその問題点に注目せざるを得ない情況に私を追い込んだ。原子核・原子力の研究の将来の進め方も考え直さねばならなかった。

将来への展望が開けないままに時が過ぎていった。翌一九六九年の夏、京大原子炉実験所のホットラボ部門に出入りし、「核整列」に関係する実験をお手伝いした。その当時は真剣に学問の在り方が問われた時代ではあったが、名古屋における大学院学生との議論の内容には物足りない感じが残っていた。そのような時に、実験所の食堂に貼られたビラの中で真剣な問題提起と議論がなされているのに大変感心した覚えがある。その最後の署名の中に「瀬尾健」の名を見いだしたのが瀬尾さんを知った初めであった。

その後縁があつて「原子力安全グループ」の人たちとつき合うようになって、多くを教えていただきながら現在にいたっているのは私にとって大変うれしいことである。グループのメンバーの人たちはみな優秀で、仕事に厳しかったが、その中でも瀬尾さんの頭のよさと厳しさは際だっているように思われた。国際的に知られる優秀な実験核物理学者としての面はいうにおよばず、原子炉の安全問題の解析についても中心的な役割を果たしていた。その一方で、前著「チエルノブイリ旅日記」の中に表れている鋭敏な感覚とすぐれた文才にも深く感動した。遺作となつた「原発事故…その時、あなたは!」は、多くの問題を提起している、他に例をみない労作である。この本については、何か手伝えるかもしれないと安請け合いしながら、結局何もできなかったことが私としては大変心残りである。

熊取グループの人たちとつき合うようになって、自分に何ができるかを自問自答する習慣がついたように思う。結局のところ、若い頃から手がけてきた「放射化学分離をとまなう放射線測定」が自分にもっとも適した方向であると再認識し、そのような仕事をしながら、後の世代に伝え得るものを残したいと考えるようになった。つい最近手にした試料は台湾で発見された放射能で汚染された鉄筋である。この試料の中には一グラムあたりコバルト・六が・一マイクロキュリー（三・七キロベクレル）含まれ、この鉄筋を用いたマンションの住人に健康上の被害が生じてようやく重大な事実が明るみにでた。建物の完成から約一〇年が経過していることを考えると、完成当時はこの四倍の放射能が存在したことになる。化学的に分離した後この汚染の原因は医療用などに用いられた密封線源の鉄材中への混入と断定できると思う。放射性物質の不適当な取扱いを示す顕著な事例であり、日本にとつても教訓的な事件であらう。

この一年の間にいろいろなことが起こつたが、特に公衆に対する猛毒物質、サリンの使用は、私に強い衝撃を与えた。「松本サリン事件」の直後に「日本化学会」がなすべきことは多かつたと思う。ある特定の人々が容疑者にされ、極端な報道が連日なされている中で、責任ある化学者が「報道されているような条件では

サリンはつくれない。」と発言すれば、事態にかなりの影響があったはずである。日本の化学者一般のこの事件に対する傍観的な反応は、現在もなお続いている。マンハッタン計画に従事した多くの化学者が、シラードが起草した日本への原爆投下中止を求める請願書に対して、「われわれの決定すべきことは、原爆を使用するのと、使用しないのと、どちらがより多くの生命を救うことになるかということだけだ。」と主張して、署名しなかったとのシラードの「回想」を思い起こさせる機会にもなった。有機合成化学とは専門が大きく異なる私ではあるが、化学者としての責任は逃れられないと感じている。化学者以外の自然科学者にとっても、今後は似たような課題に遭遇することがあることと思う。

六十二歳を越えた私ではあるが、瀬尾さんから伝えられた多くのことを思い起こしながら、残り少ない職業人としての生活を真剣に過ごしたいと考えている昨今である。

## 正真正銘の個人主義者

久米 三四郎

瀬尾さんが肺がんに冒されていると、海老沢さんから知らされたのは昨年四月二十二日でした。うつろな思いで受話器を置いてまもなく、後悔の思いに襲われました。数年前から、首から肩にかけての痛みに悩んでいる、と瀬尾さんから聞いていたのに、それが肺がんの兆しではないかとは全く思ってもいなかったからでした。一昨年の秋に、近所のおじさんが、同じような痛みが続いた後に肺がんと診断され、間もなく亡くなってからも、瀬尾さんの痛みと結びつけることができなかったのです。

瀬尾さんに電話する勇氣も出ず、放心のまま、瀬尾さんから送られてきていました「チエルノブイリ旅日記」の分厚い原稿を眺めたり、先日出版された「原発事故：その時、あなたは！」に登場する瀬尾さんの計算ソフトをあてもなく起動させたりする日がしばらく続きました。そして、二〇年以上もの瀬尾さんとの付き合いの中で、どうして瀬尾さんに惹かれていたのかを、記憶を辿りながら考えていました。

私が瀬尾さんを知ったのは、京都大学原子炉実験所の「六人組」の他の人たちと同じように、日本で初めての原発訴訟だった伊方1号機訴訟について、原告の住民側の助っ人になってほしいと、二十二年前にお願いした時でした。はじめての頃は、取っ付きの悪い研究者肌の人、という印象が強かったように思います。そして、原発発動についても、醒めた姿勢で対応しておられるのではないかと考えていました。しかし、それは間違った第一印象だったことが、追いつきりとしてきました。

瀬尾さんの真髄に触れた最初の出来事は、十六年前に起きたスリーマイル島原発事故の時でした。事故直

後の情報は、もっぱらアメリカの原子力規制委員会（NRC）や電力会社の報告書でしたが、その内容は区々で信頼性も低いものでした。そうした状況の中で瀬尾さんは、事故原発から周辺環境に流出した気体状放射能の量を、ごく限られた公表データから推定する仕事に取り組み、NRCなどの公表値より桁違いに大きい放射能量をいち早く公表されました。私は、正直言って、その大胆さに驚き、大丈夫かなと思っっていました。しかし、やがて、瀬尾さんの推定値は、NRCの内部資料にも引用され、数年後にペンシルバニアで開かれた周辺住民の放射線被曝検討会議でも、アメリカ国外からの数少ない報告の一つとして登場しました。

そうした瀬尾さんの鋭い感覚は、九年前に起きたチェルノブイリ原発事故の際にも遺憾無く発揮されました。事故原発からどれぐらいの放射能が流出したのか、ということについては、事故直後には旧ソ連当局発表のうさん臭いデータ以外には全くありませんでした。そうした状況の中で瀬尾さんは、「六人組」の人たちの協力のもとに、旧ソ連国内外の地上に落下した各種の放射能の公表データを丹念に集め、それらを巧みに利用して、揮発性の異なる放射能ごとに、事故時に原発から流出した放射能を推定するという仕事をやってのけたのです。そして今度も、その後ロシアで公表された推定値に近い数値だったのです。

こうした瀬尾さんのすぐれた仕事は、並みでない科学者の資質を示していますが、同時に、原発に対する瀬尾さんの基本的な考え方に根ざしていると思っっています。伊方原発1号機訴訟を科学面から支援する目的で一九七六年に出版された「原発の安全上欠陥」という書物に、瀬尾さんは海老沢さんと連名で「炉心溶融時の災害評価」という報告を寄せておられます。一九七四年にアメリカ原子力委員会は原子炉事故時の災害を推定した報告書、いわゆる「ラスムッセン報告」を草案として公表していました。瀬尾さんたちはその内容を仔細に検討し、同報告書に採用されている手法によって、伊方原発で炉心溶融事故が起こった場合には、環境にどのぐらいの放射能が流出し、その結果、周辺住民がどれぐらいの放射線災害を蒙るかを具体的に算

出されました。当時はまだパソコンも登場していなかったために苦労も多かったと思います。このお仕事を通じて、瀬尾さんは、恐らく、原発が許しがたい産業施設であることを実感されたのではないでしょうが。

ラスムッセン報告は、原発が重大な事故を起こした時の破局的な災害を評価することが目的ではなく、そうした災害を引き起こすような事故の発生確率は実際上ゼロに等しく、原発は社会的に安全な施設と評価できる、ということを宣伝するために公表されました。しかし瀬尾さんは、環境に流出した放射能がもたらす破局的な災害については、かなりの確かさで推定できるが、事故発生の際の確率を推定する根拠はきわめてあやふやで、むしろ「発生確率はゼロでなければならない」という願望を数字で表わしたものにすぎず、多くの人たちに「破局的災害の物語りは絵そらごと」と思い込ませる悪質な方便である、と見通されたのに違いありません。スリーマイル島とチェルノブイリの両事故について環境に流出した放射能の量と行方をいち早く追究されたのも、また法廷で住民側の証人として立たれた時も、あるいは各地での学習会で話された際にも、瀬尾さんの原動力となっていたのは、原発事故に対する厳しい考え方だったと思います。そして、その考え方に沿った主張を集大成されたのが、死の直前まで校正の朱を入れておられた「原発事故…その時、あなたは！」だったのです。

自らの基本的な考え方を貫かれた瀬尾さんの生き方は、科学の分野だけではありませんでした。瀬尾さんは、京都と大阪の間にある高槻や茨木から、大阪府南部の熊取にある職場まで往復四時間かけて通勤されていました。私も高槻に住んでいて、たまに熊取まで出掛けることがありましたが、往復だけでぐったりさせられました。それで、瀬尾さんが高槻から近くの茨木に転居された際に、どうしてもっと職場に近いところに移れないのか、と尋ねたことがありました。瀬尾さんは「ワイフの職場が京都なので、ふたりの職場の中間に住むことにきめているのです」とこともなげに答えられました。そして、瀬尾さんは「重い資料を



於「瀬尾健さんを偲ぶ集い」、1995年7月1日

かついで満員電車に乗るのはしんどい」と話されることはあっても、職住が離れていることについて愚痴を口にされたことは、私の記憶にはありません。

瀬尾さんは、私が経験した限りでは、数少ない真正正銘の個人主義者だったと思っています。冷酷であっても冷酷とは無縁で、自身に忠実であつても利己主義者でないことは、瀬尾さんと付き合つたことがなくても、「チエルノブイリ旅日記」を読んだ人たちなら同意していたでしょう。お葬式の最後に、奥さんの赫子さんが「まっすぐに、純真に生きたひとでした」と、心を込めて贈られた贅辞の中に、瀬尾さんの生き方のすべてが言い表わされていたと思います。

予想外に早い瀬尾さんの旅立で、あちらこちらに大きな穴があきました。正直言つて、それらを埋め合わせることはむづかしいと思います。ただ、瀬尾さんを知る人々にとつて、瀬尾さんを失つた衝撃が大きいほど、それぞれが、瀬尾さんが物心両面で残した遺産に問いかけながら、それぞれのやり方で瀬尾さんがやり残した仕事を進めていかれることでしょう。

瀬尾さん、さようなら。

# かぜ

京都大学・工学部

河野 益近

かのひとが かぜをして かたりかける

きが くさが はなが こたえる

ひとはただ かぜのなかに たたずむ

ときが とまる

(合掌)

## 瀬尾さんのこと

大阪大学・工学部

尾崎 充彦

瀬尾健さんのこと。このところずっと、ワープロの前に座ったり、机の上の紙を前にしたりして、考えている。考えているというより、ぼんやり想っている。のっけから空々しい話になってしまったが、別に格好をつけているわけではない。どうにも文章にならないだけなのだ。いろいろの出来事が頭の中をふわふわ漂って見えるが、文字にしようとする、すっと消えてしまう。それで、しかたなくこうしている。

頭の中に現れたり消えたりして漂っているシーンの中で、何故か現れる頻度の高い、瀬尾さんの姿がある。海水浴姿で、白い登山帽をかぶり、年相応にそばかすの浮きでた肩に日除けの手ぬぐいを羽織り、右手におもちの網を持ち、左手に小さなプラスチックのバケツを下げたスタイルである。これは京大原子炉六人組が、和歌山県日高町方杭の浜一己さんが営む民宿で催す夏の合宿での一場面である。六人組の合宿は、二泊三日ほどのレクリエーションを兼ねた勉強会ということで、昼間は家族を含めたレクリエーションに当てられる。浜さんの営む波満の家は、さほど大きくない入江の奥にある集落の中の一軒で、すぐ前が砂浜になっている。昼間はその砂浜で、子供たちも、そのおとーさんたちも海水浴だ。みながひとわたり泳いだりした頃、瀬尾さんは先のスタイルで、ばしゃばしゃと水の中を歩いて砂浜から消えて行く。砂浜を横切って、砂浜の外れの岩場の方へ行くらしい。入江の奥の砂浜の、海に向かって右側には石垣があって、その向こうには船着場がある。砂浜を左側に行くとやがて砂浜が切れて岩場の磯になり、磯が入江を取り囲んで入江の入口の方まで続いている。その入江の入口の辺り、海と陸の立場を換えていえば、海洋の方に突き出た半島の

先端部に原発がくる計画があった。砂浜はそれほど広がっているわけではないが、岩場の辺まで行くところからは個々人の識別も難しくなるし、岩陰にでもいるのか、瀬尾さんが何をしているか見たことはない。そのころ、私などは日陰に入って、子供たちやおとーさんたちが波打ち際で砂を掘って池を作ったり、砂団子を作ったりと奮闘しているのを、怠惰に眺めている。いい加減時間がたつて瀬尾さんのことなど忘れたころ、瀬尾さんは例のスタイルで、再び現れる。今度は、その左手の小さなバケツの中には小さな力ニや小さな魚が数匹入っている。なぜか大きなものが入っていたことはない。その小さな力ニや魚は、子供たちによつて波打ち際の小さな池に入れられたりする。

初めのうち私は、瀬尾さんがこれの子供たちへのサーブスのためにやっているのだと思っていた。それにしては根気のよいことである。数匹の魚や力ニの、一匹単価にすれば、相当の時間をいっきの獲物のために費やしていることになる。いくら手ぬぐいを掛けて出かけても、肩は赤く日焼けしているぐらいなのである。しかし、この行事が度重なるにつれ、これは何はともあれ、ご本人が好きでやっていることだと、私は確信するに至った。なんといっても第一に、瀬尾さんの息子たちはすでに、父親のこのようなサーブスを必要としなくなっているのである。そこで私は改めて、妙なことにえらく熱中できるものだと、半ば呆れ、半ば感心するのであった。

ところで、私はこれを瀬尾さんの特別なエピソードとして書いていくわけではない。むしろ、何故こんなことがひんぴんと目に浮かぶのか、書いている本人がわからない。あるいは、方杭の波満の家がもう一人の亡くなった人にも関わりがあるためかも知れない。といって、別に因縁話ではない。

反原発運動も長い経過をたどっている。私が知ってからでも、壮年だった人が年老いてゆき、亡くなった方も少なくない。年寄りばかりでなく、若い人も亡くなっている。そうした中で、私の身近なところで、歳よりも早く逝ってしまった人は、瀬尾さんが二人目である。一人目は、阪大理学部にいた岡村日出夫さんだった。この人がもう一人の人である。岡村さんは、岩佐訴訟の支援活動をしていたが、その仕事の合間にかけた、息抜きのレクリエーションで事故にあい亡くなった。岩佐訴訟は、原発内の被曝事故の補償を求めた日本で初めての裁判で、六人組がかかわった伊方原発訴訟の提訴から半年くらい後に提訴されている。岡村さんは釣りが好きで、私の釣りの師匠だったが、釣り船に同じお金を使うなら、原発反対の運動をしている人の船に乗せてもらった方がカンパ代わりになるだろうと、浜さんのところへ連れて行ってくれた。考えてみれば、もう二〇年近くも昔のこと、当時浜さんは、まだお腹の出ていない青年だった。

一方、六人組の方はといえば、関電が和歌山県に狙ってきた日高原発をとうとう追い出してしまった、住民の運動中で、浜さん一家は親子二代で中心的な存在だった。この運動に六人組も地域的にいっても関わりがあったはずだから、六人組の合宿が浜さんの波満の家で催されることになったのは、自然の成行きである。これも始まりは七、八年前にさかのぼるのだったか。つまり、このように妙な因縁はまったくない。

ところで、釣りの師匠の岡村さんは、もう一つの師匠でもあった。核燃料輸送の問題に関心を持つようになった私は、その事故時の災害の問題に突き当たった。この件では、六人組の小出さんと今中さんにいろいろお世話になったが、人体への影響ということでは、保健物理の先生として岡村さんにだいぶ相談に乗ってもらった。六人組らが翻訳したゴフマンの本（「人間と放射線」）もないところで、被曝線量と被害の関係にはつきりしたデータがなく、なかなか思わしい結果には到らなかったが、そうこうするうち、岡村さんから、被曝に関心があるなら一緒にやろうといわれた問題があった。内部被曝の被曝線量の計算は、素人は絶対に近寄らせないと決意して造られたかと思うほどややこしい。それで、岡村さんは、今ほどパソコンが普及していなかった当時、面倒な計算はある程度こちらでやって表がグラフを造り、あとはそれから読みとった数

字を足し算か引算するくらいで、誰でも簡便に被曝線量を評価できるようにしようとしたらしかった。そして、どうも私の教育も兼ねて、仕事を分けてくれたようでもあった。しかし、岡村さんがなくなったとき、不肖の弟子は師匠の構想を十分に理解していなかったため、折角の計画は完成しなかった。ついでに、私の釣りの方も師匠を失って挫折してしまった。

岡村さんが亡くなった頃（一九八二・七・二七）は、伊方原発訴訟は控訴審の段階で高松高裁で争われていた。そのほぼ半年後の一九八三年三月四日に、高松高裁は突然かつ強引に結審を宣告した。住民申請の十七証人を残して結審したと報道されたが、瀬尾さんはその証人の一人だった。瀬尾さんの立証事項は、伊方原子力発電所における炉心溶融の必然とその災害評価、およびスリーマイルアイランド原発事故の災害評価、となっている。スリーマイル島原発事故は一九七九年三月二十八日に発生したが、それは、伊方原発訴訟が高松高裁に控訴（一九七八・四・三〇）されてから十一ヶ月後、同一〇月二十七日に第一回の法廷が開かれてから五ヶ月後のことだった。だから、TMI事故関係の証人は控訴審で重要な役割を果たさずだったが、危機に直面した被告・国側の圧力で、裁判所はTMI原発事故から逃げて、結審してしまった。

瀬尾さんはこのTMI原発事故の放射能放出量の計算をしている。それについて、瀬尾さんの話を聞いたときは手品を見せられたような気がした。乏しいデータから絞りだした結果だから、よほど根気よく綿密に考えたのだろうか、何気ない話ぶりに、ついそう感じたのかも知れない。普段から力んだ様子を見せない人だった。

伊方原発訴訟では瀬尾さんの出番はなくなったが、高松高裁で控訴審の判決（一九八四・十一・十四）が出てから一年半も経たないうちに、チェルノブイリ原発事故（一九八六・四・二六）が起こってしまった。ここでも、瀬尾さんは放射能放出量の計算をしなければならなくなった。

TMI原発事故の頃、よく事情を知らなかった私は、瀬尾さんはずにその道の専門家なのだと思っていた。が、むしろ、TMI事故によって、瀬尾さんのやるべきことが決まったのではないだろうか。そして、事故を起こしてしまった原発の災害評価だけでなく、日本の原発が事故を起こしたときの災害予測をすることで、人々の注意を喚起して原発を停止させ、事故を予防しようとしたのだろう。パソコン時代の瀬尾さんは、日本の各原発の災害予測が簡便にできるパソコンのソフトを開発して、私にもそれを呉れた。そして、そういったことをまとめた本（「原発事故」）を残していった。その本の中に、そろそろもう一度何とかしなければと私も思っていた、核燃料輸送の事故の災害予測も入れていってくれた。小出さんが手を加えて補正してくれたということだが、このあたりの、瀬尾さんにすればおまけのような部分をやる頃には、もう瀬尾さんの身体の調子もたいへんになっていたのではないだろうか。でも、ありがたいことだった。そして、類は友を呼ぶ、というが、瀬尾さんはやはりいい仲間と共に生きてと思う。

## まっすぐに純真だった瀬尾さん

京都大学・原子炉実験所 小出 裕章

瀬尾さん

瀬尾さんが逝ってしまっただけで一年以上たちました。瀬尾さんが遺した原稿も、ようやく「原発事故」その時、あなたは！」というタイトルで出版されました。そして、一昨日は瀬尾さんを偲ぶ集いがありました。ごく近い人しか案内を送らなかったにもかかわらず、集会には七〇名近い人が集まってくれました。また、その後の懇親会に参加してくれた人も六〇名近く、さらに当日用意した宿泊施設までつきあって瀬尾さんの思い出を語り続けた人も三〇名に上りました。

今夜は、家でグラスを片手にシヨパンの「別れの曲」を聴いています。本の出版、偲ぶ会と、ひとつずつ肩の荷が下りていくのですが、当初の僕の思惑とは逆に、作業をすればするだけ、瀬尾さんの記憶がよみがえってきて、重苦しい気持ちになってしまいます。でも、瀬尾さんに笑われないように少しは元気を出そうと思っただけです。

瀬尾さんが、身体の不調を口にしたのは、昨年のものでした。咳が止まらない、体の調子が悪く、原子炉まで来るのがしんどいと度々言っていました。それでも僕は、「瀬尾さんも歳だ」と冗談半分につけて笑っていたものでした。その瀬尾さんが三月の半ばに精密検査に行くようになり、その結果、すでに肺に五センチもの陰が見られたと聞いた時は、正直言ってびっくりしました。瀬尾さんが入院された時は、夜一人でモニターアルトのレクイエムを聴きました。

でも、その後、病院で会った時はまだまだ瀬尾さんは元気で、ひよこひよこ廊下の端から端まで歩いて、僕にお茶を入れてくれました。また、瀬尾さんが家で療養していた時にも、仕事の相談に乗ってもらいたくしてお邪魔しました。その時もまだ瀬尾さんは元気そうでした。瀬尾さんが好きだったコーヒーも飲みたくないと聞き、酒も飲みたくないと聞いた時には、「それなら死んだ方がましだ」と思わず口をついてしまいました。ですが、それも瀬尾さんが元気そうであればこそでした。でも、その時も瀬尾さんは言っていました。「今元気そうに見えるだろうが、小出さんたちが帰ったら、ぐったり疲れるんだ」と。

病状の進行は余りに速いものでした。ガンの診断が確定し、主治医から後三カ月の生命と知らされてから、瀬尾さんは漢方の治療を選択し、できるかぎり自宅での闘病を希望しました。そして、生き抜くとの強い意志を保ち続けることで、免疫機能の昂進を計ろうとしたと思います。そうした闘病も肺ガンの前には効果を示しませんでした。次第に低下する体力と、ガンにむしばまれる肉体の中で、食事が喉を通らなくなり、ついには水分すら喉を通らなくなっても、なお瀬尾さんは無理に漢方の薬を飲もうとし、吐きそうになるのをくつとこらえては飲み下そうとした……。赫子さんが話してくれた情景が僕には目に見えるようです。結局どうにもならなくなって再入院することになりましたが、それでも瀬尾さんは漢方の薬を自ら飲もうとし、どうにもダメだと自ら納得してからは、一切を飲まなくなつたとも聞きました。臨終時も、血圧が次第に低下するのではなく、一気に〇になったということ、最後の力が尽きるまで瀬尾さんはあらゆる手段を使ってガンと闘い抜いたのだと思います。赫子さんは自宅での闘病を、「壮絶」という言葉で表しましたが、闘病中グチひとつこぼさなかつたという瀬尾さんの闘いも壮絶であつたでしょうし、それを支えた赫子さんの闘いもまた壮絶であつたと思います。

葬儀については、職場の訃報案内では、「無宗教にて」自宅でされるとあり、「あー、やっぱり瀬尾さん

らしいな」と僕は思いましたし、赫子さんもさすがだなと思いました。ところが、実際の告別式はキリスト教のスタイルで行われ、信仰を持たない僕にとつては、いささか違和感を感じた場面もありました。ただ、そうなりたいきさつについては赫子さんから聞いていましたし、人のつながりや成りゆきのおもしろさを感じました。きつと、瀬尾さん自身も棺の中で笑っていたのではないのでしょうか。とはいえ、歳をとつてくると涙もろくもなるのでしょうか、告別式の挨拶の中で赫子さんが、瀬尾さんのことを「出会ってからずっとまっすぐで純真だった」と評した時には、危うく涙が落ちるところでした。

人がいずれ死ぬということは十分に承知しています。それでも僕にとつての瀬尾さんの存在は重すぎたように今は思います。この二〇年ほど、僕たちは原子炉六人組として、原子力開発に反対する仕事に関わってきました。そして、六人のそれぞれには多様な個性があり、それぞれの個性に応じて活動を担いあってきました。それでも、頭が切れるという意味では、瀬尾さんは六人組の中でもピカイチでした。僕が原子炉に来た当時は、よく瀬尾さんと論争しました。瀬尾さんは原子核物理を専攻する極めて頭の切れる研究者でした。僕は、原子力を含めてアカデミズムのパラダイムに異議を唱えることを僕の使命としていました。原子力に反対する活動においては一致していても科学に対する立場では、僕と瀬尾さんは対極に立っていて、酒が入れば、いつもケンカばかりしていましたね。瀬尾さんがユーリッヒに行っていた時にも、瀬尾さんからは度々ヨーロッパ文明や科学を賛美するかのような手紙が届き、僕はいちいち反発して瀬尾さんに論争を仕掛けました。その時、僕は、瀬尾さんがますますアカデミズムの世界にのめり込んでいくようでとても恐ろしく思いました。でも、瀬尾さんは決してそんなことではないと手紙に書いてきて、そして、実際にユーリッヒから戻ってから、僕と瀬尾さんの対立はほとんどと埋められていって、瀬尾さんが亡くなる頃には科学に対

する見方において僕と瀬尾さんの間にあつた溝はすっかりなくなっていました。

でも、瀬尾さんは逝ってしまいました。瀬尾さんも知っていたように、僕自身もすでに四年ほど前にガンの疑いを受けたことがあります。僕自身、親族にガンが多い家系に属しており、いよいよ来たると思いましたが。当初は、消化器系のガンを疑われ、消化器系のガンなら、死ぬまでにはしばらくの時間的余裕があるだろうなどと思いながら、幾つかの検査を受けました。結局、ガンは見つかりませんでした。その後一年ほどして今度は、肺のX線写真に陰が見えると医師から告げられ、肺ガンならあと半年だなと思いました。それでも、僕は驚きませんでした。生命あるものは必ず死ぬ、それも死は常に生の隣にあるということは、次郎が僕に教えていってくれたことでした。その時まで、僕はガンも含めて病状の告知ということは少なくとも僕に対してはして欲しいと思っていました。僕がそう思っていた最大の理由は、死ぬまでの残り時間がわずかであるならば、それを悔いなく使いたいというものでした。しかし、肺ガンの疑いをかけられ、あと半年かと思つてみても、僕は僕の生活を変える必要を全く認めませんでした。我ながらいささか意外でもありました。でも、毎日、毎日、一刻、一刻を大切に生きて、次郎から学んで生きてきて、たとえ、一時間後に死ぬことが分かつたとしても、ただ淡々と生きればいいのかとその時に改めて思いました。僕は僕の子どもたちに何年間か一緒に遊べて楽しかったことを、連れ合いにはこの世で巡り会えて嬉しかったことを伝え、死んだ時には、もし構わなければ、シヨパンの「別れの曲」でもかけて送ってくれと頼むつもりです。今、その曲をかけて瀬尾さん、あなたを送ります。瀬尾さんが担ってきた仕事は僕には到底担い切れませんが、僕が担えるかぎりには担つてあなたの遺志を継ぎます。

(一九九五年七月三日)

## ヤクザなサイエンティスト

小出 三千恵

「三千恵さん、オタクの章ちゃんあきはヤクザですよ。」

瀬尾さんは口癖のように私にこう言いました。私たちが二〇年ほど前に京都大学原子炉実験所の官舎に新居を持った頃、実験所の敷地内にあった官舎の私たちの部屋は、ときどき六人組の集会所になりました。楽しそうにお酒を飲んで、ああだ、こうだ、いや違つ、とそれはにぎやかな時間でした。その中でも一段と大声を出して言い争っているのは決まって瀬尾さんと「ウチの章ちゃん」だったのです。そして最後には「ぼくはアカデミックなサイエンティスト、小出さんはただのヤクザですよ。」こう言って笑つのでした。私には科学的な内容は分かりませんが、瀬尾さんのいわんとするところは分かつたつもりです。「ヤクザ」という言葉も気に入っていましたし、「オタクの章ちゃん」と私をからかって、いたずらそうに笑つてさつと帰つていく姿も印象的でした。それでも、その頃は瀬尾さんと親しく話はできませんでした。そしてどんなにその場が白らけていようと、盛り上がつていようと、時間になると後を濁さずさつと帰つてしまうのです。後になって、パーティーの赫子さんとの共働きの生活や、二人の息子さん達が喘息を持つていことを知りました。子どもを持たずのんきな時間の中にいた私にはその頃の瀬尾さん一家の大変さがわからなかつたのです。しばらくして自分が子育てを始めた頃、瀬尾さん一家のたいへんさはどれほどだろうとよく思つたことがあります。それなのに瀬尾さんの口から「しんどい」とか「大変だ」とか出たのをきいた覚えがありません。

それから二〇年の間に、私にとつての瀬尾さんはどんどん変わつていきました。近づきたい「優秀なサイエンティスト」から、姿を見たらちよつとそばに行つて話を聴きたい素敵な「ヤクザなサイエンティスト」になつていったのです。毎夏の海での六人組の合宿では、コーヒ―を片手ににこにこしている瀬尾さんのそばへ行くと、音楽の話、子どもの話、薬の話、病氣の話、星の話、外国の話、と数えきれないほどの話を聴くことができました。例のからかうような笑顔で「知っていますか三千恵さん」と難しい話でも簡単に、分かりやすく話してくれました。研究至上主義のどうしようもないサイエンティストやただのヤクザではないあの瀬尾さんが逝つてしまいました。自分でも驚くほどの大きな穴が空いています。私は二〇年の間にどんどん瀬尾さんを好きになつていったのです。そのことを思い知らされました。もうすぐまた今年も六人組の合宿が日高の海で開かれます。五人になつても六人組としか私には呼べません。たぶん最後の一人になつても六人組です。最後までまわりを気遣い、瀬尾さんでなければできない仕事をし続け、多くの人に惜しまれ、愛されながら逝つてしまつた瀬尾さんバンザイ。その瀬尾さんの選び選ばれたパーティーであり続けた赫子さんガンバレ。

## 瀬尾さんと同じ職場について

京都大学・原子炉実験所

川野 眞治

人はいずれ死ぬということは、自明のことではあるが、親しい人、きらきら輝いていた人、尊敬していた人、優れた友人が思いもかけず逝ってしまうとは、無念としか言いようがない。瀬尾さんが逝ってもう一年が経つ。何か書こうと思うと躊躇してしまう。思い出すことは数多くあるが、それがつながらない。まとまった形で書き記すのはとても気が重い。

瀬尾さんと初めて会ったのは、六〇年代の半ば頃の学生時代で錦林車庫付近の薄暗い下宿であったと記憶する。煙草をふかしながら、ギターを弾いていたのが印象的であった。本格的なつきあいは、一九六九年四月私が熊取で職を得てからであった。すでに熊取で研究活動を開始していた瀬尾さんに再会する事になったからである。六〇年代末の大学闘争は、脳天気な私にもさすがに影響を与えてきた。それまでのアカデミズムの在り方に疑問をもたざるを得なくなっていたのである。この時、職場には「現代思想研究会」なるサークルがあり、瀬尾さんは主要なメンバーであった。中国の文化大革命、世界的な学生運動の高まり、既にあらわになっていた水俣などの公害問題に現れた科学技術（者）の在り方、伝統的なアカデミズムがこれらの社会状況の中で果たした役割などを単なる科学技術史ではなく、社会史の中でどのように位置付けるか。六〇年代初期には、まだ伝統的アカデミズムに対する信頼を見ることができたが、七〇年代に入るとそのあり方が根底から問われ始めていた。科学技術自体が社会を構成する重要な部分となり、ますます体制内に取り込まれた姿が顕になって来たのである。個々の議論の内容は殆ど記憶にないが、このような

議論の中でそれぞれの研究活動のスタイルを決めて行った気がする。メンバーの出入りはあったが、後にはこのグループは「六人組」と言われるようになる。

職場が原子力に関係する関係上、原子力開発の歴史、原子力技術の社会的評価、技術そのものの安全性の評価と活動が進行するには時間はかからなかった。前後して、大阪大学の久米さんから、伊方原発阻止行政訴訟の住民側の技術面のサポートを要請されることになった。なぜ住民の素朴な疑問にたいして大学アカデミズムから住民側へのかかわりはないのか。大学アカデミズムからのかかわりは通常、政府機関の委員会として住民に対抗する形、しかも情報を独占して現れる。乏しい情報の中で、具体的な安全装置や技術上の課題を検討していく内に、推進側の主張の曖昧さ、不確実な根拠、何よりも疑問にたいする不誠実な対応などは、とりわけこの国の原子力に関する学会や業界体制の不健全性を示していた。ほどなく瀬尾さんを含めて、「六人組」は伝統的アカデミズムの枠を突き抜け、反原子力を中心とした国内、国外の市民運動と深く関ることになる。このかかわりを選択することはこの業界では必然的に、客観的には少数派として生きて行くことになるのだが、肩肘を張ったわけではなく、目をまっとうに開き、ものごとを見てごく自然にこうなつたというのが本当のところかもしれない。

瀬尾さんは、伊方訴訟では専門の核物理の知識を生かし大事故時の放出放射能の評価、それによる災害評価を行った。当時は、推進側ではこのような大事故は本当に起こるとは何故か頭から考えておらず、従って、災害評価はまったくされていなかった（現在でもされていない）。国側証人として出廷した専門家が住民側から法廷で評価の根拠や、不備な点を質問されると答えられず立ち往生する始末であった。瀬尾さんは、当時米国NRC（原子炉規制委員会）が公表していた大事故モデルにAPSS（米国物理学会）モデルを参考に、伊方地方の気象条件、人口分布を加味したうえ、計算機プログラムをつくりあげて、恐るべき事故の

結果を示したのである。結局、国側が恐れをなしたのか証人としては法廷には立たなかったが、一九七九年三月に発生したTMI事故においては、放出沃素量をいくつかのTLDデータから独自に見積もり、その結果について米国TMI訴訟の証人として、今中らと米国フィラデルフィアで証言を求められたのである。さらに一九八六年四月のチェルノブイリ事故では、「六人組」の中心となって放出放射能の評価を行い、白ロシア、ウクライナ、ロシアを中心とした長期的な被曝評価を行った。これは後に、トヨタ財団からの支援を得て、白ロシアとの共同研究に発展していった。この頃から、TMI、チェルノブイリ事故を経て、原発大事故の可能性が現実のものとして認識され、現場の自治体労働者から（自治労、消防関係者など）相談を受けるようになった。特に瀬尾さんは、災害評価の専門家として自治労の自治研集会へ講師として度々招待されることになる。この時に求められた話題が進展して、最期の著作となった「原発事故：その時、あなたは！」（一九九五年六月、風媒社刊）に結実したのである。この著作のメインテーマは災害評価である。現存の原発サイトすべてで事故がおきた時の直接的な被曝死者数、長期的な被曝者数の評価、事故の広がり方と、事故後の避難の仕方を示したものである。理解を容易にするために、基礎編として分かりやすい丁寧な用語の説明が付け加えられているのは、自治研集会や市民運動での経験を踏まえたいかにも瀬尾さんらしい心遣いである。

瀬尾さんは、原発に批判的な運動に関っていたといって伝統的なアカデミズムに興味を失っていたのではない。核物理の研究では大きな評価を受け、八〇年代初期にはドイツ、ユースヒへ共同研究のため家族共々招待され、一年半ほど研究三昧の生活を家族と楽しんでいる。瀬尾さんからの手紙には、西欧の歴史とその文化の到達点、その社会のごく普通の市民生活、転じて日本社会のあり方などが論じられ、「六人組」はそれぞれの読みかたをしたものである。私が特に残念に思うのは、瀬尾さんに核物理の仕事をまとめる時間がなかったことである。科学技術を社会史の中で考えて行こうとしていた瀬尾さんだから、そのまとめ方もきつとユニークなものになっていたに違いない。残念である。

瀬尾さんの人柄を最もよく顕すものとして「チェルノブイリ旅日記」（一九九二年、風媒社刊）がある。チェルノブイリ事故後、ゴルバチョフのグラスノスチに期待して、放射能汚染の実態を知るとともに現地研究機関と共同研究の可能性を探りにソビエト崩壊の直前を訪問した記録である。白ロシア国内の驚くべき汚染の実態に触れるだけではなく、現地のごく普通の市民や現地研究者達とのさり気ない交流の中で、なぜこのような状況に立ちいたらざるをえなかったのか、崩壊寸前の混乱でソビエトが獲得した最良の部分さえ捨て去ろうとしていることなどを軽妙な会話の中で触れている。単なる行きずりの旅行者の感傷などというものではなく、するどい社会史や文化的洞察が会話の随所に感じ取れるのである。さらに一〇年後に新生ロシアが何を獲得したのか失ったのかを見たいものだと書いていたが、これはかなわぬことになってしまった。瀬尾さんは、私と同じく共働き家庭の主夫であった。戦後よい時期に教育を受けたせいも、二人とも連れ合いが仕事を持って当然、持つべきだのごく自然に思っていたようだ。お連れ合いの赫子さんは京都が職場なので、住居はその中間の茨木市ということになる。私も京都から通っていることになっていたので、行き帰りの阪和線の電車がよく一緒になった。不思議なことと同じ主夫でありながら、子供達や家族の話は余りでなかったような気がする。六〇年代に学生生活を送った者としての共通の照れがあったのか、それ以外の話題に興味があったのか。そこでの話題は、SF小説、文学作品、音楽、科学上のトピックス、社会的な運動、科学技術論などまことに広範であった。彼から出てくる言葉は、断片としてではなく一連の論理のもとによく整理されていた。彼の頭の中では、幾つもの引出があつてそこへ必要に応じて情報が格納され、引き出されるかのようなのであつた。その表現の仕方にもひけらかすではなく物静かな彼の人柄が現れていた。私

はどちらかというミスターなので、いつも聞き役に回っていたが、その会話は楽しみであった。

瀬尾さんは、ソビエトあるいはロシアに対して独特な感慨を持っていたように思える。レーニンを生んだ国、ロシア革命を成功させた国、社会主義国家へと進んでいた（と思われる）国、ドフトエフスキー、トルストイなどの文学作品、ムソルグスキーなどの民俗音楽の伝統、お互いの知識をひけらかすかのような楽しいお喋りであった。特にロシア訪問以後、ドフトエフスキー作品がよく話題になり、「悪霊」のスタヴローギン、「カラマーゾフの兄弟」の父親フォードル、長男ドミトリーに描かれたロシア的無軌道放縱性の中に人間の靈性と悪魔性とが読み取れるなどと、お互いに言い合ったものだ。いまではこの楽しみもなくなり、電車の中ではぼんやりしているか居眠りしていることが多くなった。

瀬尾さんが入院して、逆に「おいおい、しっかりしてくれよ。俺はまだやりたいことがあるんだから、簡単にはくたばらないよ」と気合を入れられたことがある。後で思えば、本人は事情を熟知した上での言葉であったと知って何もいえなくなってしまう。最後に会った時には体がしんどいのか自宅で寝転んでいた。いすべきこと、言いたいことは幾つもあったのに何も言葉に出なかった。私の、職業人生も後一〇年を残すだけになった。瀬尾さんの人柄、洞察力、実行力が常に気にかかるこれからの一〇年となりそうである。

（一九九五年八月一五日、京都五山送り火の夜）

## 瀬尾さんの思い出

川野 並子

また暑い夏が巡って参りました。瀬尾さんにお会いするときはほとんどが夏の合宿だっただけに、夏はいつも瀬尾さんのことを思い出してしまいます。

浜さんの海へゆくのに幾度か瀬尾さんの車でお世話になりました。道中で、また海でいろいろなお話を伺いましたが、いつもそれはゆきずりの断片的なお話ではなく、まとまりのある豊かな内容で、楽しく聞かせて頂いたものです。ドイツでの生活からんでは、ドイツの学校がいかに地域に開放的であるか、高槻のあたりを走るときは、中世のこの地域の武将であった高山右近について、クリスチャンであったことの運命また淀川の運送のことなども交えたとても詳しく、多分私にも分かるお話を選んで下さったのだろうに、遊び疲れて半分も頭に入らなかつたことを申し訳なく思ったりもします。

その中で、一番多かつたお話は暁君と仁史君のことでした。お子へはずいぶん厳しい目で見ておられるようでしたが、病氣のことを本心に心配しておられました。でも先日「瀬尾さんを偲ぶ会」で久しぶりにお会いしたお二人を見て、随分しっかりかと、且つ元氣そうに成長されたと思いました。

瀬尾さんは私達と同じように共働きを続けられたのですが、二〇年くらい前に我が家に皆さんが集まった折りに、「いつも家を空けたままにして熊取にしているのは無責任だ」式のことをいって川野に議論を向けたことがありました。その頃我が子も小さく、子育て真っ最中で、思わぬ理解者に多いに気をよくしたものでした。お子達の看病もさることながら赫子さんと一緒に家事にあたっておられたその態度は見事でした。

でも赫子さんにはあと一步の子育てを託されて、事故の後遺症に見舞われ、どんなにか大変な日々を過ごされておられるかと他人事ではなく、と行って何もお手伝いもせず大丈夫かと思っただけであります。

瀬尾さんの遺稿「原発事故」その時、あなたは」を前にして小さな個人的な感慨をも越えて、もっとも必要とされている瀬尾さんが、こんなにも短い人生を終わらねばならなかったことに言い尽くせぬ不条理を感じます。心から「冥福をお祈りいたします。

赫子さんどうか「無理をなさらないで下さい。

八月六日

追記：今年も夏合宿の最後にみんなで遊んだ海岸のゴミを拾ってお別れとしました。時々しか参加していないので、記憶違いかもしれませんが、このゴミ拾いの習慣はある年に、瀬尾さんが一人で拾い始めてから毎年の行事になったように思います。

七月一日、御陰様で、出版記念会を兼ねた「偲ぶ集い」をもつことができました。御忙しい中、多数の方がお集まり下さり、また京大原子炉原子力安全研究グループの皆様を始め、多くの方にこの会のためいろいろ御尽力頂きました。心より御礼申し上げます。いろいろ思い出話をお話下さり、温かいお言葉をかけてくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。人にもち上げて頂くのを聞くのは面はゆいと結婚式を嫌がった人ですから、皆様方のお話を聞いて写真の中で苦笑していたことでしょう。

「偲ぶ」とは、「恋しく思う、なつかしむ、したう」とあります。それは過ぎ去った時や、人に対する思いをうかべる気持ちでしょう。「思い出す」のは「前のことや忘れていたことを、心にうかべる」ことでしょう。瀬尾健という人に出会って二十八年、結婚して、二十四年になりますから、数々の思い出や、いろいろなエピソードを、過去にあった出来事として、彼の生死に関わりなく、思い出します。しかし、私には彼自身を懐かしむことはできません。亡くなってまもなく一年三ヶ月になりますが、彼は、私にとって過ぎ去った人でもなく、前のこととして心にうかべる人でもありません。彼は私のまわりのいろいろなところについて、いっしょにうなずき、笑い、時には皮肉っぽい目で眺めているのです。勿論、何も言いませんが、それとて、以前からとやかく言う人ではありませんでしたから、それほど不自然に感じないのです。物理的に「いない」ことは充分承知していますが、何となく「いる」という実感が続いています。

ぎらぎら照りつける太陽の下、朝プラットホームに立ち、向かいの梅田行きのホームの溢れんばかりの人を見ると、この中のどこかにいるのではないかと目で追っている自分に気づきます。シャツを肘のところまで丁寧に折り、書類が詰まったようなショルダーバックをもった人が先に行くと思えます。家では、目を横にやれば、ソファに腰かけ、パソコンを打っていると、換気扇の音がすれば、タバコを吸っていると、思ってしまうのです。

悲しいのは、魚屋で今年一番の秋刀魚や、きれいな笹鱈を見つけた時、藍色の茄子やきゅうりのぬか漬を見た時、鱧と牛蒡の吸物を作った時、自分でおいしいと思う料理を作った時、水道の栓が壊れた時、絨毯を干す時、パソコンがうまくいかない時、土曜日に仕事から帰った時、「お笑い笑百科」を見た時、ギター曲や、いっしょによく聞いていた曲をを耳にした時、などなど……。どうしようもなく落ち込むときがあります。

亡くなる一ヶ月ほど前、集中力を欠いていたからか、三本しかない木を切っていて転落し、顔面挫傷、脳内出血というとんでもないことになったため、五ヶ月ほど仕事を休みました。その結果三叉神経を傷つけ、今も頭部前面の感覚が多少麻痺しています。が、今は、普通どおり仕事をしています。息子達も、自分の力で生きていくと思っています。彼は、「原子核にはいくな」ということを除いて、日常生活について注意することはあっても、子供達にも注文をつけたことはありません。無理に塾へ行かせたこともなく、斯くあるべしと言ったこともなく、ごくごく平凡に、質素に暮らししてきました。二人で稼いで、どこに出かけるでなし、何の楽しみもなく……。と、よく友達にからかわれました。

ただ、私たちは、遠距離通勤に加え、保育所入所に手こずり、保育所を求めて引越したり、息子達の小児喘息で病院を駆けずりまわったり、仕事以外でも忙しかったので、ドイツでのくらしの時を除けば、二人でゆつくりしたことがほとんどありません。やっと息子達も大きくなり、これから、ゆつくり、のんびり、好きな絵を見たり、音楽を聴いたり、スキーをしたり、旅をしたりできたのに……。と思うと可哀想になりま

す。

御存じのように、彼は無茶をする人ではありません。暴飲暴食は言うに及ばず、不規則な生活はしないし、毎日風呂に入り、夕食は、必ず家で食べ、好き嫌いのない人ですので、食べ物に偏ることもなく過ごしてききました。多くても一日十本、というタバコは、本人が決めていたものです。それでも連れ去られてしまったのです。しかも咳がでましたら末期だとは……。

一人の命は自分だけのものではないとつくづく思っております。どうぞ皆様ご自分の健康に十分御留意なさいますようお願いいたします。

未筆ながら、皆様方から頂いたご厚意、ご親切に心より御礼申し上げます。

#### 編集後記

瀬尾さんの記憶をできるかぎり丸ごととどめたいと、この追悼文集の作成をはじめました。しかし、言葉にならない記憶、文字にはできない記憶が多すぎ、できあがったこの文集は瀬尾さんのほんの一面をとどめるだけのものに終わってしまいました。それでも、この本を手にした方々が、それぞれに瀬尾さんの豊かで、まっすぐで、強靱な生き方を再度心に留めて下さるものと思います。

この文集に文章を寄せて下さった方々には、この場を借りてお礼を申し上げます。

一九九五年九月上旬

京都大学 原子炉実験所 原子力安全研究グループ

今中 哲二

海老沢 徹

川野 眞治

小林 圭二

小出 裕章